

絶対君を見捨てない スクーパーズ来襲編 4 るな充120%

(アニメURAHARA同人小説)

注意

この同人小説は、春奈るなが主演声優を務め、2017年秋に公開されたアニメ「URAHARA」をもとに書かれています。設定や内容はかなり変更されていますが、この小説を読む場合は、アニメ「URAHARA」をご覧になってからの方が、声の感じが掴め、より会話を楽しむことができると思います。ですので、この小説は、アニメ「URAHARA」をご視聴されてからお読みになることをお勧めします。

なお、この小説はフィクションです。実在の人物や団体などとの関係はありません。

目次

(スクーパーズ来襲編 第4巻)

第9章 ラフォーレの決闘

第10章 PARK動乱

第11章 原宿の結婚式

長野県の地下では3日目の、米国研究者を交えてからでは2日目の説明会が始まっていた。石橋教授が尋ねる。

「昨日は、ゆっくりお休みになれましたか？何か、必要なものはないですか？」

ボナダ少佐が答える。

「はい、特にありません。食事がとっても美味しいです。」

「それは良かったです。頂いた資料のマイクロブラックホールエンジンの話とワープのための測地線変形の話はとても面白いのですが、我々が理解するにはもう少し時間がかかりそうです。若い浦藤君と桐谷君はもうだいたい理解しているようですが。」

眠そうな顔しているワトソン教授も同意する。

「石橋教授がおっしゃる通り、大変興味深く、昨晩は全く寝ないで勉強しているのですが、新しい概念や数学の定理も多くて、全部を理解するには至っていません。ただ、こちらも若いオツペンハイマー君の方が理解は速いようです。」

ボナダ少佐が答える。

「そうですか。お体にはお気を付け下さい。我々は逃げる事ができませんので、お急ぎになられなくても大丈夫です。また、質問がありましたら、いつでも部屋を訪ねて来て下さい。」

ワトソン教授が答える。

「有難うございます。少し落ち着いたら、合衆国にも来て下さい。米日政府の話し合いも必要ですが歓迎します。」

「わかりました。合衆国の皆さんの反応が心配ですが、招待されれば伺います。」

「国民の方は大統領が上手に説明すると思いますので、ご心配なく。」

石橋教授が話を戻す。

「それで今日は若手とそれ以外に分けて、若手は科学技術的な面を、我々オールドタイプは、この局所銀河群の状況に関してお聞かせ願えないでしょうか。」

ボナダ少佐が答える。

「わかりました、こちらも分かれまして、ダルガ少尉が技術的な面を、私が局所銀河群のことをお話ししたいと思います。」

「お願いします。」

浦藤、桐谷、オツペンハイマー、ダルガが部屋を出ていき、別の会議室に入った。そこにも、スクーパーズが翻訳機を通して表示できる装置が置いてあった。浦藤が話し始める。

「私が司会を努めようと思いましたが、よろしいでしょうか。」

全員が同意した。

「ご賛同有難うございます。今日の勉強会ですが、ダルガさん達に書いて頂いたものを読んで勉

強するだけでは、深い理解は得られないと思います。そこで頂いたワープに関する理論を拡張して、この全員で討論したいと思いますが、よろしいでしょうか。研究することが勉強するための近道という考え方です。」

桐谷が質問した。

「浦藤さん、頂いた理論を拡張する具体的な案はありますか。」

「とりあえず、試しに一つの場合を考えてきました。この式に損失項を加えてみます。」

「なるほど。それは何とか実現できるかもしれません。」

「そうすると、今までは変形しかできなかった測地線を繋ぎ変えることができるようになります。」

「損失項がないと弾性変形だけですから、そうですね、損失項を入れれば測地線の繋ぎ変えができるかもしれません。おっしゃる通りです。」

「それで、2つのワームホールの測地線を繋ぎ変えることによって、長いワームホールを作ろうというわけです。」

「損失項がある以上、繋ぎ変えを維持するためには、エネルギーを持続的に供給する必要があります。そうですね。」

「はい、中継所みたいなものを作成する必要があります。それでも多数のワームホールをつなげて、一気に長距離をワープしようという考えです。」

ダルガ少尉が言う。

「理論上は可能そうですね。是非、検討して見ましょう。」

全く考えたこともない理論を聞いて、桐谷が口を滑らす。

「デストロイヤーズが、入口と出口に大きな基地を作って、アンドロメダ銀河と天の川銀河をつなぐ、超長距離ワームホールを使えるようにする研究をしているというのを聞いたことはありますが、損失項によって測地線を繋ぎ変える話は初めて聴きました。」

浦藤助教が尋ねる。

「桐谷さんは、デストロイヤーズの情報をどこで知ったのですか。」

「えっ、あっ。これは昨晚の夢です。ダルガさんの作った資料を読みながら、うとうとしたとき、そのような装置でデストロイヤーズが銀河系に攻めてきて、天の川銀河をめちゃくちやにする夢を見ました。」

「それは、いやな夢ですね。」

ダルガ少尉が言う。

「安心して下さい。それは不可能です。それを実現するためには、戦艦のマイクロブラックホールエンジンからのエネルギーを1万個以上集めて、そのエネルギーを束ねる必要があります。そんなエネルギーに耐える材質は、この世には存在しません。1度にワープできる距離はそのエネルギーの上限で決まっているぐらいです。」

「そうですか。それは良かったです。」

オッペンハイマーが発言する。

「我々はまだ観測する手段を持っていませんが、短いワームホールは多数あるということですので、それをうまく使ってエネルギーを束ねることはできないでしょうか。」

ダルガが答える。

「えっ、えーと、近距離エネルギー輸送にワームホールを使うのですか。それは考えてみたことありませんでした。短いワームホールならば出入り口を動かすことが可能かもしれません。うーん、短距離のワームホールの密度が極度に高い場所があれば可能かもしれません。ただ短距離のワームホールは利用価値があまりないため、それほど詳しく調べてこられなかったと思います。しかし、もしかすると過去に調べたスクーパーズがいるかもしれないので、調べておきます。」  
桐谷が心の中でつぶやいた。

「そうか、デストロイヤーズのやつらエネルギー輸送にワームホールを使っているのか。」

オッペンハイマーが、途中まで発言して口を濁して話を止めてしまう。

「ただ、浦藤さんの案の方が何といいですか、……。いえ何でもありません。」

浦藤がまとめる。

「今回の会は勉強が主目的でもありますので、損失項の話と短距離ワームホールによるエネルギー集積の可能性に関して、混ぜながらざっくりばらんに話して行きたいと思いますが、よろしいでしょうか。」

ダルガが答える。

「はい、わかりました。それにしてもすごいです。私は地球の文明・文化の採取作戦に関しては反対でした。それは、大変失礼なのですが、科学技術の遅れている星でそんなことをしても何の役にも立たないと思っていたのですが、そんなことはなかったです。皆様の新しいアイデアを出してくるところに感激しました。」

それを聴いて、浦藤がダルガ少尉に願います。

「そう言ってもらえれば、うれしい限りですが、それを本星に報告されて、また採取部隊がやって来ると困りますので、内密にしておいて下さい。」

「分かりました。機会があるかどうかわかりませんが、もし他のスクーパーズと話すことがあったら、地球人は頭が悪くダメなやつばかりで、新しいものは何も生み出せないと伝えておきます。」

「それは、どうも有難うございます。」

部屋の中に笑い声が上がった。その後、損失項を技術的に実現する方法、それを維持する方法や短距離ワームホールの利用法に関して、活発な討論がなされた。

石橋教授の部屋では、局所銀河群の様子に関して話を始めていた。

「となりの部屋から笑い声が聞こえますね。いい雰囲気のようにです。こちらは、いままでダルガ少佐から伺った、50程度の銀河からなり、800万光年程度の広がりがある、これは地球の天文学からも分かっていたと思いますが、局所銀河群に関する話をまとめます。」

「はい、お願いします。」

「局所銀河群は過去には所属する銀河をすべる連合組織体があり、それぞれの銀河が平和に暮らしていた。しかし、数百年前に大きな戦争があり、各銀河が分裂するに至っている。現在、銀河群の中の大型の銀河を支配しているのは、この天の川銀河のスクーパーズとアンドロメダ銀河のデストロイヤーズ。両者は力の均衡から平和を保ってきたが、十数年前にデストロイヤーズでクーデターがあり、皇帝が変わってからスクーパーズと戦争状態になった。その戦争のため、既に数億体のスクーパーズが死亡している。現在は休戦状態であるが、戦争はいつ再開するかわからない。アンドロメダ銀河近くの中型の銀河に関する情報はない。」

「はい、もしかすると中央にはあるかもしれませんが、我々には伝えられていません。ただ、デストロイヤーズが支配している可能性が高いと思います。」

「有難うございます。天の川銀河の近くには中型と小型の銀河である大マゼラン星雲（銀河）と小マゼラン星雲（銀河）がある。大マゼラン星雲はブランエファンの一族が支配している。ブランエファンの王族は、自由に様々なものを改変できるビームを放つことができる。その力を使って、星雲全体に圧政を敷いているが、国民の王室に対する忠誠心はかなり高い。所有している艦隊規模は、スクーパーズの1/3程度である。現在は、スクーパーズと協力関係にあり、デストロイヤーズが天の川銀河に侵攻して来たときには、3個艦隊程度の援軍を送ってくる。」

「はい、王族どうしが仲が良いとの話です。」

「それは良かったです。近い銀河で戦争になったら大変そうです。と言っても、我々には1光年でも非常に遠いわけですが。」

「それについては、技術情報をお伝えしましたので、近々克服することも可能かもしれません。ただ、スクーパーズは1万隻からなる艦隊を50以上所有していますので、戦争をなさることは絶対に避けた方が良いと思います。何でも破壊するデストロイヤーズとは違います。間違えると地球一つが吹き飛んでしまいます。それに、実際話し合いも可能と思います。100を越える数の知的生命体が、スクーパーズ王室から天の川銀河内の無害通航と通商を許されています。」

「そうですか。それを聞いて安心しました。」  
ワトソンも同意する。

「本当に、新たなフロンティアが目の前に広がった感じがします。もちろん、コロンブスがアメリカ大陸に来て起きたようなことをしないことは、我々アメリカ人も分かっています。友好的に発展していきたいです。」

「はい、スクーパーズが特に感心を持っていない知的生命体が生まれなかった惑星も数多くありますので、協力は可能と思います。」

「それは助かります。」  
石橋教授が話を続ける。

「普通のスクーパーズが局所銀河群の中で情報を持っている残りの銀河は、小マゼラン星雲だけであり、この銀河は分裂状態にある。デヴィア家を中心とした勢力とヘクセライ家を中心とした勢力が、小マゼラン星雲に覇権を確立するために戦っている。スクーパーズは両者に監視団を送っているが、中立であり、どちら側にも援助していない。」

「はい。小さな銀河ですので、どちらに転んでも天の川銀河を脅かすほどの力はありません。また、彼らはゲリラ戦に長けており、出向いて直接介入するとスクーパーズが受ける犠牲も小さくありません。そのため、様子を見ている状態です。」

「有難うございます。それでは局所銀河群の話はここまでにして、これからはスクーパーズの内政に関してお話を聞きますでしょうか。」

「はい、わかりました。」

PARKの目の前の建物の隅での爆発がおさまったあと、まりはボードで爆発があったところに飛んで行った。周りを見てもりとが見えなかった、顔を上げて周りを見ながら叫んだ。

「りと。りと。どこなの？」

爆風で飛ばされたのではないかと思っ、ボードで上昇してまた周りを見たが、りと姿はなかった。

「バリエーで、無事だったらいいんだけど。」

そう思いながら、また呼びかけた。

「りと。りと。お願い、返事をして！」

しかし、返事はなかった。

「私が、りとに任せっきりだったから。」

りとが心配で涙が出てきた。

「りとなら絶対大丈夫のはず。怪我をしているかもしれないから、早く探さなくっちゃ。」

まりはもう少し遠くまで飛ばされているかも知れないと思っ、PARKの周りをボードで飛びながら探し始めた。

みさの話聞き終えたゼクルルのもとに、ガーチューンからの最後の連絡が届いた。

「スクーパーズに栄光あれ！丸野王万歳！」

ゼクルルが通信機に向かって叫ぶ。

「連隊長！連隊長！大丈夫ですか、返事をして下さい。」

しかし、ガーチューンからの応答はなかった。

「みさ王女様。ガーチューン連隊長がたった今、戦死されました。私には信じられません。王女

様は、本当に棒人間たちをスクーパーズにするために、4つの連隊の隊員の命、数千体の命を奪ってスクーパーズの情報を得ていたのですか。」

「その通りですな。」

「王女様が、その指揮をされていたのですか。」

「その通りですな。」

「王女様は、みんなのために努力される方ではなかったのですか。」

「それがみんなの、数百億のスクーパーズのためだと、父上に言われたのですな。」

ゼクルルは目の前が真っ暗になった。エビふりヤーがゼクルルに言う。

「この事実を知った以上、お前には、この作戦を手伝ってもらおう。」

「どういうことですか。私も死んで棒人間をスクーパーズにするための情報になれということですか。」

「そうではない。私はお前の活躍を見ていた。お前は近衛連隊に入る資格が十分ある。スクーパーズ王室を守る任につけ。」

「エビふりヤー様も、みんなが死ぬところをずうっとご覧になっていたのですか。」

「そうだ。」

「王女様もですか。」

みさはゼクルルの真剣さに押されながら答えた。

「そ、そうですね。ごめんですな。」

ゼクルルがエビふりヤーに尋ねる。

「近衛連隊に入るということは、他のスクーパーズ兵を殺して情報を取り出す作戦に付けたいうことですか。」

「それは近衛連隊の作戦のほんの一部だ。命をかけて王室をお守りするのが近衛連隊の任務だ。私情は許されない。」

「僕はいやだ。そんな連隊には入りたくはない。」

「それでは、私はお前を殺さなくてはいけなくなる。」

みさが口を挟む。

「やめるですな。エビふりヤー。そんなことは、このみさ王女が許しませんですな。」

「いいえ、姫様。作戦の秘密保持はスクーパーズ王の絶対のご命令でございます。ゼクルルが近衛連隊に入ると思っ、この作戦の内容を話すことに黙っていました。それを拒否するならばここで処分するしかありません。これは姫様のご命令でも覆すことはできません。でございます。」

「いやだ、僕は死んでもそんな連隊に入らない。」

「では、仕方ありません。」

「エビふりヤー、止めるですな。」

「わたくしも、自分の運命を呪います。ですが天の川銀河系のため、数百億のスクーパーズ国民のためにも、こうするしかありません。」

そう言いながら、エビふりヤーがゼクルルに襲い掛かった。

りとが落ちていく爆弾を見ていると、急に横から誰かが手を引っ張ったのを感じた。

「えっ。」

りとが驚いてその方向をみると、三羽子おばあちゃんがいた。おばあちゃんが、りとに話しかける。

「りと、お前は何をやっているんだい。」

「何をって。おばあちゃん?!」

「何だい。私を忘れたのかい。」

あたりを見回すと、そこは見慣れたさゆみんの店だった。

「忘れるわけではないけれど、おばあちゃん、何でここにいるの。」

「お前たちが、原宿の方に走っていくのが見えたから、心配で家に戻っていたんだよ。」

おばあちゃんのとおりにはさゆみんと三毛がいた。さゆみんが話しかける。

「りとちゃん、大丈夫そうで良かった。一昨日おばあちゃんがやって来て。いっしょにいたの。」

「さゆみんの店に来てから、美味しい食事にありつけたよ。」

「だったら教えてくれれば良かったのに。」

「ごめんなさい。心配するから黙ってって、おばあちゃんが。」

りとは急にガーチューンとの戦闘のことを思い出した。

「そういえば爆弾。何で助かったんだろう。」

さゆみんが答える。

「おばあちゃんが、ここに引っ張ってきたの。昔、私を助けてくれた時と同じ。」

おばあちゃんも答える。

「短距離ワームホールを開いたんだよ。少しは重力を操れるようになったんだ。お前にももうできさるぞ。」

「良くわからないけど、有難う。そうだ、もう1体黒いスクーパーズがいるんだった。みさちゃんを助けに行かないと。ごめん。話しは後で聞かせて。行ってくる。」

「あー、今度はへますんじゃないよ。」

「本当に気を付けてね。」

「行ってきます。」

さゆみんの店を出たりとはボードで、キャットストリートを渋谷の方に向かい竹下通りで西側に曲がった。

「まずはアルドアを原宿の囲いから放り出してこないよ。5秒で片づける。」

ことこのことがあるので、りとはビーム砲を壊してアルドアを原宿から放り出そうと考えていた。ビーム砲を壊せば諦めるだろうと。明治通りを渡る前に、アルドアを見つけた。さつきと同じビーム砲の横あたりを見回していた。アルドアもりとを見つけたようで、ビーム砲をりとの方に向けた。

「棒人間だ。十分引き付けてから撃とう。撃つ寸前に僕がいる左側に少しだけ照準をずらす。右に動くことはないと思うけれど、上か下に避けられたらおしまいだ。でも、それしか僕にできることはない。」

りともその意図はわかった。

「引き付けてから撃つのか。」

しかしそのときである、ことが足を引きずりながら、射線の前に横から割って入った。

「りとちゃん、アルちゃん止めて。」

りとはここでビーム砲を撃たれると、ことが危ないので、ことこの手前右側で止まった。ビーム砲の照準を自分の方にずらすために止まる位置を右側にずらしたのである。しかし、ことこも右に動いて叫ぶ。

「りとちゃん、アルちゃん、やめて。二人が殺しあう理由なんてないの。」

りと言おう。

「ことこ、そこをどいて。そこにいとことこの命が危ない。」

「私はいいの。それより、りとちゃん、やめて。」

アルドアがテレパシーでこと心に心配そうに話しかけた。

「ことこちゃん、脚を怪我をしているの。大丈夫？」

「ラフォーレの階段で転んだだけ。私は大丈夫。それより、りとちゃん、棒人間との戦闘をやめて。」

「ごめん。それはできない。でも、ことこちゃんには怪我をさせたくはない。そこをどいて欲しい。」

「ごめん。私もそれはできない。だって、そうしたらアルちゃん死んじゃうもん。」

「そうかもしれないけれど。」

「だったら、絶対にどかない。」

りとは、ことが話すことだけが聞こえた。でも、アルドアがこの状況でビーム砲を撃たないこと、ことこの体の心配をしていることがわかった。それで、ことこに対して攻撃する意思が全然ないことを察した。アルドアが翻訳機でりとに話しかけてきた。

「棒人間、失礼、りとさん、ことこさんにそこからどくように言ってくれないか。ことこさんがどいたら、二人で勝負だ。」

「アルドアさんと言っただけ。ことこ嘘じゃなくて仲が良いことはわかった。もしあなたが

私と戦えば、あなたは確実に死ぬ。でも原宿から出ていくなら絶対に攻撃しない。何にでも誓う。それに、もしあなたを攻撃したら、ここに一生口をきいてもらえなくなっちゃう。だからお願い、一度原宿から出て行って。落ち着いた後、アルドアさんだけなら、ここに会いに来てもいいから。」

「それはできない。連隊のみんなも、連隊長もお前に殺された。僕だけ逃げることはできない。再度要請する。ことこさんをそこからどくように説得してくれないか。」

「わかった。」

りとがここに硬い表情だが少し微笑みながら、話しかける。

「ことこ、絶対にうまくやるからそこをどいて。お願い、私に任せて。」

ことこは、りと在意図、殺さないでなんとかする、を理解してどうしようか迷った。りとを見ながら、一言だけつぶやいた。

「りとちゃん。」

ことこが意を決して動こうとした。りとはビーム砲のビームを真正面から受けて、そのまま砲を破壊するつもりだった。いまのサイコブレードの能力ならばできると確信していた。砲を真正面から破壊したら、さすがのアルドアも諦めるだろうと。しかし、そのとき、東側の上空から声が聞こえた。

「りと！無事だったんだ。ことこも。良かった。」

振り返ると、上空にりとを探していたまりがいた。アルドアが、棒人間への攻撃を諦めて、射撃主にビーム砲の照準を向けようとする。

「棒人間は無理でも、せめて、射撃主だけは。」

しかし、ビーム砲があまりに照準される前に、アルドアが宙をまった。りとが棒を素早く投げているのである。ことこがアルドアに駆け寄って抱きかかえる。

「アルちゃん！」

りとがここに話しかける。

「急所は外した。死なないはず。でも棒を投げなかったら、まりが。」

ことこが死にそうなアルドアに話しかける。

「急所は外したって。アルちゃん、気をしっかりして。」

アルドアは途切れそうな呼吸で答えた。

「スクーパーズコアには当たっていないから、連隊長やゼクルルなら……すぐに治りそうな怪我だけど、戦闘員でないぼくでは……だめかな。」

「何を言っているの。アルちゃんでも、絶対大丈夫だよ。何か怪我を治療する道具はないの。」

「今、自分で……やっているけど、生体データが……どん……悪くなっている。」

「私にもできることはない？」

「一晩だけだったけれど……楽しかった。ことこちゃ……と」

「私も、すごく楽しかった。昨日の晩のことは一生忘れない。だからお願い死なないで。」

「ごめん・・・」

そう言い残して、アルドアは消えて行った。

「アルちゃん！」

りとは大声で泣くことに声をかけられないでいた。

エビふりヤーがその尾で、ゼクールを打った。ゼクールは吹き飛んで反対側の店にぶつかって止まった。

「ゼクール、死にたくなければ、近衛連隊に入るのだ。」

「いやだ。王女様！王女様は四千体近くのスクーパーズ兵が死ぬのを見て、」

ゼクールがエビふりヤー目掛けて突っ込んでいった。エビふりヤーは尾で叩こうとしたが、ゼクールはそれをかわして、エビふりヤーに体当たりした。今度はエビふりヤーがコンビニの窓を突き破り、店の棚を壊しながら壁にぶつかって止まった。ゼクールは王女様の前に進み話を続けた。

「王女様。私は王女様を宇宙で一番尊敬していました。」

そう言いながら、いつも持っている王女様の写真や記事で一杯のスクラップブックを見せた。

「ずうっと、王女様は、スクーパーズ国民の幸せのために懸命に働かれている方と誤ってしまいました。それなのに、王女様を救出するために戦った数千体のスクーパーズの死を平然と見られていたのですか。」

「・・・」

「リコ2等兵とジャモチャ1等兵はこの戦いの後、結婚する予定だったんです。ゾロモ軍曹も、この戦いが終わったら、やっとの思いで手に入れたチケットのイベントに参加する予定だったみんな、命をかけて助け合いながら戦ってきた仲間だったんです。それを、そんな理由で。」

「それは、りとちゃん、まりちゃん、ことちゃんの力が尋常ではなかったからですな。本当ならば、数百体の犠牲で済ん・・・」

その言葉を遮り、ゼクールが叫んだ。

「数百体！数百体ならばいいのですか。王女様は！」

「・・・それはですな・・・地球に来たときは、数百体が死んでも仕方がないと。必要な犠牲だと・・・」

そのとき、コンビニの中のエビふりヤーが叫ぶ。

「ゼクール、もう黙りなさい。自分の立場をわきままえなさい。姫様、この兵と話をしても仕方がないでございます。たくさんの仲間が死んで、王室への恨みが高まり過ぎているようでございませう。気持ちには分らないことにはないでございませうが、王室の安全のため、私が処分する以外に方法はないようでございませう。」

「エビふりヤー、止めるですな。」

「第二形態に変身。」

エビふりヤーは第二形態になり、十メートルほどの大きさになった。

「だれがやられるか。エビふりヤー、連隊の仇だ。覚悟しろ。」

「非常に残念ですが、侍従長たるもの、王室に害をなすものは排除するほかはありません。」

ゼクールがエビふりヤーに対して、強力なビームを放った。エビふりヤーは、そのビームを尾で払った。そのままエビふりヤーは極めて高速にジャンプして、ゼクールに斬りかかる。ゼクールは横へ避けたが、少し傷を負ってしまった。

「さすがです、エビふりヤー閣下。閣下の尾は、このバリエーションをも貫通するんですね。でも動きは棒人間より全然遅いですよ。棒人間との戦闘のおかげで、今なら倒すことは可能です。エビふりヤー閣下。」

ゼクールはそう言いながら、起き上がった。

りととことこのところにまりが降りて来た。ことこはアルドアが操作していたビーム砲を手でさわりながら、まだ泣いていた。その傍らにいたりとに、まりが尋ねる。

「りと、ことこはどうしたの？」

「スクーパーズのアルドアが死んだ・・・私が殺した。でも、そうしないと、まりが危なかったから。」

「ビーム砲の脇にいたスクーパーズね。分かっている。りとは悪くない。」

「でも。」

「ことこは私に任せて。PARKに連れて帰る。普通のスクーパーズなら私でもなんとかできるから。」

「有難う。お願い。まだ黒いのが一匹いる。」

それを聞いたことこがりとの方を見て、涙を流しながら、強い調子でりとに抗議する。

「一匹って、一匹って。スクーパーズさんは虫じゃないのよ。」

りとは言い返せなかった。まりが取りなす。

「そんな意味じゃないけど、りとだって、私だって危なかったのよ。りとなんて、爆弾で死にそうだったし、私なんて蟹爪の鋏に挟まれて、りとが助けてくれなかったら真っ二つになるところだったの。」

「そうだけど。そうだけど、アルちゃんはいい人だった。いっしょに居て楽しかった。りとが返事をした。」

「うん。ことこのいう通り、アルドアはいいスクーパーズだった。そう思う。黒いやつらに騙されていただけ。それを倒してくる。」

りとはそれだけ言って、上へ上へと飛んで行った。ことこがりとに向けて叫ぶ。

「だから違う。みんなを騙しているのは、みさちゃんなんだって。」

りにもことこの声が聞こえたが、それを信じることはできなかった。りとは黒いスクーパーズたちが黒幕と確信していた。上昇していきりとをみて、ことほりとを止めようと変身した。

「りとちゃん、待って。私にその黒いスクーパーズたちと話させて！」

ことがボードで飛び立とうとしたとき、驚いたように止まってしまった。そして、独り言を言いはじめた。それを見たまりは、ことにPARKに帰ることを促した。

「ことこ、PARKに帰ろう。」

ことこから返事はなく、アマツマラを見ながら独り言を言うばかりだったため、ことこにことこのボードを持たせた。ことこは、意識がそこにないかのごとくだったが、そのボードを持った。まりは右手でことこの肩を抱いて、左わきに自分のボードを挟んで、左肩の上のリア銃を押さえながら、あたりを警戒しつつPARKの方へ歩いて向かった。

ガーチューンの死を知ったザトム1等兵とバンクス1等兵は2体で連絡を取っていた。

「バンクス、連隊長が戦死されたみたいだな。」

「それに分隊長とゴモ。」

「ワクチューンもだ。棒人間め。」

「ゼクール上等兵も、王女発見の連絡から連絡がない状態だ。」

「ゼクールは軍曹に昇進されたよ。」

「そうだった。軍曹は無事に戦艦に到着されたでしょうか。」

「そうだといいのだが。」

「あっ！ザトム、射撃手ともう一人の人間が歩いているぞ。」

「本当か。棒人間は？」

「棒人間は見えない。」

「そうか、2体でやるか。」

「ああ、少しは隊長たちやみんなの敵討ちにはなるはずだ。」

「わかった。少し先回りして待ち伏せをしよう。」

「よし、キャットストリートと竹下通りが交わるところで落ち合うぞ。あそこの防衛線は、ゼクルたちが破壊してあるから向こう側で待ち伏せできる。行くぞ。」

「了解。棒人間には気をつけろよ。」

「分かっているって。」

りとは、囲いの天井まで上がって、みさと黒いスクーパーズを必死に探した。しかし、ビーム攪乱幕が煙ついているところも多かった。そういうところは一度低空に降りて探さなくてはいけないため、なかなか見つけ出せないでいた。そして、探しながらも、ことがアルドアに最期にかけた言葉がすごく気になっていた。

『私も、すごく楽しかった。昨日の晩のことは一生忘れない。』って何？ここで、アルドアと昨日の晩、何をしてたの？？」

ゼクールとエビふりヤーの戦いが続いていた。エビふりヤーの攻撃は強力だったが、ゼクールは俊敏に動いて避けることができた。ただ、ゼクルールの攻撃もエビふりヤーの尾で弾かれ、お互いに決定打を欠いていた。みさがゼクールに向けて叫ぶ。

「止めるですな。恨みを晴らしたいならば、私を撃てばいいですな。それだけ、ひどいことをしたのは、みさですな。」

エビふりヤーが叫ぶ。

「姫様、お願いでございますから、どこかにお隠れになって下さいでございます。ここは危険でございます。姫様に万が一のことがありましたら、もしかすると王様がゼクルールの故郷をそこに住んでいるスクーパーズもまとめて、破壊してしまうかもしれないでございます。」

ゼクールが答える。

「僕一人のために、故郷を破壊するだって。何でそんな王様に仕えるんだ。エビふりヤー！」

「それは、デストロイヤーズに勝つためです。この天の川銀河の平和のためでございます。今までそのために、たくさんスクーパーズ兵が死んできたのでございます。お前はスクーパーズ兵のくせに、そんなこともわからないのでございますか。」

「そんな平和ならばいらぬ。私が王室を倒す。そして、」

「そんなことはできるはずもないでしょう。よろしい、反逆者になるといふならば、ゼクール、この星で散るがいいでございます。」

ゼクールは反逆者になると言いながらも、そばから離れずに様子を見ていて、簡単に攻撃できそうなきさを攻撃できないでいた。

「ともかく！エビふりヤーを倒すのが先だ。王女様の罪の償いはその後だ。」

しかし、そのようなことを考えながら、みさを見ていたため、反応が一瞬遅れた。エビふりヤーの強烈な一撃がゼクルールを襲った。ゼクルールは弾き飛ばされ、壁に当たった。しかし、勢いが強すぎたため、跳ね返って、ゼクルールは最大限減速したが、みさと衝突してしまった。転んだみさの悲鳴が響いた。

「きゃー。」

ゼクルールは反対側の壁で止まった。エビふりヤーが叫ぶ。

「姫に狼藉を。それは絶対に許されないことです。」

エビふりヤーは、自分が持つ最大の力でゼクルールを切り裂こうとした。ゼクルールは壁にもたれかかりながらも必死に願った。

「僕にも、棒人間のような棒と盾、ビームライフルがあれば。」

ゼクルールはスクーパーズ精神で操ることができる、棒と盾とビームライフルを想像した。する

と、ゼクルルのビームを発射する部分にかかっていたブレスレット型のアマツマラが光りだし、みさとの衝突のはずみで、みさが持っていたアマツマラがゼクルルのビームを発射する部分に引っかかっていたのである。その光はどんどんと増していった。みさが驚いて言う。

「アマツマラが光っているですな。」

エビふりヤーは驚きながらも、そのまま全力でゼクルルに斬りかかった。

「スクーパーズ王室の敵、成敗でございます。」

しかし、尾は何か固い板のような物に当たり、その反動でエビふりヤーは跳ね返されてしまった。

「何でございますか。」

ゼクルルの前に、棒と盾とビームライフルが付いたタンクのような物が浮かんでいた。

「何でございますか。あのスクーパーズ兵、ゼクルルがアマツマラで作ったと言うのでございませぬか。まさか。」

アマツマラのことを知らないゼクルルはもっと驚いた。

「願った棒と盾とビームライフルが現実になっている。何だろう。神様が授けてくれたのか。王室を倒せということか。ならば、そうするだけだ。」

そして、エビふりヤーの方をにらみながら、起き上がった。

「エビふりヤー、覚悟だ。神は私に味方した。お前を倒して王室を倒す。仲間がこんな死に方をする世界なんてまっぴらだ。」

「そんな物ができたからと言って、私に勝てると思っておりますか。返り討ちでございます。」

みさは、スクーパーズにアマツマラが使えたことに驚いていた。

「数百年前から、スクーパーズにはアマツマラが使えないという話だったですな。嘘だったですな。」

エビふりヤーが斬りかかった尾を、再度盾で受け止めた。ゼクルルは考えた。

「棒人間のように、この3つの道具を有機的に使うんだ。その上、僕はスクーパーズだ。自分自身でも強力なビームを出せる。」

ゼクルルは、盾で跳ね返ったエビふりヤーに対して、ビームライフルを発射する。エビふりヤーはそれを尾で跳ね返すが、その瞬間を狙って、棒を誘導してその先端でエビふりヤーを刺そうとする。エビふりヤーはなんとかかわす。ゼクルルはエビふりヤーがビームを避ける先に棒を配置して、連続して攻撃する。だんだんと、エビふりヤーは防戦一方になってきた。

「なかなかやるでございます。こうなったら、全力であの盾を打ち破るしかありません。」

エビふりヤーが、盾を思いっきり切り裂こうと最大限になった時に、盾が右に動いて、そこからゼクルルが自身の最強のビームを放った。

「これでどうだ。」

ビームがエビふりヤーに当たり、エビふりヤーは吹き飛ばされ、反対側の建物に当たって止まっ

た。エビふりヤーは死んではないようだったが、動かなくなつた。ゼクールはゆつくりと、みさの方に近寄って行き、棒をみさの方に向けた。下を見ながらみさが言った。

「もういいですな。父上にみんなのためと言われて、こんな仕事をするのには疲れたんですな。お前の連隊を全滅させたのは、みさなんですな。恨むならば好きにすればいいですな。」

ゼクールは分隊の、そして連隊の隊員を死にいらしめたみさに恨みはあつた。しかし、棒を構えたまま動けなかつた。コンビニの商品が道に散らかつていた。みさは、その中から一つを拾い上げて、食べた。

「このアイス、ガリガリして変わっているんですな。でもこの味、スクーパーズ星でも小さいときに食べたことがあるんですな。良く覚えていないんですな。でも、やさしい男の子に買ったもつた記憶があるんですな。夕日がきれいだったんですな。みさは、このアイスを食べているですな。その間に好きにするといいですな。」

そう言うと、みさはアイスを見ながらすこし微笑んだ。それを見ていたゼクールは棒を静かに下ろそうとした。しかし、そのときである、ゼクルルの体に衝撃が走つた。そして自分の体が建物に当たって跳ね返つてた。前を見ると棒人間が自由落下していくのが見えた。棒人間のボードが棒人間の方に向かっていった。ボードが自分に当たり、壁側に跳ね飛ばされたのである。棒人間がボードに乗ると、りととゼクールは上昇した。そして、りととゼクールとみさの上空で対峙した。ゼクールは、棒人間を睨みつけた。

「棒人間。連隊長を、ガジメ隊長を、みんなを皆殺しにしたお前だけは絶対に許せない。」

ゼクールは、実は心の中で、みさに手をかけずにすんだことにほっとしていた。そして逆に、やり場のない怒りは全てりとに向けられていた。逆に、りとは黒いスクーパーズがみさを攻撃しようとしているところを見て、自分が正しかったことを確信した。

「やっぱり、狙いはみさちゃんだったんだ。あんな小さな女の子を。絶対に許さない。みさちゃんがそばにいたから、武器が使えなかつたけど、もう容赦はしない。」

りととゼクールは、みさが互いの攻撃の巻き添えにならないよう協力しているかのように、戦闘をせずににらみ合いながら西側に進んで行った。りとは、エビふりヤーの方をチラツと見てつぶやく。

「へー、エビふりヤーも大きくなれるんだ。でも、みさちゃんを守れなければ仕方がない。」

みさが、テレパシーと人間の声で叫ぶ。

「二人が戦うことはないですな。ゼクール、死んではいけないんですな。」

その言葉は、りととゼクールにかすかに届いていたが、両者ともそれを聞く耳は持っていないなかつた。

りとは西側に移動しながら、武器を持っている黒いスクーパーズに関して考えた。

「武器を持っている。盾、棒とビームライフル。あと、本体のビーム。空中で同時攻撃をしかけ

てくるかな。」

ゼクールは戦法を考えていた。

「エビふりヤー閣下に使った戦法が効率がいい。ビームで誘導して、棒で攻撃する。そして、はじめは僕のビームで刺す。ただ、ビームはボードと棒で防がれる。あと、脚でビームを蹴るから注意しないと。」

りとがラフォーレと囲いの間、ゼクールがラフォーレの北側を通過した。

「ラフォーレを通過したとき、攻撃開始だな。どの高さから出てくる。一番下か。」

ラフォーレを通過し終わった瞬間に、棒人間のビームの攻撃があった。ゼクールは盾を使ってそれを弾いた。

「棒人間みたいに、棒で弾くのは無理だな。高い位置に上昇したのか。ビームが出るタンクとボードの一部が見えるけど、棒人間は隠れて狙撃だけのはずはない。」

そのとき、急にりとのビームが出るタンクが降下した。

「下から？下のビーム攪乱幕の中から攻撃するつもりか。予想通りだ。こっちも行くぞ。」

ゼクールはビームライフルを先に下に飛ばした。ビームで棒人間を牽制して降下を遅らせ、ビームに気を取られているうちに、後から飛ばしている棒で攻撃するつもりだった。もちろん、棒人間がそんなに簡単に倒れるとは考えていなかったが、初手としてはいい作戦と考えていた。ビームライフルが攻撃できそうな位置にきて、ビームライフルから照準のためにテレパシーで画像が送られてきた。

「しまった。」

そこに棒人間はいなかった。ボードに棒が固定されているだけだった。上を見ると、尖ったものを手に持っている棒人間がすぐそこまで来ていた。単に飛び降りるより、ずうっと速い速度で迫っていた。ビームライフルと棒は離れた位置にあったので、呼び寄せる時間はなかった。幸い盾がすぐそばに有ったので、盾を呼び寄せるとともに、自分は盾の方に移動した。りとは、ラフォーレでゼクールが見えなくなる前から、ボードにルナ銃を固定できるように準備をしていた。そして、視界が遮られると同時にボードを上昇させ、ボードと棒を固定して、ラフォーレの屋上へジャンプして屋上を走り、走りながらボードと照準は正確にできないもののルナ銃をリモートコントロールで操り、屋上の端でやっぱりを上蹴り、黒いスクーパーズに飛び込んでいったのである。

「気づかれた。盾がじゃま。」

りとは盾を蹴り飛ばし、スクーパーズに迫ろうと考えた。蹴り飛ばすことができたが、その反動で軌道がずれて、黒いスクーパーズから少し離れたところを通過していった。すれ違いざま、リモートコントロールでルナ銃を発射したが自分とゼクルールの数メートル先を通って行った。

「だめ。やっぱりモノアイディスプレイがないと照準できない。散弾はこいつには効かないし。せめてビームがこっちに来てくれれば蹴れたのに。」

すぐにりとこのボードがやってきて、りとはボードに乗り低空のビーム攪乱幕が残っているところに入っていった。ゼクールも焦っていた。

「あと0.1秒気づくのが遅れていたらやられていた。やっぱり、予想もしない攻撃をかけてくる。」

しかし、気を取り直して追うことにした。

「いや、弱気は禁物だ。それはガジメ隊長の教えだった。何としても勝つんだ。」

ただ、ゼクールはあまり低空には下がらず、少し上から2つのビームを放ちながらりとを追っていた。

「接近戦は手足がある分、向こうが有利か。」

りとは黒いスクーパーズが降りてこなかったため、対応を考えていた。

「降りて来てくれれば楽なんだけれど。ルナ銃を上にも上げて、モノアイディスプレイがなければ、正確に照準できない。上がって真つ向勝負しかないか。」

まりとことがキャットストリートに近づいたとき、アマツマラを見ながら独り言を言っていたところが、急に前を見た。そして、まりを横に押した。

「隠れて！」

二人が建物の陰に隠れる途中、スクープビームが飛んできた。しかし、二人に当たることはなかった。まりが建物の陰から前を覗いた。キャットストリートの反対側の建物の脇に、2体の普通のスクーパーズが居た。

「普通のスクーパーズが2体。あれなら私でも。」

「やめて！まりちゃん。私が話してみる。」

「話してみるって。」

「スクーパーズのテレパシーで会話することができるの。変換装置を作ったから。」

「相変わらず凄いわね。」

「だからお願い。任せて。」

「いいの？こっちを攻撃してくるスクーパーズなのに。」

「うん。本当のことを知らないみたい。話してみる。」

「分かった。任せる。でも危なくなったら撃つわよ。」

「有難う、まりちゃん。」

一方のザトムとバンクスは、

「ザトム、寸前に気づかれたみたいだ。」

「お前が大きく体を出すからだぞ。」

「お前の方が・・・いや、止めよう。どうする。」

「西側で、ゼクールと棒人間が戦っているようだ。射撃手だけなら、接近してもなんとかなる。」

「ただ、あの散弾は数が多い。」

「分かってる。建物の陰に隠れながらゆっくり近づくんだけ。」

「そうだな。そうするか。」

「行くぞ！」

そのとき、スクーパーズのテレパシーの通信があった。発信場所は、射撃手たちがいるところだった。

「スクーパーズの兵隊さん。こんにちは。私は地球人の綿紬ことといいます。」

バンクスが答えた。

「誰だ。地球人？何故、スクーパーズのテレパシーが使える。」

「私は、一度捕虜になりました。そのときスクーパーズの翻訳機を解析して、スクーパーズさんのテレパシーで会話する装置を作りました。」

「あの捕虜か。お前のおかげで、アルドア少佐が死んだんだ。」

「はい。アルドアさんには、捕虜になっている間、良くしてもらって。死なないように頑張ったのですが、力が足りなくて。」

「それはアルドアの通信を聞いて分かってはいるが、お前のせいで死んだことには変わりない。攻撃できるなら攻撃したい気持ちはある。だが、お前には抵抗しないなら攻撃するなという命令が、棒人間に殺された連隊長から出ている。それを守らないわけにはいかない。しかし、一緒にいる射撃手は違う。スクーパーズ兵を1000体以上は殺しているんだ。だから、お前が怪我をしたくなかったらそこから離れる。お前には攻撃しない。射撃手と勝負だ。」

「射撃手は、白子まりと言います。まりちゃんは、仲間と原宿を守りたいだけなんです。」

「やはりそうなのか。それも隊長たちが言っていたことだ。お前らは棒人間に騙されて、街やみんなを守るために戦っていると。もし本当にそうならば降参しろ。捕虜として扱い、取り調べはするが、正直に答えれば射撃手の身の安全も保証する。」

「違うんです。騙しているのは、みさちゃん。みさ王女様なんです。」

「戯言を言うな。みさ王女様が我々を騙すわけではないだろう。スクーパーズ王室を侮辱するならば、我々はお前たちを攻撃しなくてはいけなくなるぞ。」

「この作戦の真の目的は、スクーパーズの兵隊さんたちを私たちに殺させて、そこから取り出した情報を抽象化して、私たちをスクーパーズにすることなんです。みさちゃんのお父さんの命令だって、みさちゃんが。」

「何を言うか。」

ザトムが言った。

「そんなことが信じられるか。貴様は我々を騙そうとしているのか。目的は何だ。バンクスが言ったことを撤回して、攻撃対象にするぞ。」

「お願い、信じて。アマツマラがスクーパーズさんたちの情報を取り出すから、スクーパーズさ

んたちが霧散して消えてしまうの。逆に、りとちゃんやまりちゃん、棒人間や射撃手の方はスクーパーズ化が少しずつつ進んでいるの。」

「黙れ。そんなでたらめを言うならば、戦闘再開だ。」

「お願い、話を聞いて！本当なの。王様たちは、スクーパーズが文化を生み出せなくなったから、文化を生み出せる宇宙人をスクーパーズにするって。そういうことをずうっとしているの！」  
ことこの様子を見ていたまりはリア銃を肩に担いで準備を始めた。

「もういい。バンクス行くぞ。俺は右から行く。お前は左を進め。」

「了解だ。地球人！誰がそんなことを信じるか。連隊の仇を思い知れ。」

そのとき、もう一つのスクーパーズのテレパシーが届いた。

「ことこちゃんの言っていることは・・・本当ですな。」

ザトムとバンクスがテレパシーの発信源の方を見ると、みさ王女がキャットストリートを息を切らしながら走って向かって来るのが見えた。二体は驚きながら見つめていた。

「はあ、はあ。ごめんですな。走って息が苦しくなりましたですな・・・もう一度言うですな。ことこちゃんの言っていることは本当ですな。このみさ王女がみんなを騙っていたですな。だから、もう戦闘は止めるですな。」

ザトムとバンクスは驚いて顔を見合わせた。

ゼクルルは、地表付近を曲がりながら飛んでいる棒人間を追っていた。

「デストロイヤーズの力はまだ30分は使える。落ち着くんだ。やつは絶対に仕掛けてくる。空中の方がこちらが有利だ。しかし、どれを攻撃してくるか。武器か僕か。武器と見せかけて僕だろうか。」

りとが建物の影に入って、見えなくなった。そのまま進んでいけば、すぐに見えるはずが見えなかった。

「止まったのか？後ろに回り込むか。」

そのとき棒人間は建物の側面に沿って上昇して建物の後ろから現れた。そして、そのままゼクルルの方に突っ込んできた。

「真っ向勝負か。」

りととはビームが正確に照準できない以上、散弾が効かないこのスクーパーズには切り込んで攻撃するしかないと考えていた。ゼクルルは右に棒、左に盾、上にビームライフルを配置して、上のビームライフルをりとはに向けて連射した。りとは、左右に避けながらゼクルルに迫る。りとがビームが出るタンクを前に出した。

「ビームライフルを前に？」

ゼクルルが盾を自分の前に移動した。その瞬間、りとは上昇した。

「ライフルを先に狙うのか。させるか。」

ゼクールは自分のビームをりとに放つ。その前にりとは上下反転して、スクーパーズの方向に向かっていた。ゼクルールのビームは棒で弾き、ビームライフルの上からのビームは上下逆さまになりボードで弾いた。ゼクールはそのままりとが近づくのを待っていた。

「引き付けて、最後は棒を使おう。しかし、そんな簡単にいくか？」

りとは上下逆さまになったことを利用して、ボードを蹴ってゼクールに向けて飛び出し、ゼクルールの棒をりとの棒についているホースで巻き取った。ゼクールは、

「やっぱり、簡単にはいかない。」

盾でりとの攻撃を防ごうとする。りとは反転して、今度は盾を蹴らずに空中の盾の上に降りた。そして降りた瞬間、ゼクルールの盾を左手で持ちながら、盾の淵から右手で棒を突き下ろした。ゼクールは避けたが棒はゼクルールの端の方を貫いた。

「くっ。」

りとはゼクルールの盾を抱えながら、スクーパーズの中心に向かって棒を動かし、スクーパーズを切り裂こうとした。しかし、ゼクールは刺したところから周辺部に傷が広がるのを覚悟で、その垂直方向に動きそれを回避した。

「痛。」

ゼクールに激痛が走った。りとはゼクルールの盾から手を離して、少しだけ自由落下した。そこにボードがやって来た。りとは、すぐにスクーパーズ目掛けて上昇した。そして、スクーパーズをホースで巻き取ろうとした。ゼクールはそれを回避した。

「ビームを連射だ。」

ゼクールは、ビームライフルと自分のビームを続けざまに発射した。りとはビームライフルのビームは避けると共に、ゼクルールのビームは棒で弾いた。そして、ゼクルールの後ろにあるタンクのビームをゼクールに向けた。

「ビームか。」

盾を自分の後ろに置いた。しかし、後ろからビームは来ずに、前から棒人間が迫って来た。

「タンクは、盾を後ろに動かすおとりか。」

ゼクールは直接対抗するのが無理と判断して横に避けようとした。りとはその方向に向けて、後ろのタンクからビーム攪乱幕を発射した。ビーム攪乱幕は盾の横を通って広がり、周りが見えなくなった。

「くそー、棒人間が見えない。ここから出なくては。」

煙が薄いと濃いと濃いと濃いところがあり、薄い所を通ってでようとする、濃い所の裏に棒人間が待ち構えていた。

「やばい。棒を。」

棒人間に向けて棒を飛ばした。しかし、棒は棒人間の棒で払われた。棒人間が迫って来た。とっさにビーム攪乱幕の濃い方向に向かった。しかし、また、棒人間の棒が刺さった。さっきより中心

に近かった。

「くそー。」

と言いながら、また傷を覚悟で垂直方向に逃げた。

「速さで敵わないか。バリヤーは強力なのに、それを突き破ってくる。」  
また、煙の中をりとが迫ってくる。

「煙の中じゃ、接近戦になる。接近戦じゃ勝ち目がない。」

ゼクルルは反対側に逃れて煙から出ると、棒人間との距離を取りながら2つのビームを撃ち続けた。りとは、スクーパーズに近づこうとするが、2箇所からビームが飛んできてそれを避けるため遅くなり、スクーパーズが早めに離れてしまうため、接近することができないでいた。

みさ、ザトム、バンクスがいるところに、ことごとまりがやって来た。

「ここちやんが言ってた通りですな。王家と近衛連隊中枢が考えた今回の作戦の真の目的は、スクーパーズ兵を地球人に殺させて、そこから情報を取り出して、地球人をスクーパーズにすることなんですな。」

バンクスがみさに食って掛かる。

「それは、本当に本当ですか。スクーパーズの情報のために、分隊長、連隊長やみんなが死んだんですか。」

「そうですな。」

ザトムが尋ねる。

「2年前に私が在籍した第6連隊も壊滅しました。それも今回の同様の作戦でありましようか。」

「そうですな。その時は、みで王子が指揮したですな。」

「みで王子様が解放された時に、一緒に出てきた見慣れないスクーパーズが、スクーパーズ化した現地生命体ということでしょうか。」

「たぶん、そうと思うですな。今はスクーパーズ本星の第0研究所にいると思うですな。スクーパーズ王室はこんなことを数百年も続けてきたですな。お前たちが、みさを殺したい気持ちはおかれますな。でも、少しだけ待って欲しいですな。今回の作戦を指揮してわかったですな。こんなことは止めさせなくてはいけません。だから、止めさせることができるまで、待つて欲しいですな。」

どうしていいか分からない、ザトムとバンクスが泣き出した。みさが指示した。

「とりあえず、2体には原宿から出て、みさの指示があるまでスクーパーズは原宿に入らないように艦隊に連絡して欲しいですな。艦隊の乗組員ではたとえ千体が来ても、りとちゃん、ゼクルルは棒人間と呼んでいただけますな。今のりとちゃんだと3分もしないで全滅してしまうですな。もう犠牲者を増やしたくないんですな。」

「棒人間、そのりとちゃんというのは何者のですか。第11連隊は2分もしないうちに、一体

残らず死んでしまいました。」

「りとちゃんの強さは異常で、みさにも良くわからないですな。ただ、悪い生命体ではないですな。止めることはできるですな。だから、兵が原宿には入らないように言って欲しいですな。ただ、今話したことは、まだ秘密にして欲しいですな。」

「わかりました。この情報が広がると大変なことになることはわかります。今は秘密にしておきます。それで、王女様が入らないようにご命令されたと伝えます。ただ、王女様はどうなさるおつもりですか。」

みさはビルの間から瞬間見えた、りたとゼクルの方を見ながら言った。

「りとちゃんとゼクルの戦闘を止めてくるですな。」

「それでは王女様が危険ではありませんか。」

「大丈夫ですな。二人は私を攻撃しないですな。」

ことが声をかける。

「PARKで調べたいことがあるけれど、そういうことならば私も行くよ。」

「ことこちゃんはいいですな。今のゼクルは、ことこちゃんには構わず攻撃を続けるですな。流れ弾が当たると危険ですな。だから私だけで行くですな。」

「わかった。まりちゃんといっしょにPARKに戻っている。」

「ありがとうございます。」

みさはことこの説得にもう少し時間がかかるかと思っていて、すぐに引き下がったのが少し不思議だったが、考えている時間はなかった。そして、すぐにスクーパーズ兵に注意を加えた。

「原宿から出るときに、りとちゃんには見つからないように、代々木側を迂回して行くですな。」

「わかりました。棒人間に見つかった瞬間に命はないと思っております。」

りたとゼクルの戦いは、ゼクルが距離を取る戦法で決定打がなく続いていた。

「今のままで時間稼ぎならびできるけれど、あと20分でデストロイヤーズの力が切れてしまう。攻撃する方法を考えないと。」

ゼクルの2箇所も傷もだんだんと直ってきた。

「この薬、怪我の治りも速くなるのか。すごいな。こちらから仕掛けるか？だが、接近するとこちらが不利だ。棒人間が無理に接近してくるときにしかチャンスはない。」

りとも攻めあぐねていた。

「なかなか近づけない。でも離れない。ルナ銃が照準できればいいんだけど。チャンスが来るのを待っているのか。もう1体しか居ないんだからあきらめればいいのに。でもこいつ、色が黒くなっただけで、いつも先頭で戦ってた速いやつか。最後まで生真面目なやつ。どうする？でも、こいつだけは倒さないと、ううん、殺さないと、みさちゃんが危ない気がする。ルナ銃を至近距離から撃って、それをおとりにして近づくしか。」

りとは右前にルナ銃を飛ばしながら、自分は左前に前進した。ゼクルは、棒人間に向けてビームライフルを発射し、ルナ銃の方に盾を構えながら後退する。

「左右から来るのか。ホースが面倒だな。」

りとはビームを避けながら、ゼクルの左に向かう。そして、向きを変えて、自分とルナ銃で前からゼクルを襲うつもりだったが、それは読まれていて。ゼクルは上昇しながら前進してかわす。りとは、その位置のままゼクルを追う。

「途中で逆行するはず。今度は下か。」

ゼクルはりたとルナ銃が追いついてきたため、今度は反転しながら下降した。しかし、目の前にホースが迫って来た。前を見ると棒人間がボードの上下を反転させて下降していた。ブレーキをかけると同時に、ホースを棒で切ろうとしたが、今度は前から棒人間が、後ろからはビームが出るタンクが迫って来た。

「また、下だ。」

ゼクルが下に下がろうとすると、ルナ銃のビームがゼクルの下を通過した。

「読まれたのか。上に行くか？いや、盾もある。また下だ。」

ゼクルは降下した。りたとルナ銃はゼクルの上を交差しながら下降する。

「盾を。」

ゼクルは盾をビームが出るタンクの方に配置しようと移動させた。すると、棒人間がほぼ真上から迫ってきた。

「防戦一方じゃだめだ。こっちからも撃たなくちゃ。」

ゼクルが反転して、棒人間に連続してビームを放つ。りとはビームを切り裂きながら、スクーパーズに迫る。

「こっちのスクーパーズの方が器用だけれど、ビームはPARKのスクーパーズの方が強力だった。」

「このビームを切り裂いて来るのか。」

りとはスクーパーズがビームを切り裂く自分に気を取られている隙に、ビームが出るタンクを下に移動させ、照準は正確でないがルナ銃を発射した。

「今だ。」

ビームは不正確ながらもスクーパーズの端の方に当たって貫通した。

「後方下から。デストロイヤーズのバリヤーを一発で突破された。ビームの威力も上がっているのか。」

ゼクルは盾を下げながら、再度、棒人間にビームを放つ。棒人間は今度はボードで、ビームを受け止めて、その反動で上昇する。りとはゼクルの後ろの盾をホースで巻き取って自分の方に引き上げる。そして、盾に何発もルナ銃を打ち込む。ゼクルは焦った。

「盾を取られた。」

ゼクールは自分の方に盾を戻そうとしたが戻らなかった。りとは盾の赤くなったところを、棒で斬りかかった。ボードが真つ二つになった。先の半分は地面に落ちて行った。のこりの半分は、スクーパーズのところに戻っていった。

「半分になった盾を操作できるのか。でも、もう体を全部隠すことはできない。」  
りとは照準できないことがやはり不安だった。ゼクールは対応を考えていた。

「相手のビームライフルから全身を守るのは無理だな。でも、中心だけ守れば戦える。しかし、攻撃すると隙ができてやり返される。逃げるだけでは時間切れになる。どうする、引き付けて、刺し違えても一撃で決めないと。」

りとはまたビームタンクを左に飛ばして接近していった。ゼクールは考えた。

「これはまた前後から挟まれるパターンか。」

半分になった盾をビームのタンクからの攻撃を防ぐように配置した。りとは、ルナ銃を発射しながら、今度は下に移動する。ルナ銃のビームが時々ゼクルの周辺に当たる。

「痛いけど我慢だ。」

ゼクールはあえてビームを撃たないでいた。そして、ビームライフルと棒を自分の近くに配置した。

「どうせ当たらないし。近づいてこい。まともな接近戦じゃ敵わないけど、そっちが下なら撃ちやすいし、ボードで防ぎにくいだろう。捨て身の一撃なら。」

りともその意図は分かっていた。

「接近戦がお望みなら行くけど。ビームが2つと棒か。」

りとは上昇を開始した。ゼクールはまだ撃たなかった。十メートルぐらいに近づいたとき、ビームライフルと自分のビームを発射する。りとはその瞬間、自分のボードを蹴ってゼクルの後方に目掛けてジャンプする。

「飛べないのに何をするんだ。」

ゼクールはビームライフルをりとに向けようとするが近くて速いため照準ができなかった。すると、棒人間はゼクルの後ろにあった半分になった盾を蹴って、自分の方に飛んできた。

「このー」

ゼクールがビームを発射した。それを棒人間は棒で受ける。そして、その反動で上昇し、ゼクルのすぐ上に来た。その直前に棒人間は自分に向けてルナ銃のビームを発射していた。

「何を？そうか。」

気が付いたときには遅かった。棒人間が自分のビームを蹴り、ゼクルの中心付近に当てる。ビームが命中して動作が止まっていたゼクールにホースを巻きつけて引っ張り、その力でりとはゼクルの方に向かう。ゼクルは、

「うわー。」

叫びながら自分の棒を棒人間に飛ばす。りとは左手でその横を強く押しつけて扱う。

「ビームだ。」

自分がビームを出すと、バリヤーが弱くなりホースで切られそうだったため、ゼクルールは横からビームライフルのビームを放つ。棒人間はそれを棒で受けて迫ってくる。

「もう、自分のビームしかない。」

切れるのを承知でビームを撃とうとしたとき、目の前に棒人間のボードが飛んできて、視界を遮り棒人間が見えなくなった。

「くそー。」

そのとき、ゼクルールに上から大きな衝撃があり、ホースに強く締め付けられた。りとは棒はゼクルールのビームライフルに対処するために使っていたため、ホースを左手に持ってゼクルールをかかとで蹴ってホースを引いたのである。そして、再度、横から蹴る。

「やっぱり、このスクーパーズは切れないか。」

りとは空中でホースを解いて、空中で反転してスクーパーズの方を向き、思いつきり真下に蹴って、スクーパーズを数十メートル下のビルの屋上に叩きつけた。ゼクルールは衝撃ですぐには動けなくなった。りとはボードに乗らずにそのまま、降りてスクーパーズを棒で突き刺すつもりだった。一言つぶやいた。

「これで原宿の戦いが終わる。」

ゼクルールにもその様子が見えていたが、今までの傷や衝撃で動くことができなかったため、観念した。

「やっぱり勝てなかった。みんな、ごめん。」

しかし、棒人間が急にボードを呼んでそれに乗り、東の方を見ながら急いで棒の後ろにビームが出るタンクを取り付けているのが見えた。

「棒人間、何しているんだ？」

ザトムとバンクスが出発しようとしているとき、まりが、りとはゼクルールが戦闘している方向を心配そうに見た。すると、りとも自分の方をみているようだったので、喜んでここに言う。

「りとはこっちを見た。」

ことこもそっちの方向を見て、りとはこっちの方を見つめているのを確認して、まりに言った。

「まりちゃん、リア銃をモードフォー、ポジションセブンに設定して。」

「何？」

「バリヤー。モードフォー、ポジションセブン。早く！」

まりは良くわからなかったが、ことこの言われるままリア銃を設定した。

りとは黒いスクーパーズにとどめを刺そうとしたときに、まり、ことこ、みさの近くに普通のスクーパーズが2体いるのを発見した。

「まだいた。」

2体がまりたちのすぐ傍にいたため、急遽、ゼクルルにとどめを刺すのを中止してボードに乗り、いそいでルナボルグの準備をした。

「ビームが照準できないなら、ルナボルグが一番速い。」

そして、まりたちのそばにいる2体のスクーパーズを貫けるようにコントロールして放つ。

「ルナボルグ！」

ことがまりに言う。

「あの棒に向けて、引き金を引いて。」

「大丈夫？」

「うん、バリヤーだから大丈夫。」

まりがルナボルグに向けて、引き金を引く。すると、リア銃から7層の光の盾が、皆の前に展開した。ルナボルグがスクーパーズの前の光の盾にぶつかる。光でバリヤーの中の様子が見えにくかった。りとが叫ぶ。

「バリヤー？だったら、推力最大。まりたちには手を出させない。」

ルナボルグの後ろから、離れているりとサイコエネルギーが放出され強い光が出される。光の盾と衝突している部分からは、黄色い光が出てきた。ルナボルグが、バリヤーを1枚また1枚と貫通していく。ことがりとを見ながら必死に叫ぶ。

「りとちゃん、気づいて。お願い！」

あと1枚になった時に、バリアの下が見えるようになり、りとが気づいた。

「あのバリヤーを展開しているのはまりだ、それにこつちを必死に見ている。そうか、普通のスクーパーズはみさちゃんが話せば事情が分かるんだった。ルナボルグ、反転。」

ルナボルグは最後のバリヤーを破って、バンクスのすぐ前で止まった。バンクスは恐怖のあまり、地上に落ちた。

みさが2体に言った。

「今ですな。行くですな。」

ザトムが答えた。

「わかりました。なるべく棒人間に見つからないように原宿を出ます。ほら、バンクス、行くぞ。」

「動けない。」

「しょうがないな。分かった。俺が引っ張って行ってやる。」

そう言うと、ザトムはバンクスをスクーパービームで引っ張って、原宿の囲いの外へ向かった。

ゼクルルは傷がだいぶ治り、キックで受けたダメージもだいぶ消えてきた。そして、りととは距離を取りながら上昇してきた。それを見たりとがつぶやく。

「やっぱり、このスクーパーズは絶対に逃げない。何かあるんだろうか。」

そして戻ってきているルナボルグを、このスクーパーズに向けて誘導する。

「ルナボルグ、行け。」

ルナボルグが再度光を発して加速して、ゼクールに迫る。蟹爪ふりゃーの時より、さらに速度が増していた。

「逃げようがない。盾を！」

ゼクールは盾を呼ぶとともに、自分からも盾の方向に動いて、なんとか盾の陰に隠れた。ルナボルグが盾に当たり、先頭から盾を貫いていくが、タンクのところで止まり、そのまま盾と一緒にゼクールに迫った。ゼクールは棒の方は回避するが自分の盾とぶつかってしまう。

「うっ。」

とうめいたが、大きなダメージではなかった。

「傷はないな。」

盾をみると棒が突き刺さったまま、飛んで行っていた。

「しめた。」

ゼクールは盾をコントロールして、建物にぶつけた。棒と盾は、建物の壁を壊して止まったようだった。

りとは棒を呼び戻どそうとしたが、戻ってこなかった。

「せめて棒だけでも。」

と思い、その建物の方に行こうとする。ゼクールは逆に取りに行かせないように、ビームライフルと自分のビームを連射して行く手を阻止する。りとは棒がない状態で2方向から連射されると、避けるほかなく、建物に近づけなかった。ゼクールが建物を背にして、りとは対峙した。りとは、ペンを胸から取り出しつつ考えた。

「スクーパーズのビームとライフフルでビームが2つ。あと棒が1つ。棒は気を付けていれば大丈夫だけれど。こちらに棒がない状態では、2つのビームは厄介。接近するためにはどうする。スビードを利用するしか。」

ゼクールも考えた。

「向こうの武器は細い棒だけ。4本は持っているか。だいぶ楽になった。どうするつもりだ。脚で蹴って僕の動きを止めて、ペンでとどめをさすつもりか。あの蹴りを受けると、バリアーがあっても衝撃でしばらく動けなくなる。近距離は危険だけれど、遠距離から撃っても、ボードで防がれるか避けられるだけ。デストロイヤーズの力が使える時間もあと15分。危険だけれど、ある程度接近するしかないのか。」

ゼクールがビームを撃ち始めて、棒人間に少しづつ接近して行く。

「接近してくる。」

りとはそう考えながら、細かく動きビームを避けながら後退する。ゼクールはビームライフフルを動かしてビームを撃ち続けているが、なかなか当たらない。

「やっぱり簡単には当たらないか。」

そして、周りを見渡した時あることに気づいた。

「あっ、ここはラフォーレの上空？誘い込まれたのか。」

その瞬間、棒人間が急に上昇する。

「上昇した。真上から接近してくるのか。付き合うか？待つか？たぶん高速で降りてくる。待つか。」

ゼクールはビームライフルを左上方の少し離れたところに置いて、棒人間を見上げた。

「降りて来るならば、避けることも考えておかないと。」

囲いの天井に来て、りとはスクーパーズを見下ろした。

「行くよ。」

りとはスクーパーズに向けて急降下を開始した。自然落下より速く、ボードを使って加速してスクーパーズに向かって行った。ゼクールは棒人間に向けて前から自分のビーム横からビームライフルのビームを発射した。

「くそ、速い！」

自分のビームはボードで弾かれた。横からのビームライフルのビームは棒人間が速すぎて照準が不正確で当たりそうもなかった。棒人間は真つすぐ向かってきた。ゼクールは棒を自分の前に置いて叫ぶ。

「来い、棒人間！」

しかし、ボードが近づいてきたとき、その迫力に負けて、棒はそのままゼクールは左側に避けた。すると、棒人間がボードから自分の方に飛び出してきた。ビームライフルも棒も間に合いそうではなかった。

「僕かビームライフルを蹴り飛ばすつもりか。」

りとが叫ぶ。

「ラフォーレに叩き落とす。」

りとは肩からスクーパーズに体当たりをかましていった。ゼクールは高速で下降していた棒人間と衝突してそのまま落ちて行った。ゼクールとりとはラフォーレの天井にあいた穴を通って6階の床に激突した。しかし、その衝撃で6階の床が壊れて、りたとゼクールは折り重なって5階の床に落ちて止まった。バリアーのおかげでりともゼクールも傷はなかったが、大きな衝撃を受けていた。

「下だったスクーパーズの方が衝撃が大きいはず。」

りとはペンを取り出そうとしたが、さすがのりとも衝撃ですぐに行動することができなかった。

「衝撃でまだうまく動けない。」

折り重なった下のゼクールも動けないでいた。ゼクールは、

「何とかビームだけでも。」

と思ったが、ビームを放つことができなかった。りたとゼクールはそれぞれの武器を呼び寄せる。

「ボードのコントロールは？呼び寄せられるか。」

「ビームライフと棒をコントロールしなくちゃ。」

まず、ゼクルの棒がやってきた。ゼクルは真上からだと自分に当たるかもしれないため、一度床の高さまで降ろして、棒人間を狙うことにした。りとはようやく動けるようになった。ペンを取り出して、スクーパーズの体に差し込もうとしたが、棒が迫ってきたため、立ち上がってその場を離れた。棒はスクーパーズの上を通過していった。ゼクルもなんとか動けるようになり、その場から離れ4店舗分離れた別の店の中に隠れた。りとはボードを、ゼクルはビームライフと棒を呼び寄せた。両者ともお互いの様子を伺いながら、2分間ほど休んだ。りとは店の中にあったスクーパーズのビーム攪乱幕のタンクの方に寄っていった。

「こちらにはビームがない。スクーパーズのビーム攪乱幕を使った方がいいか。でも、余り濃くすると、相手が見えなくなる。」

りとはタンクにペンで穴をあけた。するとビーム攪乱幕が噴き出してきた。しかし、穴が小さいため一度に大量に出ることはなく、あたりがだんだんと薄く煙っていった。ゼクルにはあまり時間がなかった。

「あと10分。こちらから行くしかないな。体はだいぶ回復してきた。休んでいるときに考えた3段階の方法で行くか。」

ゼクルは通路に出た。そして、自分、ビームライフ、棒の順で前後に一直線に並んだ。りともスクーパーズが通路に出て来たのに気づいた。

「この店にすることはバレているし、店の中にいたら、ビームを撃たれ続けるだけかな。」

りとはボードを盾のように手で持って、通路に出て行った。ゼクルが言った。

「いいだろう。棒人間。お前もここで決着をつけるつもりなんだな。行くぞ、ジェットスクープアタック！」

ゼクルが棒人間にビームを放ちながら高速に接近していった。りともボードでビームを防ぎながらスクーパーズの方にゆっくりと走り寄る。5メートルぐらいになったところで、スクーパーズが右（りとの左）に避けながらビームを放つ。りとはボードでそれを防ごうとすると、正面にビームライフと棒が見えた。思わず声が漏れた。

「くっ。」

ゼクルは棒人間に向けて自分とビームライフのビームを同時に放つ。りとは盾でスクーパーズのビームをかわしながら、左足をまげて低い姿勢でなんとかビームライフのビームをかわす。ゼクルはビームライフを下げて、2発目のビームを撃つ。りとは左足を伸ばし、右足を上げてビームをかわす。棒が上からりと目掛けて接近してくる、同時に3発目のビームがスクーパーズと下のビームライフから飛んでくる。りとは右足で床を蹴って全力で前に進み、両方のビームと棒をなんとかかわす。そして、ビームライフはりとの下を、棒はりとの上を通過していった。ゼクルが叫んだ。

「いけるぞ。もう一度、ジェットスクープアタックだ。」

ゼクールから見ると、ビームが棒人間の至近距離から発射できるので、威力も高く、上半身を狙えばビームを蹴り返される心配もなかった。りとは、

「ボードはかえってじゃまね。」

と言いつつボードを壁に立てかけた。そして、ペンを胸にしまった。ゼクールは驚いた。

「馬鹿な。何をするつもりだ。盾なしで僕のこの攻撃に対抗するのか。いいだろう。行くぞ。」

ゼクールが前に進みだした。こんどは、りとも高速にダッシュした。ゼクールが叫ぶ。

「これならどうだ！」

ゼクールは右に移動しながら、左から右に自分のビーム発射口を振りビームを発射した。りとは自分の右側にビームが来た時、横にビームが振られると考えて斜め右上にジャンプしていた。右側の壁を蹴ってゼクールの方に脚から向かっていった。高速に移動する棒人間をビームライフルは横から撃つ形になりあたりそうもなかった。ゼクールは棒人間にビームを放つが、ビームはかかとで蹴り落されてしまった。りとの蹴りを避けるのは間に合いそうもなかった。

「バリアー全開。」

と叫んで棒人間の蹴りへの備えに全エネルギーを投入した。りとはスクーパーズに達した時、スクーパーズを蹴らずにその上でジャンプして、ビームライフルに向かった。ゼクールが驚いて叫んだ。

「僕を踏み台にした！」

りとはビームライフルをつかみ取ると、ゼクルールの棒が飛んでくる方に持っていた。そして、棒がビームライフルを貫通すると、ビームライフルを離した。その後すぐビームライフルは蓄積されているエネルギーのため爆発した。りとはそのまま近くの店の中に隠れた。

「あいつのビームライフルは壊せた。でもこちらが攻撃できる武器はペンしかない。何とかあいつに組みついて、急所を正確にペンで刺さないと。近づくためにはどうしよう。あいつの戦闘の目的は？それは、みさちゃんを殺すこと。何でみさちゃんを殺すのか分からないけど。何があってもあきらめない強い意志を感じる。」

りが入った店の床をみると、まりが3階から4階に向けて撃った戦車砲の弾が5階の床も貫通して穴があいていた。

ゼクールも体勢を立て直すために、一度店の中に隠れた。ゼクールはつぶやいた。

「くそー、ビームライフルを。しかし。しかし絶対に諦めるな。それがガジメ隊長の教えだ。今まで死にたくないという気持ちで邪魔をして、危険な状況だと攻撃ができないでいた。それでは棒人間は倒せない。あと7分、時間もない。死を恐れず攻撃を続けるんだ。みんなの仇を討つんだ。逃げるな。隠れるな。攻撃を続けるんだ。」

しかし、ゼクールがそう自分に言い聞かせたとき、みさがテレパシーで呼びかける声が聞こえた。

「ゼクール！戦いをやめるですな。二人が戦う理由はないですな。」

ゼクールが答える。

「戦う理由ならばあります。やつは我々の仲間を皆殺しにしました。その仇を討ちます。」

「違うですな。恨みならば、みさで晴らすですな。」

「それだけではありません。竹下通りでやつは仲間1体1体の急所を確実に撃って、怪我して動けないスクーパーズも容赦なく文字通り皆殺しにしました。1500体以上のスクーパーズが一瞬に消えてしまいました。あいつは悪魔です。そんな生物をこの銀河系に残しておくわけにはいきません。王女様、ここは危険ですから近づかないでください。」

「それはことちゃんを確実に助けるためだけですな。」

そう説明したが、みさはゼクールと遠くから話しても止めることはできないと思い、テレパシーの発信源と思われるラフォーレの上の階に急いだ。また、みさは人間の声でも呼びかけていたが、燃える音やビーム攪乱幕が噴き出す音のために、りとはみさの声が届かなかった。

ゼクールが通路に出た。

「もう時間がない。急ぐぞ。」

ビーム攪乱幕がさつきより濃くなっていた。そのとき階段の方で扉が開く音がした。ゼクールがそちらを見ると人の姿をしたものが立っていた。ただ、棒人間より小さかった。よく見ると、みさ王女だった。テレパシーの感じでは遠くのはずだったが、それは戦闘の影響かと思い直して、ゼクールはみさに離れるように言う。

「王女様、今は戦闘中です。流れ弾でも大変なことになります。大変危険ですので、下の階に隠れていて下さい。」

ゼクールはそう言ったが、みさは全く動かなかった。扉の後ろには棒人間のボードが倒れていた。ゼクールは慎重に近づいて良く見た。ゼクールが声をあげる。

「違う、これは絵だ!」

その間にも、りとはスクーパーズの背後から静かに走り寄っていた。ゼクールが棒人間に気付いた瞬間、小さく声を上げる。

「しまった。」

しかし、ゼクールが動くより早く、ゼクールは棒人間に店の壁の隅の方に蹴り飛ばされていた。壁に当たった後、振り返って後ろを見ると、棒人間が両腕を伸ばして飛びかかって来ていた。射撃は間に合いそうもなかった。また、左右が壁で逃げる方向がなかった。

「どうする?」

と考える間もなく棒人間の手下で下に落とされた。三方を囲まれ、ビームを発射する部分か、上から棒人間の左手のすごい力で押さえこまれた。ビームは発射できても、壁の方向だけだった。黒いスクーパーズを押さえこんだりとは、右手でペンを持ち急所を急いで探す。

「急所はどこ?ここ?」

隅に押し込められて逃げられないゼクルルは、

「バリヤー全開、とりあえず動け。」

と言いながら、必死にもがいた。りとは推定した急所に向かって力を込めて右手にペンを突き立てた。バリヤーは簡単に破ることができた。そして、スクーパーズ本体にペンを差し込んだ。しかし、スクーパーズが左右にもがくため、ペンがそれで急所からずれた部分に差し込まれた。りとの右手にも急所に当たった感触がなかった。

「外れた？」

ゼクルルに激痛が走った。しかし、まだ力は衰えておらず必死に抵抗していた。りとは普通のスクーパーズならば少なくとも動けなくなりそうな位置なのに、まだ力が衰えていないことに少し驚いていた。

「このスクーパーズ、やつぱり、生命力が他のより全然強い。ペンを急所の中心に正確に差し込まないと。」

ゼクルルが辺りを見渡した。

「動けない。棒はどこだ。見えない。とりあえず飛ばすんだ。」

りとは、2本目のペンを胸から取り出しながら、もがくスクーパーズを左右の膝も使って上から押さえつける。

「動かないで！あなたも何かを守るために戦っているのかもしれない。けど、最初にPARKに向かった時から、私たちはこうなる運命だったの。あなたを殺して全てを終える。私の方が少し強かっただけ。あきらめて。」

りとはここでこのスクーパーズのとどめを刺すつもりでいた。このスクーパーズを殺せば原宿での戦闘が終わる。みさのために自分がやらなくてはいけないと覚悟していた。そうして、2本目のペンをスクーパーズに刺そうとしたときに、後ろから気配を感じた。すると、ゼクルルの棒が飛んできた。りとの左側の壁に当たった。りとは棒を左脇と左腕で押さえ込む。ゼクルルは棒のスラストを使つてりとの体を左右に揺さぶる。しかし、揺さぶれながらも、2本目のペンをスクーパーズの急所の付近に今度は慎重に運ぶ。それを見たゼクルルは、

「一か八か！」

と叫んで最強のビームを発射する。壁のすぐ横で発射したら自分がどうなるか分からなかったが、他にどうしようもなかった。小さな爆発が起きて壁に穴があくと同時に、りとはゼクルルが吹き飛んだ。

「今だ。」

ゼクルルは、一度壁があったところから建物の外に出て態勢を立て直そうとした。しかし、飛ぶことはできなかった。飛ぼうとした瞬間、りとはジャンプしてゼクルルのビームを発射する部分を両手で掴んでいたのである。

「絶対に逃がさない。」

りとは、みさの安全のために何があってもここで逃がすわけにはいかなかった。りとはビームを発射する部分を両手で持ったまま、スクーパーズを床に引き落とした。そして、床のスクーパーズを膝で挟んだ後、脚を伸ばして両脚で挟んで固定した。今回は、向かい合わせだった。左手はビームを発射する箇所をつかんだままで右手は3本目のペンを取り出すために胸に持っていった。それを見たゼクルルはビームを発射するが、発射する部分を棒人間に押さえられていて、ビームは床や壁が壊れてなくなったところから原宿の空に出ていくだけだった。りとはまた右手でスクーパーズの急所近くにペンを降ろして、ペン先をスクーパーズの表面を這わせて、その感覚から急所の中心を探った。

「このスクーパーズ、中心を1ミリでも外したら死なない。」

ゼクルルはビームを放ちながら必死にもがく。

「くそー、動けない。棒人間は何をしている。スクーパーズコアの位置を探しているのか。確実に僕を殺すつもりか。」

スクーパーズはりとはが押さえつけているのにもかかわらず大きく揺れていた。そのため急所の中心に正確に探すことが無理そうだった。急所あたりを何回も差し込むかどうか迷っていたりとはが叫ぶ。

「あなたは死なないと止まらない。私と同じ。だから私がここで殺すの。一番楽に死なせてあげる。だから抵抗は止めて。お願い。」

りとは、少しでも正確にペンを差し込むために上体を前に伏せて頭や体をスクーパーズに密着させて動けなくした。上体にスクーパーズの体温が伝わってきた。ゼクルルがりとはが覆いかぶさったため周りが見えなくなった。テレバシーのコントローラを使って棒を探す。

「棒はどこだ？」

正確な位置は分からなかったが、棒は自分の後方にありそうだった。

「集中だ。エネルギー伝送開始。」

ゼクルルは全てのエネルギーを使って棒をりとはに向けて飛ばそうとした。しかし、棒に全エネルギーを注入するため、ビームが止まりゼクルルの動きが止まった。りとは、

「そのままね。」

と言ながら、ペン先をスクーパーズの表面で這わせる。ペンがスクーパーズの中心より少し上のところに来たとき、スクーパーズの表面が固くなった。りとはそこでペンを這わすのを止めた。

「ここね。」

ゼクルルはペン先がコアの真上で止まったので焦っていた。

「くっ、コアの真上だ！」

次の瞬間、りとは躊躇なく右手でペンを垂直に差し込んだ。今のりとはにはゼクルルのバリアーは何の役にも立たず、普通に差し込んだという感じだった。ゼクルルの体に衝撃が走った。

「くっ、コアに当たった。かつ、体がしびれて動けない。でも、僕のコアは・・・でも。」

ゼクールが衝撃を感じると同時に、りと右手にはペン先が固いものに当たって止まった感触があった。そして、押さえているスクーパーズの抵抗が弱くなっていった。

「急所はここで良さそう。やっこのスクーパーズを押さえ込めた。あとはこの中心にペンを差し込むだけ。」

りととはスクーパーズを完全に押さえ込んだと確信していた。スクーパーズを確実に、そしてできれば苦しませずに一刺しで仕留めるために、落ち着いて差し込んだペン先を今度は固いものの上を這わせてその中心を探った。ゼクールは情報がうまくコアから伝わらず照準がうまくできない中でもまだ諦めていなかった。

「僕を動けなくしてから、すぐに殺さないで僕のコアをいじって楽しんでるのか。棒人間。くそー、そうだ！棒を僕に向けて飛ばすんだ。僕を貫いた棒は棒人間にも。それなら照準できるかもしれない。」

ゼクールは自分自身に向けて棒を出す信号を出そうとした。しかし、ペン先からコアに当たっているためにコアから信号を出すことができず、棒は飛ばなかった。りとがペン先をコアに這わせていると、真ん中あたりに窪んだところがあった。

「ここかな。」

ゼクールはだんだんとコアからの信号が伝わらず、抵抗できなくなっていた。それでゼクールはみさの姿を思い出していた。

「王女様……。」

りととは黒いスクーパーズにとどめを刺す前、確実に動けなくするためにスクーパーズをぎゅっと抱きしめた。ゼクールは抱きしめられたことで、棒人間の体温を感じた。しかし、同時に自分の最期の時を悟った。ただ、ゼクールは静かにその時を待つしかなかった。

「ガジメ隊長、今行きます。さようなら。王女様。」

りとにもスクーパーズが完全に抵抗をやめたことがわかった。

「いい子。いま楽にする。」

自分のすぐ下で大人しくしているスクーパーズのことを考え、少しためらいもあったが、りとは決意してペンを強く握る。

「怖い？でも、もうちよっと我慢。」

りとが息を吸ってから右手に力を込めると、ペンがスクーパーズの中へすっと入っていった。りととのペンは戦艦の装甲より固いコアの壁を簡単に突き抜けて行った。りとは接している体の部分の感触でスクーパーズの全身が一度固くなったことを感じた。体を少し離し、スクーパーズの目を覗き込みながら優しい声で話しかけた。

「大丈夫？痛くはない？」

みさのために殺しはしたが、せめて楽に死んで欲しい、それはりとが本当に思っていることだった。やがてスクーパーズは柔らかくなっていき床に崩れ落ちた。ゼクールは薄れていく意識の中

で思った。

「戦艦の装甲より固いはずなのに、こんなに簡単に・・・棒人間。でも王女様が無事ならば、僕はそれで・・・」

りとはこれで原宿での戦いが終わったと思った。りとは抱いていた微かに息があるスクーパーズを離れた。そして、小さく言った。

「ごめん、私を恨んでもいいよ。でも、あなたを殺さないとみさちゃんの命が危ないから。」

立場が違えば、違った出会いもあったのかも知れないと思いつながら、りとはスクーパーズの奥深くに差し込んだペンを抜いた。

「あなたのことは忘れない。」

しかしその瞬間、ゼクルルのエネルギーが蓄えられた棒がコントロールされず飛び出していった。それと同時に、後ろから声がした。

「りとちゃん。ゼクルル。」

りとは振り向くと、みさが階段から出たところに立っていた。棒はりとは向かってこなかったが、悪いことに、飛び出た棒がりとの左の壁に当たり跳ね返り、今度は右の壁に当たった後、みさに向かつて飛んで行った。りとはみさの方に走り出しながら叫ぶ。

「みさちゃん。避けて！」

しかし、みさは驚いて動けなかった。

「・・・」

ゼクルルもみさのテレパシーを受けてその方向を見ていた。棒に向けて走っていく棒人間が見えたが、全く間に合わなさそうだった。ゼクルルが最後の力をふり絞って棒をコントロールしようとしたが、スクーパーズコアが大きく破壊されていて不可能だった。

「王女様！避け・・・」

しかし次の瞬間、どう見えても間に合いそうもなかった棒人間がみさの隣に立ち、飛んできた棒を片手で掴んだ。みさは無事だった。ゼクルルは驚きながらも、棒人間がみさを守ったところを直接見て、いろいろな意味で安堵した。

「何だ？移動する直前に空間がゆがんだように見えた。棒人間、生身でワープできるのか。」

みさが落ち着きを取り戻して、ゼクルルの方に駆け寄った。りとは予想外の動きだったがみさの少し先を伴走した。みさがスクーパーズの前で止まった。りとは二人の会話は聞こえなかった。しかし、万が一のためゼクルルの棒を持ったまま、みさの右前で警戒して立った。みさはゼクルルにテレパシーで話しかけていた。

「ゼクルル、思い出したですな。お前は、あの時のヘクルルですな。」

「はい。それで王女様を守りたくて軍に志願したのですが、王女様を・・・手にかけてよう・・・死刑がふさわしいです。」

「それは、お前が正義感が強く優しいからですな。悪いのは全部私ですな。だから死んではいけ

ないですな。」

「棒人間、0.1ミリのずれも……ありません……。最後……ちょっと……怖かった……すが、痛く……なく、うとう・安らか……心地です。みんな……会え……楽し……す。」

「ゼクルル。」

「それに、私・王室・倒す・言い……。叛逆者……。悲しむ……必要は……ません。」

「私も叛逆者になるですな。父上にこの作戦を止めるように言っ、止めないようならば、私が王室を倒すですな。その時は手伝って欲しいですな。」

「嬉し……言葉……す。王女様は思っ……。通りの王女様です……。王女様を守っ……。棒人間……。八つ当たりして……。申し訳な……。怪我がない……。良かった……。す。」

「ゼクルル。」

「王女……様、最……。お願い……。ます。」

「何ですな。何でも言うですな。」

「スクー……。お姿……。王女様……。見……。」

「わかったですな。」

みさがスクーパーズの姿に変身した。

「あの日の太陽より美しく輝いて。王女様……。」  
ゼクルルはそう考えながら消えていった。

りとは分かっているつもりではいたが、みさがスクーパーズの姿になって、少し驚きながら見ている。ゼクルルが消えた後、みさが人間の姿に戻り、涙をこぼしながらも、覚悟を決めたような毅然とした表情でりに言った。

「PARKにもどるですな。」

「もう、みさちゃんを狙うスクーパーズもないし、歩いて行こうか。」

「わかったですな。」

悲しそうにしているみさに、りとが尋ねた。

「もしかすると、知り合いだったの？」

「3才のときから知っただですな。とっても真面目なスクーパーズだったですな。」

りとは意外な答えに驚いた。いや、本当は意外ではなかった。

「えっ本当？あのスクーパーズ……。戦っているときから、いつも危険な仕事を引き受けていて、悪人という感じはしなかった。もしかするとものすごく実直な性格で、誰かを守るために戦っているのかもしれないって感じていた。私に似ているのかもしれないって。」

「りとちゃんの言う通りですな。」

「でも、絶対に諦めないから生きているとみさちゃんが危ないと思っ。最後は可哀そうとも思っただけ、ここで私が絶対殺さなきゃって考えて、それで殺したの……。」

そんな親しい仲とは知らなかったりとは、取り返しのつかないことをしてしまったんじゃないかと思って、少し青くなった。しかし、みさは真剣な顔をしていたが、怒ってはいないようだった。そして静かに言った。

「あのスクーパーズはゼクールと言うですな。ゼクールは最後はりとちゃんに殺されようと、りとちゃんを攻撃していたですな。だから、りとちゃんは悪くないですな。」

「ゼクール？私に殺されようと？」

「そうですね。みさはりとちゃんもゼクールも騙していたですな。可愛そうなことをしたですな。みさはみんなに殺されても仕方がないことはわかっているですな。でも、少しだけ待って欲しいですな。」

「何を言っているの？でも、もしかすると、ことが言っていたことが本当だったの。」

「本当なんですな。」

「王様の命令で？」

「そうですね。スクーパーズの王室はこんなことを何百年間も続けてきたですな。」

「そうなんだ。」

「ゼクールは最後にそれを知って、王室を倒そうと私を攻撃しようとしていたんですな。でも、攻撃ができなくて固まっていたんですな。」

「ちょっと待って。ということは、あの時まではあのスクーパーズ、ゼクールは私たちからみさちゃんを助けようと戦っていたということ？」

「そうですね。あの時に真実を知って、仲間が殺されるようにしていた私を初めて攻撃しようとしたんですな。でも、それもできなくて、どうしようもなくなって、仲間と同じように、りとちゃんに殺されようとしていたんですな。」

「ゼクール、ずうっと必死だった。アルドアも弱いくせに最後まで頑張って、ことこの言う通り良いやつだった気がする。他のスクーパーズもそうかも。」

「そうですね。みんな良いスクーパーズだったですな。それを、みんなりとちゃん達に殺されるように、みさがみんなを騙して仕向けていたんですな。」

「そう。」  
りととは戦ったゼクールや他のスクーパーズたちのことを思い出していた。みさが語気を強めて言う。

「こんなことを止めないなら、スクーパーズ王室は倒す必要があるんですな。だから、みさを殺すのは、それが終わるまで待って欲しいんですな。」

みさは本気で王室打倒を考えていた。りとは天の川銀河系を支配する王族だから、何か複雑な事情があるのかもしれないと思った。後悔の念よりは、自分が殺したスクーパーズたちに報いるにはどうしたらいいのかを考えはじめていた。

「だから、みさちゃんは殺さないって。殺せるわけないよ。よくわからないけど、わかった。み

さちゃんが王室を倒すと言うならば私も手伝う。私も、こんなことが起きるのはもういやだ。」

「みさを許してくれるんですな。」

「もちろん。こんな小さい子に、みんなを騙すようなことをさせてひどい王室とは思わけれど、みさちゃんには恨みはないよ。」

「ありがとうございます。でも王室を倒す手伝いは遠慮するですな。りとちゃんは、アマツマラを壊して普通の生活に戻って、絵を描くのがいいですな。みさは、りとちゃんの絵が大好きですな。」

「ありがとうございます。でも大丈夫？エビふりヤー、あまり頼りにならないそうだけど。」

みさは少し微笑んだ後、しっかりと言う。

「大丈夫ですな。エビふりヤーは、あれでもスクーパーズ最強の兵だったですな。」

「そうなの。単に人のいいおじさんみただけけど。」

「確かに人のいいおじさんではあるですな。ただ、エビふりヤーにはこのことは言わないで欲しいですな。王室を倒すと言うとエビふりヤーが悩んでしまうですな。りとちゃんとみさだけの秘密にしてほしいですな。」

「わかったけど。一人で大丈夫？」

「大丈夫ですな。真実を知れば協力してくれるスクーパーズは多いですな。それにスクーパーズが自分自身で処理すべき問題ですな。全て片付いたら、また、りとちゃんの可愛い絵を見にPARKに遊びに来るですな。それが一番良いですな。」

「そう。じゃあ、みさちゃんが来るのを待ってる。それでも、もし危なくなったら私を呼んでどこにだって行くから。みさちゃんを絶対に見捨てたりしないから。」

「いろいろ、ありがとうございます。そうですな、一つ言い忘れていたですな。ゼクルルは、りとちゃんがみさを守って安心していただけですな。最後に、八つ当たりをしてごめんなさい、怪我がなくて良かった、最後はちょっと怖かったけど痛くなく、うとうと安らかな心地と言ってたですな。」

「そうなんだ。」

りととみさは、手をつないでPARKの方へ歩いていった。りとは歩きながら、スクーパーズになるってどんななんだろうと考えていた。

りととみさがP A R Kの近くまで戻って来ると、まりとエビふりヤーが話しているのが聞こえた。まりがりとたちに気づいて、りとに呼びかけた。

「りと、どうしよう。エビふりヤーが面倒なことを言っているわ。」

「あれっ、エビふりヤー、元の大きさに戻っている。」

「もとの大きさって。」

「スクーパーズと戦ったみたいで、大きくなっていた。」

「そうなんだ。いろいろ便利ね。エビふりヤー。違った、そんなことより、りと、エビふりヤーが、私たちにスクーパーズになれば、さもないと攻撃するって言ってるの。」

「そうなんだ。わかった。エビふりヤーに訳を聞いてみる。」

りとがエビふりヤーに問いかける。

「どうしたの、エビふりヤー。」

「皆様には大変申し訳ございませんが、皆様にはこのまま何もしないで頂いて、スクーパーズになって頂くでございます。大したことはないでございます。もう、アマツマラは十分スクーパーズの命を、情報を吸収したでございます。もう少し時間が経てば、皆様の体にスクーパーズコアが形成されて、皆様はスクーパーズに生まれ変わります。」

それを聞いてみさが答える。

「さっきの話を聴いていなかったですか？そんなことをしたら、この作戦がこれからも繰り返されてしまうですな。この作戦は、この地球で最後にしなくてはいけないですな。そのためにはアマツマラを壊して、この作戦が無駄であることを知ってもらう必要があるですな。」

「しかし、りと様たちのアマツマラには、3000体以上のスクーパーズの命が詰まっているでございます。それを無駄にすることは、エビふりヤーにはできかねでございます。」

りとが尋ねる。

「いやだと言ったら？」

「大変残念ですが、皆様を亡き者にさせていただきます。」

「脅すの？私に勝てると思う？」

「今は勝てないかもしれないですが、アマツマラを壊したら単なる人間、このスクーパーズ最強だった私ならば簡単に勝てる………気がしないのでございますが、何故でございますでしょうか。」

「そうなの？」

「何か、そんな予感がするでございます。ですが、わたくしには秘めた力、真・エビふりヤー形態があるでございます。お見せしましょう。」

そう言うと、エビふりヤーの周りに煙が立ち見えなくなった。煙が消えたところで、まりが驚い

て言った。

「大きさと言い、エビふりヤーが本当のエビフライみたいになったわ。」

「そうでございます。これがわたくしの真・エビふりヤー形態、小さくなり、スリムになりましたが、速度、俊敏性ともに上がっているでございます。これで、逃げて逃げて逃げまくるでございます。そして、りと様の隙を見て原宿の街を破壊するでございます。」

みさが意見する。

「それでも誇りあるスクーパーズ兵の一員ですか？それもエビふりヤーはその頂点に立ったスクーパーズですな。」

「たとえ、わたくしの地位や名声が地に落ちても構わないでございます。3000体以上のスクーパーズの命を無駄にすることはできません。」

「このみさ王女の命令が聞けないですか？」

「はい、この作戦は王様の命令でもありますが。私の行動は王様に命令に従っている行動でございます。」

「困った、エビふりヤーですな。」

りとが尋ねる。

「それで、スクーパーズになった私が怒って、エビふりヤーに復讐しようとしたらどうなの。」

「それは構わないでございます。3000体以上のスクーパーズの命を奪った責任はわたくしにもあるでございます。りと様がスクーパーズになったあかつきには、エビふりヤーめは、煮ようが焼こうが好きにされても構わないでございます。」

「もう一度フライにしても？」

「かつ、構わないでございます。ただ、みさ王女様とは仲良くして欲しいとは思ってございます。りとが少し考えた後に話しかける。」

「わかった。私はスクーパーズになってもいい。3000体以上のスクーパーズの命の責任は私にもある。でも、エビふりヤー、巻き込んでしまった、まりとことは許してくれない。」

「りと様が自らスクーパーズになって頂けるのでございますか。本当でございますか。本当でございますか。本当ならばエビふりヤーめには、それで全く異存はございません。スクーパーズになつた後には、どうぞわたくしめをもう一度フライにして下さいでございます。」

「もう一度フライにはしないけど。有難う。私は本当にスクーパーズになる。話しがまとまってよかった。」

みさがりとを止める。

「りとちゃん、だめですな。りとちゃんは元の生活にもどるのがいいですな。」

エビふりヤーがりとに言う。

「りと様、心配は要りません。今まで通りの生活も可能です。普通のスクーパーズの利点は宇宙を散歩できるぐらいです。しかし、りと様ほどの強い精神力を持っていれば、極めて小さく強力

なスクーパーズコアが出来上がるでございます。このエビふりヤーなど足元にも及ばないほど強力でございます。そうなれば擬態など思うがままでございます。人間の姿になれば、全く人間のように振る舞えるでございます。」

「そうなの？」

「みさ様をご覧になれば、おわかりと思うでございます。ただし、体力も人間と同じになり、スクーパーズの姿と違って飛べなくなってしまうでございます。先ほどのみさ様など、少し走っただけで、ハーハーゼーゼーだったでございます。」

みさが口を挟んだ。

「うるさいですな。」

りとが質問する。

「じゃあ、人間の姿になって今まで通り絵が描けるといことね。」

「その通りでございます。」

「それなら全然いいかな。」

まりが意見する。

「止めときなさいよ。そんなわけのわからないこと。」

「ただ、誤解からとは言え、スクーパーズと戦って、悪くないスクーパーズをたくさん殺してしまったのは、申し訳ないと思って。」

「それは、りとの責任ではないわよ。」

みさも同意する。

「そうですな。全部みさを含めたスクーパーズ王室がいけないんですな。」

エビふりヤーが二人の意見を無視して、りとに話しかける。

「このエビふりヤー、完ぺきとはいきませんが、りと様の恰好になって見せるでございます。」

そういうと煙が立ち、煙がきえると人間の少女が立っていた。まりが驚いて言う。

「何それ。りとふりヤー？」

その少女の顔はりとに良く似ていて、胸、腰、手首、足首に天ぶらの衣のようなものがついていた。

「どうです、りと様に似ているでございますか？」

まりが答える。

「顔は似ているけれど、スタイルは弛んでるし、顔もにやけている。そんなの全然りとじゃないわ。」

「それはスタイルに関するデータがなかったことと、表情の違いは内面性の違いと思われるでございます。」

「それにしても、話し方は違うけど、声質は似ているわね。」

「はい、声に関するデータはありますので、再現しましたでございます。また、体組織も人間と

全く同じように再現しているでございます。」  
「まりがりとに言う。」

「りとも何か言いなさいよ。私はこんなじゃないって。」

「……………」

まりがエビふりヤーに言う。

「りとがびっくりして固まってしまったじゃないの。」

「これはしまったことをしてしまったかもしれないでございます。でもりと様、ご安心ください。りと様ならば完璧に今のりと様になれるでございます。りと様のスクーパーズコアは素粒子レベルで小さくなると思われます。違いは人間の心臓の上に、素粒子ほどの大きさのスクーパーズコアがあることだけになると思うでございます。」

りとは見ているだけで返事ができなかった。りとは怖かったのである。今までずうっと思い描いてきた、一生絶対に入らずもないと諦めていた自分の理想とする完璧なスタイルの自分の姿がすぐ目の前にあつたのだから。

「……………」

まりがみさと相談する。

「どうしようか、りとがショックで固まっちゃった。」

「仕方がないですな。みさの侍従の不始末はみさが処理しなくてはいけないですな。」

「大丈夫なの？手伝おうか？」

「大丈夫ですな。まずは一人でやってみるですな。このアマツマラを使ってみるですな。」

エビふりヤーが言う。

「姫様、無駄な抵抗はおよしになつた方が良いでございます。スクーパーズはアマツマラを使うことはできないでございます。」

「さつきゼクルが使つたのを見ていなかったですな？」

「あれば例外でございます。」

「ならば、みさも例外になるですな。」

みさは、アマツマラを持った。そして唱える。

「Our Majesty Changed by PARKですな。」

すると、アマツマラが光り出しはじめた。エビふりヤーが驚く。

「みさ様にアマツマラが反応しているでございます！」

光がおさまると、ビーズの衣装を着たみさが立っていた。すると、すぐにまりがみさの前に来てみんなに見えないように視界を塞いだ。

「みさちゃん、だめ、その衣装。」

「どうしたですな。」

「ビーズだと透けすぎて、いろいろな法律に引っかかりそう。」

「法律ですな。スクーパーズにも有効ですな？それならば、原宿を壊すと言ったエビふりヤーだって違法ですな。」

「違うの、みさちゃん。私たちでなく、私たちやこの世界を創っている人たちが捕まっちゃうの。」

「神様ですな？」

「神様なんてそんな綺麗なものじゃなくって、もつとドロドロとした人達だけど、逮捕されちゃうかもしれないの。」

「逮捕されちゃうですな。逮捕されちゃうとどうなるですな？」

「この世界が跡形もなく崩壊してしまうの。」

「それは困ったことすな。では、どうすれば良いですな。」

「もつと細かいビーズの服を何枚か下に着れば大丈夫だと思う。今、デザインしたものを送るね。手をつないで。」

「わかったですな。」

一度みさが変身を解除してから、まりとみさが手を繋ぐ。

「どうせならば、フリフリなんかも付けたいわよね。」

そう言いながら、まりがみさに情報を送った。受け取ったみさが言った。

「さすが、まりちゃんですな。もつと可愛い服ができそうですな。」

「じゃあ、また変身してみて。」

「わかったですな。行くですな。Our Majesty Changed by PARKですな。」

そうするとまたアマツマラが光り出して、今度は見ても大丈夫な緑を基調としたビーズの服を着たみさが登場した。そして、みさが言う。

「美少女戦士ギャラクシーみさ。銀河に代わってお置きですな。」

同時に武器として持っている鞭を鳴らした。衣装は上から髪飾り、(著者が名前がわからない)白い長い手袋、フリフリのついた半袖のキラキラ光るビーズの服、ベルト、ミニスカート、ソックスという姿だった。まりは、さっきからショックで固まっていたただ見ていただけのりとの両肩を押して、後ろに下がった。そして、PARKの建物の前でみさとエビふりヤーを見ていた。落ち着きを取り戻した、エビふりヤーが言う。

「良く考えますと、みさ様はアマツマラなど使わなくても、擬態できると言っています。驚いて損をしたで言います。」

「でも、これはスクーパーズの擬態ではなくアマツマラで変身したですな。もし、王女様の言うことを聞かないで、大人しくスクーパーズ星に帰らないと言うのなら、お置きですな。覚悟ですな。」

「王女様、舐めたことを言っただけで困るで言います。このスクーパーズ最強のエビふりヤーに傷

一つでも付けたらお褒め申し上げるでございます。」

「いくですな。」

みさが鞭をふるい、エビふりヤーに当たった。エビふりヤーが叫ぶ。

「痛いでございます。」

エビふりヤーの衣に小さな傷がついた。

「デストロイビームに耐える衣の装甲が損傷したでございます。王女様の鞭は中々でございますね。」

「愛の鞭ですな。みさはこの作戦で目が覚めたですな。えびふりヤーの目も覚まさせてあげるですな。」

「なんと、ちよございな。こちらは王様が変わって、スクーパーズ王女としての役割をお教えするでございます。」

エビふりヤーがみさに飛びかかろうとする。みさはそれを、

「えいっですな！」

と言いながら鞭で払い落す。またエビふりヤーの衣に小さな傷がついた。みさは地面に落ちたエビふりヤーを容赦なく、

「えいっ、えいっ、えいっ、えいっですな！」

と言いながら鞭で何回も叩く。少しづつエビふりヤーの衣がはがれた部分が大きくなってきた。「痛い、痛い、痛いでございます。みさ様、さすがはスクーパーズ王家の血を引くもの、なかなかの攻撃力でございます。いったん退却するでございます。」

そう言いながら、エビふりヤーはキャットストリートの方へ逃げて行った。まりが、みさに話しかける。

「逃げて行っちゃったわね。真・エビふりヤーになると探るのが面倒よね。」

「大丈夫ですな。戻ってくるですな。」

「そうなの？」

「エビふりヤーはスクーパーズ最強の自負があるですな、人間のりとちゃんならばともかく、スクーパーズに負けるのは許せないと思うですな。」

「そうなんだ。」

「ほら、戻ってきたですな。」

エビふりヤーは第2形態、10メートルほどの大きさになって戻ってきた。

「みさ様、今度は手加減はなしでございます。」

「来るですな。」

まりが心配そうに尋ねる。

「みさちゃん、大丈夫？」

「大丈夫ですな。まりちゃんは下がって、りとちゃんを見て欲しいですな。」

「わかった。」

まりは念のため変身して、りとの隣に立った。そして、リア銃をモードイレブンポジションワンでエネルギーの充填を開始した。

10メートルに大きさをエビふりヤーがみさととびかかる。みさはそれをかわして、鞭をふるう。

「えいっすな。」

今度は衣は剥がれなかった。

「どうぞでございます、みさ様。このエビふりヤーに勝とうなどということは、お諦め下さいでございます。」

「一度ぐらいで諦めたら王女とは言えないですな。」

「いいお覚悟でございます。それではまた行くでございます。」

エビふりヤーが飛び掛かるが、みさはダンスをするようにかわす。そして、すれ違いざま、むちを振るう。エビふりヤーが飛び掛かりながら言う。

「小さくて、すばしっこくて、なかなか捉えられないでございますね。」

このようなことを繰り返した後、エビふりヤーが小さく悲鳴を上げる。

「痛っ！」

自分の体を見ると、衣の一部が剥げていた。

「衣の装甲が。」

みさが答える。

「何度も何度も同じところを叩いたですな。雨だれ岩を打つですな。」

「なるほど、さすが王女様というところでございましょうか。」

「後は、そこを叩いて叩いて叩いて、痛みで屈服させてあげますな。」

「そうでございますか。それではこちらも本気を出させて頂きますでございます。第3形態。」

そう言うのと、エビふりヤーの体の中心付近が少し大きく脈打つと共に、体が熱く赤くなった。

「第2形態の心臓を大きくして、大量の血液を体に供給して、動作を速くすることが出来る形態でございます。」

まりが突っ込む。

「でもそれ、歳をとってからそんなことをすると、血管が切れて危なくない？」

「その通りでございます。さすが、まり様。この形態の弱点をすぐに見抜くことができるでございます。この形態は維持できて3分が限度であります。それでは行くでございます。」

エビふりヤーがみさに飛び掛かる。みさは避けようとするが、エビふりヤーの方が速く、尾の根元の部分で弾き飛ばされてしまう。みさはPARKに当たって、地面に落ちた。アマツマラによる変身と一緒に形成されたバリヤーで怪我はなかったが、衝撃でアマツマラの変身が解除されてしまった。そこへ、エビふりヤーが襲い掛かる。

「尾の根元で助かったようでございますね。でも、次はありませんでございます。姫様、お覚

悟！」

まりがリア銃を見るがエネルギーの充填がまだ終わっていないかった。まりが叫ぶ。

「間に合わない！」

エビふりヤーの尾がみさに達しようとするとき、りとがさつと進み出て、尾の先を足で受けて、十メートルはあるエビふりヤーを蹴り返す。エビふりヤーはくるくる回りながら反対側の建物に激突する。りとが叫ぶ。

「えびふりヤー、何やっているの！みさちゃんが怪我しちゃうじゃない！」

えびふりヤーが態勢を立て直して答える。

「何をもって、見ればわかるでございましょう。」

「そう。みさちゃんと戦っているふりをして遊んであげて、私がスクーパーーズ化するまでの時間を稼いでいたんでしょう。だから黙って見ていたのに。これじゃ、みさちゃんが怪我しちゃうじゃない。」

「えっ、はい？はい……。そうでございました。そうでございました。戦っているふりをして遊んであげて、時間を稼いでいたんでございしました。」

「まさか、マジで戦っていたんじゃないでしょうね？」

「ちつつ違うと思うでございします。それでは時間稼ぎを続けたいと思うでございします。いくでございしますよ。みさ王女様。」

ただ、りとも自分の目的を忘れて、みさを応援しはじめた。

「みさちゃん、頑張つて！エビふりヤーなんてやつつけちゃえ！」

それを聞いた、みさとエビふりヤーは思った。

「りとちゃんには、エビふりヤーと遊んでいるように見えるんですな……」

「りと様には、遊んでいるようにみえるのでございしますか。」

ただ、みさはこの問題はやはりスクーパーーズで解決しなくてはいけない問題と想っていた。そして、立ち上がって言う。

「時間稼ぎとは、舐めたことを言ってくれますな。えびふりヤー、今は油断しただけですな。」

次は、もっとパワーアップしていくですな。Our Majesty Changed by PARKですな。」

また、光に包まれてあと、みさが言う。

「美少女戦士ギャラクシープリンセスみさ。銀河に代わって王女様がお仕置きするですな。」

「少し、変わったようでございしますね。」

「PARKにあった本を参考に3次元織りで作ったビーズの盾を、左腕に装備しただけですな。これえびふりヤー尾の先でも大丈夫ですな。それに左腰につけたひもで、えびふりヤーを縛ってやるですな。」

「そんなもので、このえびふりヤーめに勝てるとお思いですか。振り返ちに……。」

言っている途中でえびふりゃーは、りとの目が光ったのに気付いた。

「返り打ちという時間稼ぎをさせていただきます。」

それでは行くでございませう。えびふりゃーはまた、尾の根元の部分でみさを叩こうとした。しかし、今度はさつきよりみさが俊敏に動き、えびふりゃーの攻撃はかわされて、ころもがはげたところを鞭で打たれた。

「痛っ！」

エビふりゃーは何度が繰り返したが、そのたびに衣のはげたところを叩かれていた。そのため、我を忘れて、

「痛いでございますよ！」

と言いながら、みさを全力で尾の先の部分で叩こうとした。りとが叫ぶ。

「みさちゃん、避けて！」

みさが答える。

「大丈夫ですな。手出しは無用ですな！」

エビふりゃーの尾の部分がみさを襲う。みさは新しく作った盾でエビふりゃーの尾の攻撃を受けた。今度も飛ばされたりはしたが、PARKの壁に足と手をつけて、反対側の建物に向けてジャンプし、その壁でまたジャンプしてエビふりゃーの方に向かった。りとが感心して言う。

「みさちゃん、うまい。これでエビふりゃーは動けなくなる。」

エビふりゃーが叫ぶ。

「何を、小癩な小娘が！」

そうして、向かって来るみさを跳ね返そうとしたが、体を曲げると自分が動てしまい、跳ね返すことができなかった。見ると、ひもが尾に結びつけられていて、それが電柱に止められていたからである。原宿の建物や構造物は最初にことこによって強化されていて、エビふりゃーが引っ張ったぐらいでは壊れなかった。みさは今度はエビふりゃーの体の方にひもを巻きつけると反対側にジャンプして引っ張り、ひもを反対側の電柱に止めた。エビふりゃーは動けなくなった。みさは念のため、あと2箇所を縛ってそのひもを電柱に止めた。エビふりゃーは完全に動けなくなった。エビふりゃーは驚いて言った。

「みさ様！」

「お前には、尾を飛ばすという必殺技があるそうですな。しかし、動けなければ、その必殺技を出すことをできませんな。あはははははは。」

「うううう！」

「後は叩き放題ですな！侍従長の分際で王女様に逆らうとは！調教してやるですな！」

みさはエビふりゃーに向けて容赦なく鞭を振るった。

「王女様に逆らうとは、それでも侍従長ですな？恥を知れですな。」

「王女様の言うことを聞くですな。」

「返事が聴こえないですな。何、叩き方が足りりないですな？では、もっと叩くですな。あまりが感想をつぶやく。」

「さすがこの銀河系の王女様。すごい。容赦ないわ。」  
エビふりヤーが言う。

「姫様、降参でございます。ご命令に従い、大人しくスクーパーズ星に帰るでございます。」  
みさがエビふりヤーを叩きながら言う。

「姫様ではないですな。今は王女様ですな。」

「王女様、降参でございます。ご命令に従い、大人しくスクーパーズ星に帰るでございます。」  
みさがエビふりヤーを叩きながら言う。

「良く聞こえないですな。もう一回大きな声で言うですな。」

「王女様、降参でございます。ご命令に従い、大人しくスクーパーズ星に帰るでございます。」  
さらに、みさがエビふりヤーを叩きながら言う。

「まだ、声が小さいですな。もう一回大きな声でいうですな。」

エビふりヤーがさらに大きな声で言う。

「王女様、降参でございます。ご命令に従い、大人しくスクーパーズ星に帰るでございます。」

「わかったですな。今、解放してあげるですな。」

「姫様、もう少し、お叩きになって頂いてもよろしゅうございますが。」

「仕方がないエビふりヤーですな。ご褒美はスクーパーズ星に帰ってからまたあげるですな。」

「有難き幸せにございます。」

みさがエビふりヤーのひもをといた。エビふりヤーがりととまりに言う。

「みさ様のおっしゃる通りでございます。私が間違えていたでございます。りと様、まり様、アマツマラを壊してもとの生活を続けて下さいでございます。」

みさも二人に言う。

「それが一番いいですな。」

また、アマツマラを壊す流れになって、りとは我に返って心の中で思った。

「しかし、マジで戦ってみさちゃんに負けるって、どんだけ役に立たないんだ、エビふりヤーは。なんとなくなためらっているりとを見てまりがりとに尋ねた。

「よくわかんないけど、さっきの様子を見ると、りとはスクーパーズになりたいの？」  
りとは、まさに目を合わせられず横をむいたまま言う。

「なっ、なりたいという、わっわけじゃあないんだけど。そっそう。ゼクルもアルドアもみさちゃんを守るために必死に戦っていたいいスクーパーズだった。私もみさちゃんを守るためと  
思っていただけなんだけど、この手で殺してしまったのが……。彼らの命を無駄にしてはい  
けないかなと思って。彼らの犠牲が少しでもスクーパーズに役立てば、それが彼らの供養になる  
んじゃないかなと思って。」

そして、りとは自分の理想とする姿を心のなかで思い描きながらつぶやく。

「そう、無駄にはいけない。」

まりが言う。

「りとは責任感がとつても強いから、りとの気持ちもわかる。でも、彼らが死んだのは絶対にとのせいじゃない。」

エビふりやーが泣きながら言う。

「エビふりやーは感動したでございます。りと様。りと様は、単に怪獣のようにお強いだけでなく、敵対したスクーパーズのこともお考え下さる本当に天使のようにお優しい方なのでございますね。」

「怪獣のようにはよけい。」

「分かりましたでございます。エビふりやー、自分やスクーパーズの事だけしか考えられなかった自分が恥ずかしいでございます。もう思い残すことはないでございます。さあ、ここでアマツマラをバーンと壊して、元の生活に戻って下さいでございます。それが一番良いでございます。みさ様の言う通りでございます。」

みさがエビふりやーを慰める。

「エビふりやー。この星に来て、スクーパーズにもアマツマラが使える、創造する力があるとうことがわかったという大きな収穫もあったですな。これは、とつても大きなことですな。」

「そうだわよ。それに文明・文化に対して知りたいことがあったらいつでも来てちょうだい。私たちが教えられることなら、何でも教えるから。ねー、りと。」

「うっうん、そっそう。最初の約束だし、もちろん。でも・・・」

りとが未練がましく言う。

「エビふりやー、悪いけど、また私に擬態して見せてくれない。」

「りと様にですか？お安い御用でございますけれど。」

そう言うと、エビふりやーはりとに擬態した。煙が晴れると、その姿がはっきり見えた。まりが言う。

「やっばり変。」

「それは、先ほど説明しましたが、データの不足と内面性の違いによるものでございます。顔はデータが取れるでございますので、内面性の違いから表れる表情の違い以外はほとんど同じと思うでございますが、スタイルに関するデータがなかったもので、不十分な結果になったでございます。」

りとが尋ねる。

「それでスタイルはどうしたの？」

「声優の下坂すみれ様の写真集から3次元再構成して作成しましたでございます。ただ、生体組

織などは人間と全く同じでございます。こういう顔とスタイルの人間が存在することは可能で  
ございます。」

「そうなんだ。体の一部だけ変更するということも可能なんだ。」

「はい、りと様ならば、全体を創造することもできると思うでございます。一部を変更するなど、  
造作のないことでございます。」

「人間と同じ生体組織で。」

「はい、同じ生体組織でございます。りと様ならば体組織を強化することも可能と思っております。  
います。身長660メートルのりと様も可能と思っておりますです。」

「身長660メートル？そんなスカイツリーみたいなのはいないけど。」

「エビふりヤー、本当に人間と同じかどうか、ちょっと触ってみていい？」

「いいでございますよ。」

りとはりとふりヤーの胸の部分を指で押してみた。エビふりヤーが反応する。

「いやん。」

まりが言う。

「りと、何。セクハラオヤジみたい。」

「いや、人間と同じかなと思って。まり、悪いんだけど、まりも同じところを触ってみていい  
い？」

「えー、うーん、りとならばいいけれど。」

りとがまりの胸の部分を押してみた。まりは何も言わなかったが、顔が真っ赤になっていた。り  
とが驚いて言った。

「ほんとだ。全く同じだった。」

「それはあたりまえでございます。人間と同じ生体組織なのでございますから。」

「そうなんだ。うーん、まり、自分の体をデザインできるといのは面白くない？」

「そうね、りとみたいなスタイルになれば、ファッションとか似合うかも。」

りとは一瞬、

「何、まり、喧嘩売っているの？」

と思ったが、まりの表情を見て本気でそう思っているのかもしれないと考えて同意する。

「そうね。ダンスも切れも良くなるかもね。」

「うん、それも本当は魅力的だけど、やっぱり・・・。」

りとは、スクーパーズになることかなり抵抗がありそうなまりは無理はしない方が良くと思  
って同意する。

「まりのもっとキレイなダンスも見てみたいけど。そうだね。うん、まりは止めた方がいいか  
もね。」

どうしてもスクーパーズになることが諦めきれないりとではあったが、ここが2階のPAR

Kから建物の外の階段を降りてやって来た。

「アマツマラを壊すのはちよつと待って！」

りとがことこの全身を見ながら尋ねる。

「何、ことこ？ことこも擬態に興味があるの？」

まりが口を挟む。

「違うでしょう。ことこは宇宙の散歩でしょう。」

「そう、そうだよね。宇宙の散歩、楽しそうだよね。」

ことこが答える。

「違うの。」

それを聞いたりとが、まりに勝ち誇ったように言う。

「ほら、やっぱり擬態じゃない。」

しかし、ことこはそれも否定する。

「違うの。そうじゃないの。」

りとが驚いて尋ねる。

「えっ、違うの。それじゃ何なの？」

「スクーパーズさんたちを生き返らせることができるかもしれないの。」

りと、まり、みさ、エビふりヤーが尋ねる。

「えっ、どういうこと。」

「ほんと？」

「どういうことですか。」

「そんなことが可能なのでございますか？」

ことこが答える。

「PARKで説明してもらってから、ついて来て。」

全員が2階のPARKに上がった。部屋はガーチューンの攻撃で散らかっていたが、机の上にとこが作った解析器が置いてあり、その中にはことこのペンダントの形をしたアマツマラが置いてあった。ことこが解析器に話しかける。

「アルちゃん、聞こえる？みさちゃんとエビふりヤーさんが来たよ。説明をお願い。」

「わかった。」

解析器から声がした。

「みさ王女様、エビふりヤー閣下、私はスクーパーズ宇宙遠征軍第8連隊連隊付き技術参謀のアルドア少佐です。」

その名前を聞いて、りととまりが驚いた。

「アルドア?!」

アルドアが説明を続ける。

「私は一度死にました。そして、私の情報は、全てことさんのアマツマラに吸収されました。」

ここで話は、アルドアがりとの棒が刺さって死んだ後まで遡る。ここは、アルドアが消えた所を見つめて泣きながら、アルドアのことを思っていた。

「アルちゃん。アルちゃん。なんで。なんで。弱いんだから逃げなきゃだめだよ。」  
みんなに弱いと言われる可愛そうなアルドアであった。

「アルちゃん。アマツマラの解析、楽しかったよ。また、一緒にいろんなことをしたかったよ。」  
その後、りと言い争いをして、黒いスクーパーズと会話すると主張している最中に、アマツマラのインターフェースを通じて、だれかの声があった。

「ことちゃん。ことちゃん。」

「アマツマラの中から声の情報が伝わってくる？誰。私を呼んでいるのは。」

「僕だよ。アルドア。」

「アルちゃん？」

「そうだよ。良かった、外部と通信できた。」

「えっ、でも、どうして。」

「アマツマラを解析した時に、制御部にバグがあったの覚えている？」

「うん、覚えている。」

「僕の情報が吸収され記憶部に送られるときに、制御部にその情報を一気に送り込んだんだ。そうしたら、予想通り通信バツファがオーバーフローして、僕の情報で制御部を乗っ取ることに成功した。だから、僕が死んだときにアマツマラが吸収した僕の情報に基づいて処理した結果をインターフェース部に送り込んで、ことちゃんと会話しているんだ。」

「すごい、そうなんだ。じゃあアルちゃん生きていたということね。」

「今のところはね。でも、記憶部の情報はその抽象化が終わって1週間ぐらいすると破棄されると思う。」

「コンピュータのごみ箱みたいなのところ？」

「悲しいけれど、そうかな。」

「でも、情報が完全にあるならば、その情報を使って生成すれば、アルちゃんたちを、生き返らせることができるよ。」

「うん、それは僕も考えているんだけど、この記憶部の通常の情報の出入り口のゲートが、入ることはできても出ることができないようになってるんだ。」

「そうね、そうだったね。あの時は外からも記憶部の中は調べられなかった。」

「そのゲートから出ないと、スクーパーズの再生成はできないと思う。」

「わかった、そのゲートを外から壊せないか考えるよ。」

「うん、こちらでもいろいろやってみるけど、外からも試してもらえると本当に有難い。」

「とりあえず、PARKに戻って解析装置を作って、そのゲート、何があってもそのゲートをこじ開けるね。」

「頼もしいね。」

「うん。今、PARKへ向かっているけれど、アマツマラの中のアルちゃんからわかることがあったら、少しでも教えてくれる。」

「わかった。制御部は解析通りだった。あの時調べられなかった記憶部について話すね。」

「お願い。あと、そのゲートに関して、わかることがあれば、それも。」

「わかった。記憶部はスクーパーズの情報が拡散するというか、1体1体の情報が記憶部全体に広がって存在している。」

「何でかな。」

「記憶部で抽象化しやすいように情報を並び変えているのかもしれない。」

「そうか。それだと一筋縄ではいかないかもしれないかな。けど、絶対に何とかする。」

急にアルドアがことごとく向かって叫んだ。

「ことごちゃん、隠れて。」

「何。」

「ザトムとバンクス。スクーパーズ兵2体がことごちゃんたちを狙っている。」

「有難う。とりあえず隠れる。」

ことごはこんな時にと思ったが、まりを押し隠れた。その後、みさが来てザトムとバンクスと和解したことは先に述べたとおりである。その後、ことごは急いでPARKに戻り、アマツマラを解析装置にセットした。そこで、ことごは外から、アルドアは中から、記憶部のゲートを解析した。ことごがまとめる。

「アルちゃん。ゲートは基本的に自律制御で動作していて、制御部から信号を送ってゲートを開けたり閉じたりすることは不可能だよ。」

「ことごちゃんの言う通り。ゲートの前にスクーパーズの情報があるときだけ開いて、なくなる閉じるみたい。やはり、こちらからは制御できなさそう。でも、エネルギー供給部を操作して、開けないようにすることは可能みたいだ。」

「うん、ゲートの電源を切って開かないようにするのは、私の方からも制御できると思う。」

「ゲートを開くためには、スクーパーズの情報をゲートの前に到達させる。」

「でも、開けっ放ししておくことは難しそうだよ。」

「ことごちゃんの言う通り。ゲートが開くとスクーパーズの情報はすぐに記憶部に吸収されて、ゲートは閉じてしまう。」

「電源を切っても、閉じる機構は電源なしでも作動するようになってるし。」

「とすると、ゲートの前にスクーパーズの情報を向かわせて、ゲートの前にある解析部の処理機

能を使って、ゲートを閉じる機構を破壊するしかない。うーん、記憶部の外をまわって、ゲートの前に情報を移動することはできなさそう。」

「やっぱり、解析部から向かってもらうしかないかなー。」

「それは、生きているスクーパーズに死ねと言っているのと同じだよ。」

「うん。ただ、ゲートの前ならば、ゲートを閉じる機構の破壊に失敗しても、その情報からスクーパーズの姿に復元できるはずだよ。」

「でも、そんなことを引き受けてくれるスクーパーズがいるかな。」

「ここにはあてがないわけではなかった。」

「エビふりヤーにお願いしてみようと思う。」

「エビふりヤー閣下に？」

「うん。事情を説明して引き受けてもらおうよ。」

「さすがに無理じゃないかな？」

「私知っているエビふりヤーならば引き受けてもらえるとと思う。」

「わかった。スクーパーズの技術将校の僕からもお願いしてみる。」

「うん、何とか二人で説得しよう。」

「作戦実施となったら、こちらからは外の様子が良くわからないから、僕にタイミングの指示をして。」

「うん。ゲートが開いちゃうとスクーパーズの情報が吸い込まれるから、ゲートを開かないようにするんだよね。」

「うん。ゲートの固定は、ことちゃんと僕の二人でやろう。その方が安全だ。他のアマツマラも制御部間を通信できるようにすれば、僕からでもできるはず。エビふりヤー閣下がゲートの前に着いたら、閣下の強力な情報と解析部の能力を使ってゲートをこじ開ける。」

「ゲート、頑丈そうだけれど大丈夫？」

「ゲートの構造を調べて、なんとか弱点を探らないと。あと閉じる機構の位置と構造が正確にわかるかどうかの問題。」

「そうだね。外からエビふりヤー閣下の尾の情報を衝突させて、それをはじいたときの反応、物理的なゲートで例えば打撃を加えたときに発生する衝撃波から構造を探ってみるしかないかな。」

「記憶部の解析が不十分で、行ってみたいとわからないところもあるけれど。閣下には正直に話して、お願いしてみる。うまくいけば僕だけでなく、3000体以上のスクーパーズが助かる。」

「私が行けばいいんだけど。スクーパーズしか行けないし、私がスクーパーズ化するとスクーパーズさんたちの情報がその時点で破棄されちゃいそうだし。」

「ことちゃんは関係ないから、危険なこととはしなくていい。」

「関係ないなんて言わないで。そのスクーパーズさんをたくさん殺した武器は私が作ったんだ。」

から。」

「ここちゃんには無事でいて欲しい。」

「私も。アルちゃんには無事でいて欲しい。」

「だから全力で外からのサポートをして欲しい。」

「うん、わかった。今は、それを頑張る。」

「ところで、外でみさ王女様とエビふりヤー閣下が言い争いをして騒がしいようだけれど、何をしているか分かる？」

「えっ、気が付かなかった。」

「ここが窓から道の様子を見た後に解析器に戻ってきた。」

「なんか、みさちゃんが変身して、エビふりヤーを鞭で叩いている。」

「鞭で叩いている？何でまた。」

「良くわからない。りとちゃんと、まりちゃんは様子を見ている。遊んでいるのかな？」

「変身と言うのは、擬態のこと？」

「うーん、なんかビーズの服を着ていて、鞭とか盾とか持っているから、アマツマラを使ったんじゃないかな。」

「アマツマラを？それはスクーパーズでは無理だと思うよ。」

「でも、王女様やスクーパーズの王族は使えるとか。」

「違うんじゃないかな。でも、静かになった。」

「ちょっと見て来る。」

また、ここが窓から道の様子を見て戻ってきた。

「エビふりヤーがりとちゃんに擬態している。」

「なんでまた。」

「良くわからないけど、やっぱり遊んでいるんじゃないかな。」

「ここちゃんの言う通りかも。でも申し訳ないけど、遊ぶのを止めてきて。エビふりヤー様があまりに疲労すると、僕たちを復元するのに支障がでるかもしれない。」

「わかった。止めてくる。」

ここはPARKから道に下りて、3人と1尾をPARKに導いた。

ここで、アルドアが説明を始めた場面に戻る。

「私だけではありません。りとさん、まりさんが死なせたスクーパーズの情報は、すべて死んだときに最も近かったアマツマラに完璧な形で蓄積されています。私は、私の情報が吸収されるときに、ラフォーレでここさんと一緒にアマツマラを解析した時に見つけたバグを使って、アマツマラの制御部を乗っ取って、私、アルドアの意識を形成して、そこから出力されている信号をここさんが作った解析装置で受信して、みなさんとお話しています。」

それを聞いたりとがアルドアに謝罪する。

「アルドアさん。本当に？さっ、さっきは殺しちゃってごめんなさい。本当は殺すつもりはなかったんだけど、まりが危ないと思って。慌てて、急所は外したけれど、威力が強すぎて。」

「いえ、ことちゃんが言う通り、最初に攻撃したスクーパーズ側が悪かったですので、それは構いません。」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しい。」

「それよりも、お願いがあります。まだスクーパーズの情報が完全に記憶部に蓄えられています。いろいろ障害はありますが、りとさんたちならば、記憶部のスクーパーズの情報からそのスクーパーズの実体に復元することが可能と思います。」

「良くわからないけど、さっき、そこが言ったように、スクーパーズを生き返すことができるということ？」

「はい、そうです。」

「本当に？それなら何でもするよ。どんな危険なことだって。」

「りとさん、まりさん、ことちゃんたちが危険なことをする必要はありません。」

「そうなの。じゃあ簡単、何でも言っ。」

「りとさんには、エビふりゃー様を死なせてもらう必要があります。」

「エビふりゃーを？どういうこと。」

アルドアが、アマツマラの記憶部にゲートがあること、それを開いた状態で固定して生成部へ情報を送ることができればスクーパーズが復元できること、しかしゲートは外から操作できないこと、そのため強い精神力を持ったスクーパーズが入って、ゲートを閉じる機構を壊す必要があることを説明した。アマツマラの中のアルドアの話聞いたまりが言う。

「難しく、何だか良くわからないわね。」

「そこが答える。」

「まりちゃんとりとちゃんがしなくてはいけないことは、エビふりゃーを殺すことと、アマツマラの中の情報を実体化するだけ。細かいことはアルドアと私が何とかする。だから、後はエビふりゃーの決断次第。」

エビふりゃーが尋ねた。

「本当に、消えたスクーパーズ兵たちが全員生き返るのでございますか。」

「絶対には言えないけれど、その可能性は十分にあるの。」

アルドアも答える。

「それにゲートが開けないようにすることはできます。失敗してもゲートの前ならば、再生することは簡単だと思います。」

「分かりましたでございます。引き受けるでございます。」

「そこがりとちゃんに尋ねた。」

「りとちゃんは大丈夫？そうそう、この方法にはもう一つの良いことがあって、記憶部からスクーパーズの記憶がなくなれば、アマツマラを壊さなくても、私たちがスクーパーズ化する心配もなくなるんだよ。」

「えっ、スクーパーズになれなくなっちゃうの？」

「えっ、そうだけど。」

少し残念そうなりのだが、気を取り直す。

「そっか。でもスクーパーズさんたちは生き返るんだよね。あのゼクルも。」

「ゼクルというスクーパーズは知らないけれど、死んで消えたならば生き返るはず。」

「わかった、しかたがない。やるよ。で、エビふりヤーを殺すだけでいいんだよね。」

「そう。うまくいなくても、生き返らせることは99%できると思う。」

「よし、やろう。」

りとはエビふりヤーの方を見て言う。

「一番苦しめないように逝せてあげるから、じっとしててね。」

エビふりヤーが答える。

「そんな簡単にOKを出して大丈夫で、ご、ございますか？」

「大丈夫。うまくいかなかったら、戻してあげる。」

「そうではございますが。」

みさと言う。

「大丈夫ですなエビふりヤー。みさも一緒に行くですな。怖がることはないですな。りとちゃん、みさもお願いするですな。」

「えっ、エビふりヤーならばともかく、みさちゃんはちょっと無理かもしれない。」

「みさは、スクーパーズの王女ですな。3000体以上のスクーパーズを救うために危険を冒さないということは、許されることではないですな。」

「でも。」

アルドアも止める。

「さすがに、みさ様は止めたおいた方が良くと思います。失敗しても99パーセントは再生できるとは思いますが、1パーセントは失敗する恐れもあります。」

みさは言い張る。

「アマツマラの中のスクーパーズが死んだ責任は、みさにあるですな。1パーセントのことなんて恐れないですな。」

「それに、みさ様が行かれても、ゲートを破壊できるわけではありませんので、役に立つことはないと考えられます。」

「エビふりヤーを励ますことぐらいはできるですな。」

エビふりヤーが言う。

「姫様、危険を冒してもスクーパーズ兵を助けようとする立派なお覚悟、そのお気持ちだけで十分でございます。このエビふりヤーが、命を賭して助けて来るでございます。りと様、よろしく願いますでございます。」

りとが答える。

「わかった。」

ところがアルドアに話しかける。

「良かった。これでアルちゃんを助けられる。」

「有難う。僕もみんなを助けるためにがんばる。」

アルドアがみんなに向かって話しかけた。

「まだ、10分ぐらい準備が必要ですので、もう少し待っててください。」

みんなが解析器装置が置いてある控室から、店の方に出て行った。みさが出ていくとき、ここがすれ違いざまに話しかける。

「アマツマラが使えるならば、アマツマラの中でもアマツマラの力が使えると思う。」

「そうですね。有難うですな。」

そう言い残して、みさは控室を出て行った。

店に待っていた全員が店の散らかった様子を見ていた。まりが言う。

「片づけるのに、3日はかかるわね。」

「そうですね。このエビふりヤーもお手伝いするでございますよ。」

「でも、エビふりヤーじゃ、片付けの手伝いは無理かも。」

「大丈夫でございます。生還したあかつきには、また、りと様に擬態して、お手伝いするでございますよ。きつと、りと様よりは、役に立つと思うでございます。」

「そうですね。片付けならば、りとより役に立つかもね。」

みさと話をしていたりとが答える。

「まり、ひどい。」

「大丈夫。りとにはポスターやポップをお願いするから。飾り付けは全部やり直さなくてはいけないから、いっぱい絵が必要、たわ。」

「わかった。頑張る。少し雰囲気を変えてみる？どんな感じがいい？まりの考えを元に考える。」

「そうですね。うーん、海の感じなんてどう？」

「海か？原宿には合わない気がするけど、分かった。思いっきり海にする。」

「お願い。」

「サーフボード？ビーチバレー？そうか、ことこの言っていたアニメを参考にしてみようか。」

「それはいいアイデアね。」

二人が新しい店の内装を考えていると、ことが3人と1尾を呼びに来た。

「じゃあ、りとちゃん、エビふりヤー、お願い。」

「わかった。」

「わかりましたでございませう。」

控室に戻ったことが説明をする。

「アルちゃんと私で、ゲートは2重に開かないようにしたよ。りとちゃん、変身して。」

りとが変身する。アルドアも確認する。

「エビふりヤー閣下、こちらからも開かないようにしました。」

「有難う。」

ことがりとに実行を促す。

「あとは、りとちゃんお願い。」

「わかった。じゃあ、エビふりヤーいくよ。じつとしててね。エビふりヤーの急所というかスクーパーズコアは大きくないみたい。でも、そこを一撃で破壊すれば痛くないから。」

「わっ、わかりましたでございませう。スクーパーズ兵の皆様のことを思えば、全然怖くはないでございませう。」

「ちよっと、ごめん。」

りとは棒を横に振る。エビふりヤーは真つ二つになったが、棒が迫るのを見て、たまらずジャンプしたので、コアを切ることはできなかった。

「ギャー。」

エビふりヤーは悲鳴を上げた。りとは、

「うごかつ。」

と言いながらすかさず、縦に棒を振る。エビふりヤーは4つになった。しかし、そのときもまだ動くことができたため、コアを切ることができなかった。エビふりヤーは激痛で悲鳴を上げることもできなかった。

「.....」

りとは、真剣な表情で叫ぶ。

「ないでっ。」

そして、4つのうちの右上の塊に対して斜め右下から棒を振った。その塊が真つ二つになると、今度はコアが破壊されエビふりヤーは消えていった。書くとき長い、実際には0.3秒間ぐらいの出来事である。それを見ていた、みさとまりは思った。

「さすがりとちゃんですな。明確な目標があると躊躇がないですな。」

「5等分のエビふりヤー。りとは容赦ないわね。」

ここは、モニターを見ながら、エビふりヤーの情報の行方を確認していた。

「大丈夫。りとちゃんの中のアマツマラの想定通りの経路を通っている。これならば、ゲートの前にたどり着けそう。」

エビふりやーの情報がゲートの前にたどり着いたことを確認したうえで、ここがエビふりやーを呼び出す。

「エビふりやー、エビふりやー聞こえる。私はここ、地球人のことです。意識はありますか。」

「私は、エビふりやー。スクーパーズのエビふりやー。」

ことごとアルドアが会話する。

「アルちゃん、エビふりやーの情報がゲートの前にたどり着いたみたい。」

「うん、それはこっちでも確認した。ちゃんとゲートは閉まって吸い込まれていない。」

「ここまでは成功だよ。」

「そうだね。問題はここから。」

「閉じる機構の位置を探らなきゃ。エビふりやーにゲートを叩くように指示するね。」

「お願い。」

ここが解析装置を通して、エビふりやーに話しかける。

「エビふりやー、近くにゲートがみえると思うの。そのヒンジのような部分を叩いて。」

「はいでございます。」

エビふりやーがそばの壁を叩く。

「エビふりやー違う。そこは壁。ゲートが見えない？」

ゲートでございますか。たくさん見えるでございます。」

「たくさん？じゃあ、片っ端から叩いて行って。反応を観測するから。」

「わかりましたでございます。」

エビふりやーがそこらじゅうを叩き始めた。ここがアルドアと相談する。

「アルちゃん、エビふりやーにはゲートが見えないみたい。何かいい方法はない？」

「わかった。今開けることはできないけれど、振動させることぐらいはできる。」

アルドアがゲートを振動させた。ここが確認する。

「うん、振動している。」

ここがエビふりやーに話しかける。

「振動しているゲートはない？」

「振動しているゲートでございますか。はい、遠くの方から振動している音が聞こえるでござい  
ます。」

「じゃあ、振動しているゲートを探して？」

「分かりま……。」

「エビふりやー、エビふりやー、聞こえる？振動しているゲートを探せる？」

「この……す。」

「エビふりやー！返事をして！」

「……眠くなってきましたでございます。」

「エビふりヤー！しっかりして！スクーパーズ最強の兵だったんでしよう！お願い。」

「………わかり………ございます。」

ところがアルドアと相談する。

「エビふりヤーの意識が低下しているみたい。だんだん反応が鈍くなってきた。」

「エビふりヤー様の情報が痛さで上手くまとまっていけないのか。」

「エビふりヤーに強い意思があれば、また情報をまとめることができると思うけど、どうしよう。」

「作戦を中止するしかない。」

「中止って。それじゃ、アルちゃんが生き返れないじゃない。」

「仕方がない。このままでは、エビふりヤー閣下の情報も行方不明になってしまう。」

「いやだ、中止しない。」

「ここちちゃん……」

「もう少し、解析してみる。」

そのとき、まりが悲鳴を上げた。

「キヤー……りと、何をやっているの。」

りとがみさに抱きついて、ペンでみさの心臓の上を刺したのである。みさがまりに静かにするよ  
うに言う。

「まりちゃん、大丈夫ですな。さつきお願いしたんですな。もし、作戦が中止になりそうだった  
ら、私も送り込んで欲しいと、お願いしたんですな。」

「でも。」

「いいんですな。さすが、りとちゃん、スクーパーズコアを正確に一突きですな。それでは、行  
つてくるですな。」

みさがスクーパーズの姿に戻った後、消滅していった。ここは冷静にアルドアに話しかける。

「いま、みさちゃんもゲート前に向かった。これでなんとかなるかも。」

アルドアが少し動揺して答える。

「王女様が。」

「うん、そう。自分で望んだみたい。アルちゃん、この状況を最大限に生かすのが、私たちの仕  
事だよ。」

「でも……。そうだね、わかった。今は、それしかない。」

少し前、まりとエビふりヤーが店の新しい飾り付けについて話していたころ、みさがりとに話  
しかけていた。

「りとちゃん、さつきの話、やっぱりお願いするですな。」

「どうしても行くの？」

「もちろんですな。私はこの天の川銀河の数百億の知的生命体を統べる王族の一人ですな。自分の失態を少しでも取り戻せるのに、それを実行しないなんてことは許されたいですな。」

「そうなんだ。王女様も大変ね。」

「そうですな。大変なんですな。りとちゃんがやってくれないと、自分でやらなといけないうすな。でも、自分のコアを一度に正確に壊せる自信はないですな。そうすると、ものすごく痛い中、何回も刺さなくてははいけません。それは、やっぱり怖いですな。」

「そう。」

「だから、お願いですな。」

「分かった。そこまで覚悟しているなら、私がやる。」

「有難うですな。りとちゃんは引き受けてくれると思っていたですな。」

「ちょっと抱きしめていい？」

「コアの位置を確認するんですな？いいですな。」

りとがみさを抱きしめる。みさが尋ねる。

「みさのスクーパーズコアの位置はわかったですな？」

「うん。たぶん。」

「それは良かったですな。安心したですな。では、エビふりゃーだけでは作戦が中止になりそうになったときをお願いするですな。」

「わかった。」

二人は、店の飾りつけの話をしているまりとエビふりゃーの方に向かった。

アマツマラの中に入ったみさは吸い込まれながらも周りの様子を見ていた。

「これがアマツマラの中ですな。」

すると、ことこの声が聞こえた。

「みさちゃん、さっきも言ったけれど、アマツマラの中ならば、アマツマラの力が使えるはずだよ。」

「有難うですな。それでは、変身するとするですな。Our Majesty Changed by PARK!!!!」

みさはアマツマラの中で、法律に触れないビーズの衣装で、鞭を持ち盾を腕につけた姿になった。

「エビふりゃーはどこですな？」

「たぶん、右前方300メートルぐらいのところ。その近くにゲートもある。」

「霧がかかって見えにくいですな。ゲートを見つけたエビふりゃーを褒めてやらなといけないうすな。」

「もう少しだよ。」

「いたですな。寝ているですな。たたき起こすですな。」

みさはエビふりヤーを鞭でたたく。

「エビふりヤー、起きるですな。このゲートを閉じる機構を壊すですな。」

みさに叩かれたエビふりヤーが目を覚ます。

「えっ、あつ、姫様。大変申し訳ありませんでございませぬ。寝ておりましたでございませぬ。あれ、霧がかかっております。ここはどこでございませぬ。」

「ここはアマツマラの中ですな。」

「そうでございませぬ。スクーパーズ兵を助けるためにここに来たんでした。しかし、姫様。姫様がなぜここに。」

「お前が寝てしまうから、りとちゃんに送り込んでもらったですな。」

「りと様に。と言うことは。」

「みさからお願いしたですな。」

「しかし。」

「お前と違って、りとちゃんを信じて、じっとしていたですな。全く痛くなかったですな。」

「私は激痛が体中を駆け巡りましたでございませぬ。」

「それは避けようとして動くからですな。みつともなかったですな。」

「面目ございませぬ。痛くて死ぬかと思ひました。」

「とりあえず、我々は今死んでおりますな。」

「そうでございませぬ。しかし、痛い時間は瞬間でしたので何とか意識を保てました。」

「それは、りとちゃんが、少しでも痛くないようにと、3太刀を連続して瞬間に浴びせたからですな。りとちゃんに感謝するですな。」

「感謝でございませぬか・・・。かしこまりましたでございませぬ。」

「それより、何としてもゲートを開いた状態で固定して、スクーパーズ兵と一緒に生き返るですな。」

「はい、ただ、このゲートはなかなか頑丈でございませぬ。」

「それを壊して、3000体以上のスクーパーズ兵を助け出すのが、みさたちの仕事ですな。2体で頑張るですな。」

「かしこまりましたでございませぬ。」

みさがことちゃんに話しかける。

「ことちゃん、聞こえるですな？」

「うん、良く聞こえるよ。」

「私が鞭でたたくですな。ゲートからの反応でゲートの構造を探って欲しいですな。」

「わかった。3秒間隔で、いろんなところ叩いてみて。」

「では、叩くですな。」

みさが、3秒間隔でゲートの様々なところを叩いた。ここがアルドアに話しかける。

「そっちにデータを送るけれど、見れる？」

「うん、大丈夫。左下と左上あたりにありそうだけども。」

「アルちゃんと言う通り。左下と左上にあることは分かるけど、正確な位置と構造がつかめな  
い。」

「ここがみさに指示をする。」

「左下と左上あたりを重点的に叩いてみて。」

「わかったですな。」

みさがその言われたあたりを鞭でたたく。

解析結果に関して、ことごとアルドアが話し合う。

「ここちやん、下端から30センチメートルと上端から30センチメートルぐらいのところ  
にありそうだな。」

「いま、測定データをゲートの構造のモデルを使ったシミュレーション結果と照合して、モデル  
の精度を上げている。」

「そうか。それなら、こっちでも、そのモデルに矛盾がないかチェックするから、モデルのデー  
タを送って。」

「うん、送るね。」

ことごとアルドアは、複数のモデルを作り、モデルパラメータを調整しながら、モデルを選択し  
て、パラメータを決定していった。ここがアルドアに話しかける。

「ゲートの表面の左下を原点として、横をx、奥行きをy、高さをzとすれば、(148.5、  
20.3、171.3)と(150.2、19.8、1802.5)のところにありそう。」

「ちょっと待って、座標系を変換する。座標系は前もって合しておくべきだった。でも、大丈夫。  
こちらはその位置だ。」

「良かった。でも、錠自体の詳しい構造は分からないままね。」

「表からだど、難しそうだ。」

「どうする。」

「ゲートを開けて、横から観測装置で観測できれば。」

「観測装置はデータを渡せば、アマツマラの中だからみさちゃんが作れるけれど、どうやって観  
測しよう。」

みさがことちやんに話しかける。

「観測装置のデータを渡して欲しいですな。観測は、みさとエビふりやうでなんとかするです  
な。」

「どうするの。」

「ゲートが開いたら、エビふりやうに鞭とひもを巻きつけて、それにつかまってみさが開閉機構  
のそばまでいって観測するですな。」

「でも、ゲートが開くとすごい勢いで吸い込まれるよ。もし吸い込まれたら、他のスクーパーズと同じになって、簡単に戻すことができなくなっちゃう。」

「完全に死んでしまうかもしれないということですね。分かっているですね。でも、それしかないですね。」

「わかった。みさちゃんの方法でやろう。」  
「りとが止める。」

「みさちゃん、やめようよ。もし吸い込まれたら本当に死んじゃうかもしれないんだよ。」

「りとちゃん、心配してくれて有難うですね。でも、やるですね。今やらないと一生後悔するですね。」

「一生後悔か・・・。」

りとはみさに言葉を返せなかった。みさがここに話しかける。

「ここちちゃん。観測装置のデータをお願いするですね。」

「わかった。じゃあ、まず、アマツマラを想像して。その仮想アマツマラにデータを送るね。」  
それを聞いていたりともう一度言う。

「ここち、やっぱり止めなよ。本当にみさちゃんが死んじゃうかもしれないんだよ。」

ここちは静かに答える。

「でも、みさちゃんも覚悟の上だから。」

「そうだけ。」

「りとちゃんも、まりちゃんと私のために命がけで戦っていたでしょう。みさちゃんもスクーパーズの兵隊さんたちを助けたいんだと思うよ。みんな、ちゃんとしたスクーパーズだったし。」  
みさが言う。

「りとちゃん、ここちちゃんの言う通りですね。父上の命令が間違っていたですね。みさは、それを信じてたくさんのスクーパーズ兵を死なせてしまったですね。それを取り戻せるチャンスがあるならば、やるしかないですね。」

りとはもう何も言えなかった。ここちがみさの仮想アマツマラの状態を調べて言う。

「仮想アマツマラの準備はOKね。じゃあ、みさちゃんいくよ。」

「はいですね。」

「データを送ったけれど、受け取れた？」

「大丈夫ですね。」

「じゃあ、作ってみて。」

「わかったですね。Our Majesty Changed by PARKですね。」

りとのアマツマラが、すこし光った。

「ここちちゃん、できましたね。」

「ちよっとまって、こちらからも調べてみる。」

ことが確認した後、みさに話しかける。

「うん、観測装置の方はOK。」

「よかったですな。それじゃあ、エビふりゃー、少し離れたところにいるですな。」

「みさ様。」

みさがエビふりゃーを連れて行き、ゲートから少し離れたところで止まった。

「エビふりゃー、何も言わなくて良いですな。上手くいけば蟹爪ふりゃーや第7連隊のみんなも生き返らせることができるですな。」

「みさ様。」

「お前はここにいてくれればいいですな。」

「分かりました。床にかじりついてでも、ここにいるでございませす。」

ことがエビふりゃーに話しかける。

「観測が終わって私が合図をしたら、体をそってみさちゃんを引き上げて。みさちゃんを吸い込む力も相当強いはずだから全力で。」

「分かりましたでございませす。ことこ様の合図で、この体が2つになろうとも引き上げてご覧にいます。」

「体が5つになったこともあったみたいだけれどもね。」

「そうでございませす。では、6つになっても引き上げてご覧に入れます。」

「頼もしいですな、エビふりゃー。」

そう言う、みさはひもの先をエビふりゃーの尻尾に巻きつけ、ゲートの方に戻って行った。そして、ここに連絡した。

「準備はできましたな。ゲートが動けるようにして欲しいですな。」

「わかった。ゲートを動けるようにすると、みさちゃんはスクーパーだからすぐにゲートが開くはず。そして、すごい勢いで吸い込まれると思う。だから、ひもはみさちゃんにしっかりと止めて。」

「わかったですな。体に巻きつけるですな。」

「ロックの位置は、下から17cmぐらい、上からも17cmぐらいのところにあるので、そこにセンサーを近づけてくれればいい。」

「了解ですな。」

「アルちゃんもサポートお願い。」

「ことこちゃん、こちらはいつでもOK。」

「じゃあ、いくよ。ゲートにエネルギー供給、開始。」

ことがエンターキーを押すと、ゲートが素早く開いた。するとすごい勢いでみさが引き込まれた。

「流されなですな。」

みさはひもにつかまり、ゲートの方に少しづつ降りて行った。エビふりヤーもその場所に留まるために、必死に堪えていた。ことがアルドアに話しかける。

「すごい情報の流れ。観測装置からの通信に雑音が多くて、細いテレメトリーでの情報の回収は無理みたい。」

「ゲートが閉じた後で、観測装置に記憶した情報を取り出せば大丈夫。今は王女様をガイドしない。」

「わかった。みさちゃん。うん、その調子。あと、5センチメートルほど下がって。」

「ここですな。」

「そうそこ。じゃあ、観測を始める。1分ほど待って。」

観測装置が観測を始めた。みさに伝えた。

「今は細かいことは分からないけれど、あとで情報を取り出せば、閉じる機構の構造がわかるはず。」

みさは右手で観測装置を持ち、左手でゲートの枠につかまって情報の流れに逆らっていた。流れのために体の大部分はゲートの内側に入っていた。

「うん。データは取れたみたい。そこから上に1.5メートルほど上に行って。次は上の機構も観測する。」

「わっ、わかったですな。」

みさは枠を伝って、ゲートの上の方に移動していった。」

「上下とも同じ構造だと思うけど。」

「99%そうだと思う。けど、念のため。」

「そうだね。」

しかし、みさが上に移動する途中に手を滑らせてしまった。

「わーですな。」

体に巻きつけたひもで宙ぶらりんになっている状態になった。ただ、なんとか左手でロープを掴み体勢を保っていた。ことがエビふりヤーに指示をする。

「観測は中止！エビふりヤー、みさちゃんを引っ張り上げて。」

「わかりましたでございます。」

エビふりヤーが体をそらしてみさを引っ張り上げる。みさは、少しずつゲートの内側から外側の方へ向かって動き出した。

「エビふりヤー、その調子。」

りととまりも声をかける。

「エビふりヤー、頑張れ。」「エビふりヤー、頑張つて。」

ここはエビふりヤーを見ずにキーボードを叩いていた。アルドアに言う。

「ゲートが開いているうちに、記憶部の中にゲートから制御部へのデータパスを作っている。こ

れでいい?」

「えっ、制御部へのデータパス。あっそうか。わかった。確認する。」

「お願い。」

「パスの中間の記述をこっちに差し替えて。その方が情報が拡散しない。」

「これね。そうね。わかった。差し替える。」

「オプションO3でコンパイル。オプションlstreamでリンクエディット、ローダー起動、制御部プログラムへの実行時ロード完了、記憶部から制御部へのダイレクトメモリーアクセスを許可、イニシエーター起動、実行開始!」

ゲートでは、エビふりやーがみさを引き上げるために、本当に床に食らいついて頑張っていた。『どうすれば良いでございましょう。体をそらしたただけでは、ここまで引き上げるのが精一杯でございませう。私が前に進めれば良いのでございませうが、床を離れた途端、私めも引き込まれてしまふそうでございませう。』

りとがエビふりやーに提案する。

「一度下ろして、思いっきり引き上げて、勢いでエビふりやーのところまで飛ばすことはできない?」

「ひもにかかる力が心配でございませうが、それしか方法はなさそうでございませう。ひもにつかまっているみさが返事をする。」

「その前に、上の機構までもうちょっとなので、上の機構を観測してみますな。エビふりやーはそのままでいて欲しいですな。」

そう言っ、みさは両足を使って上の機構の方に少しずつ移動していった。

「ことこちゃん。データは取れそうですな?」

「えっ、あっ、ちょっと待って。あと、そう上に3センチメートルで取れそう。」

「わかったですな。」

そう言いながら、みさはゲートの上の方に手を伸ばした。ことがみさに言う。

「位置は大丈夫だけど、装置が揺れていて。」

「揺れを止めればいいですな。」

みさはひもを掴んでいた左手を離して、腕を交差させてゲートの枠を掴んだ。

「それで大丈夫。また、1分間そのままお願い。」

「わっ、わかったですな。」

みさは苦しい姿勢を保ち続けた。1分間してことがみさに言う。

「うん、もう大丈夫。じゃあ次はエビふりやーの番。みさちゃんを勢いを付けて引っ張り上げて。みさちゃんがゲートから離れれば、ゲートが閉じるとは。その後で細かいデータを回収する。エビふりやーお願い。」

「分かりましたでございませう。」

エビふりヤーがそりを戻そうとしたとき、りとが叫んだ。

「エビふりヤー。戻すのを少し待って。」

「えっ、何でございます。」

「みさちゃん。急いでひもを掴んで。」

りと忠告は遅かった。エビふりヤーがひもを緩め、みさの手がゲートの枠から離れた。腕が交差していたため、今度はひもを上手に掴めなかった。みさがバランスを崩して反対向きになってしまった。

「わーですな。」

「姫様！」

まりが叫んだ。

「みさちゃん！」

その瞬間、体に巻きつけてあったひもからみさの体が抜けてしまった。全員が息を飲む中、ことが冷静に叫ぶ。

「データパスオープン。データアクイジション開始シグナル送信。」

ゲートの中に落ちて、みさの叫び声がだんだんと小さくなった。りとがことを呼ぶ。

「こここ！」

「記憶部にデータパスを通したの。みさちゃんのデータは制御部に行くはず。そこで解析装置のデータを取れる。そうすれば、みさちゃんも戻れるはず。」

「本当に？」

「大丈夫なはず。あと数秒で到着するはず。」

そのとき、アルドアが叫ぶ。

「王女様のデータが何かと衝突しました。」

ことが驚く。

「えっ。待って、今調べてみる。」

みんなが心配そうにこのことを見つめる。

「本当だ。固まっているスクーパーズの情報とぶつかって、ぶつかったデータが制御部に行ったみたい。」

そのとき、りとのアマツマラの制御部から信号が出力されてきた。

「なんだろう。」

ことが、そう言いながら、それを音声信号に変換した。

「ここはどこだ。僕は死んだんだけど。天国？地獄？本当に何もないところだ。」

ことがそのデータに尋ねてみる。

「こんにちは、あなたはどなたですか。」

「あれ、どこからテレパシーが聞こえる。神様？それとも地獄の使者かな？黙っていてもしよ

うがない。とりあえず答えよう。僕は、宇宙遠征軍第8連隊第111分隊所属のゼクールです。」  
ゼクルールの情報は記憶部に入ったばかりだったので、まだ、拡散していなかったのである。その声を聞いて、りとが驚いて言う。

「えっ、ゼクール。本当に？さっ、さつきは殺しちゃってごめんなさい。私は須藤りと、スクーパーズの皆さんが棒人間と呼んでいる人間です。事情がわかっていなくて、みさちゃん、みさ王女様を狙っていると思って本当にごめんなさい。」

「いいえ、こちらこそ、王女様を誘拐したと早合点して攻撃して申し訳ありませんでした。それに、一時は、棒人間様、りと様が言っている通りでしたので自業自得です。それより今はどうなっているのですか。」

「ここが概要を説明する。」

「そうですね。情報だけがアマツマラに。その情報でスクーパーズのみんなを再生することができるかもしれないのですか。それはすごい。分かりました。僕にできることがあれば何でもしますので言って下さい。」

「じゃあ、まず、みさちゃん、みさ王女様を探して欲しいの。」

「みさ王女様を?!」

「うん、みんなを助けるためには、情報ゲートを閉じる機構を破壊しなくてはいけなくて、その構造を調べるためにみさちゃんがそっちに行ったの。」

「こっちに来たということは、王女様も亡くなられたのですか。」

「そうなるけど。みさちゃんが自ら望んで行ったの。」

「何で止めて・・・王女様のことだから、止めても聞かなかったんでしょね。」

「うん、そう。それで、いまゼクールさんがいる制御部までのデータパスを作ったんだけど、途中で他の情報と衝突して、みさちゃんの情報が到達できなかったみたいなの。」

「ぼくの情報とぶつかったということですか。」

「そうだと思います。」

「僕は、なんて役立たずなんだ。王女様が命を懸けて情報を得ようとしていたのに。」

「その話しは後で。衝突したのは制御部のすぐそばだから、引き上げられると思う。」

「わかりました。」

「気をつけて。記憶部に完全に入ると意識が無くなってしまうから。」

「まずは記憶部を覗いてみて。こちらも、ゼクールさんの情報を解析してサポートをするから。」

「了解です。」

ゼクールが記憶部を覗いた。あまり綺麗とは言えない情報が漂っていた。

「何だ。このくつついた情報は。少し気持ち悪いな。」

「2体の情報が結合しているために拡散しなかったみたい。ゼクールさんが受け取った情報から名前を推測すると、パドとイワタというスクーパーズさんみたい。」

「バドとイワタが・・・なんでくつついているんだ。喧嘩ばかりしていたようだけど。」

「ゼクールさん、その話は今はいいです。情報が拡散しないうちにみさちゃんを探して。」

「すみません。あの情報は!？」

ゼクールは明るいピンクに輝く情報を見付けた。

「右上のピンク色の情報がそれらしいように思いますが。」

「当たり前!その通り。ゼクール。情報が拡散しないように、その情報にくつついて。」

「えっ、王女様にですか。それはさすがに・・・」

「いいから。みさちゃんには後で説明する。絶対に分かってくれるから。みさちゃんが持っている閉じる機構の情報を少しでも失いたくないの。ゼクールが初速をつけて飛び出せばみさちゃんのデータに到達できる。こちらはデータバスを修正して、2体が制御部に戻れるようにするから。」

「途中に障害物はないですね。」

「うん、障害物がないことは確認した。ゼクール、行って。」

「わかりました。進路クリア、ゼクール、行きます。」

ここはゼクルルのデータがみさに到達したことを確認しながら、プログラムを修正するためにタイプを開始し始めた。

「データの拡散はゼクールが防いでいる。落ち着いて、バグを作らないようにしなくちゃ。うん、パラメータの修正だけでいけそう。parameter.hを編集。曲線パラメータ修正。アルドア!これでいいと思う?」

「こここちゃん、さすが完璧!」

「そう、有難う。じゃあ、再コンパイル終了。リンク終了。実行時再ロード終了。」

ここは再度確認したあと叫んだ。

「データバス再構築プログラム、起動!アルドアの命がかかっているの。お願い制御部に戻って。」

「絶対、大丈夫。」

少しして、制御部から声が聞こえた。

「なんかきついですな。何ですな、ゼクールですな。何、抱きついているですな。」

「わっ、わっ、ごめんなさい。これは、ことこさんのご命令で。」

「こここちゃんが言ったですな。では仕方がないですな。こここちゃん、聞こえますな。」

「みさちゃん!良かった。」

「何があったですな。」

「途中でみさちゃんとゼクルルさんの情報が衝突して、上手くいかなかったの。それで、情報の拡散を防ぐために、ゼクルルさんに押さえてもらったの。」

「そうですな。ゼクルル、ご苦労様ですな。それにしても、きついですな。」

ゼクールはみさ王女と密着している状態で何も考えることができていなかった。

「大変申し訳ありません。場所が狭くて、王女様と密着できて、もう思い残すことはありません。記憶部に戻ります。」

「それは、気にしなくていいですな。狭くてもここにいますな。」

「わかりました。」

ゼクールは至福の時を迎えながらも、兵員の常として、王女様を守るためにあたりを警戒していた。

「それで、ことちゃん、閉じる機構の構造の情報は取れそうですな？」

「うん、いま転送している。大丈夫そう。これからアルドアと解析する。」

「それは良かったですな。アルドアにもよろしく伝えて欲しいですな。」

「……」

ことはデータ解析に集中していて、もうみさの話は聴いていなかった。それで、りとがみさに話しかけた。

「ごめん、みさちゃん。ことはデータ解析に夢中で聞こえていないみたい。」

「そうですな。さすがはことちゃんですな。ところでエビふりヤーは大丈夫ですな。」

「うん、あの後、ゲートが閉まったから大丈夫。ゲートの前で待機している。」

「それは、良かったですな。あとは閉じる機構の解析しだいですな。」

「うん、そう。」

アルドアとことが話し合っていた。

「このピンが支点だから、ここを破壊できればいいんだけど。でも、奥の方にあるから、表から壊すのは難しそう。」

「表面だとここに弱いところがあるから。そこを壊せば、でも、そこからだとピンは少し遠いか。」

「うーん。」

「うーん。」

それを見ていたりと言った。

「とりあえず、その表面を壊してみよう。そうすれば、エビふりヤーが何とかできるかもしれない。」

「りとちゃんという通りかも。」

「そうだね。とりあえず、そこから中を探ってみよう。」

「ここがエビふりヤーに指示する。」

「エビふりヤーさん、座標で（128.2, 0.0, 169.2）の位置の周りを切り裂いてみて。そこだけゲートの板が薄いから切り裂けるはず。そこから、ゲートを閉じる機構の支点のピンを壊す方法が探れると思う。」

「分かりましたでございます。それにしても、何でそこだけ薄いのでございましょう。」

「バックドアみたいな感じで、アマツマラを作った人も何かあったら開け続けていられるようにしたんじゃないかな。だから、そこから閉じる機構のピンを壊す方法もあるはず。」

「そうでございましたか。では、やってみるでございませう。」

「ゲートは固定した。お願い。」

「この位置でございませうね。いくでございませう。でやー！」

掛け声とともに、壁の一部を切り裂かれた。

「あと3回」

エビふりやーは、壁の表面を四角に切り取った。

「ことこ様！壁に穴が開いたでございませう。」

「やった！エビふりやー。すごいすごい。」

「お褒めいただき、ありがたき幸せでございませう。」

「それで、中の閉じる機構は見える？」

「ああ、あれでございませうね。」

「その支点のピンは？」

「はい、かなり奥まったところにありますが、見えるでございませうよ。」

「それを壊すことはできる？」

「うーん、かなり狭いでございませうから。」

りと言おう。

「その周りのものを全部壊しちゃえば？」

ことが止める。

「だめだよ。それじゃ逆にゲートが開かなくなっちゃうかもしれない。」

また、りと言おう。

「そうだ、エビふりやー、小さくなってそこまで行って壊せば。」

「ピンのところまで行くことはできそうですが、小さくなると、ピンを壊せるかどうか。」

か。

「大丈夫だよ。気合で壊せるよ。」

「りと様はそうかもしれないでございませうが。うーん。」

「大丈夫、絶対にできるよ。できないと、みさちゃんが死んじゃうんだよ。」

「そうでございました。エビふりやーの名にかけて壊して見せるでございませう。」

「そう、頑張れ！」

「分かりましたでございませう。真・エビふりやーに超擬態。」

エビふりやーはエビフライの大きさになった。

「では行ってくださいます。」

エビふりやーはゲートの開閉機構の狭い中を進んで行った。その時、モニターを見ていたことこ

が叫ぶ。

「危ない。右に避けて！」

「はい？でございます。」

と言いながら右によけると、ビームがエビふりヤーの右のころもにかすりながら通過していった。ところがエビふりヤーに言う。

「良くわからないものがあるなど思っていたんだけど、侵入防止装置みたい。起動してわかった。」

エビふりヤーがビームが来た方向を見ながら言う。

「あれでございますね。止められないでございますか。」

「今、やっているけどちょっと待って。今のビームの他に右と左下にもある。気を付けて。」

「分かりましたでございます。遮蔽物もありますでございますから、なんとかするでございます。」

ビームが3方向から飛んでくる中、エビふりヤーは、尾で弾き返したり、物陰に隠れたりして、少しずつ閉じる機構のピンの方へ進んで行った。その途中、ビームがかするところもがだんだんポロポロになってきていた。

「ピンまでもう少しでございます。しかし、ここからピンまで遮蔽物がないでございます。どうすればよろしいでございますか。」

りと言う。

「少しだけ止まって、ビームが集中するようにして、それを尾で弾き飛ばせばいいよ。」

「そんな簡単に言われても。」

「私なんか地球の普通の女の子なのに、千本近いビームをかいくぐったんだよ。エビふりヤーはスクーパーズ最強の兵だったんでしょ。できるよ。」

「りと様が普通の女の子というのには同意しかねるでございますが、その通りでございます。りと様がおっしゃる方法でやってみるでございます。」

エビふりヤーが遮蔽物から顔を出して少し静止した。そこを狙って3本のビームが飛んできた。

エビふりヤーは反転するとその3本のビームを尾で弾いた。それをみたりとが叫ぶ。

「エビふりヤー、うまい！ビームの反動を使って加速した。」

「はいでございます。このまま、行くでございますよ。」

エビふりヤーはビームを弾いた反動も使って、ピンまで高速に直進し、思いつきりのけぞった後、真っ直ぐになり、その反動を使って尾でピンを破壊した。

「やったでございます。」

「さすが、エビふりヤー！やればできる子。」

「子でございますか。でも、お褒めいただき、有難うございます。」

それを見ていた、ところが冷静に言う。

「ゲートを閉じる機構のピンの破壊を確認。下側のゲートの閉じる機構が動作しないことを確

認。エビふりヤー上手くいったよ。上の機構も同じ要領でお願い。」

「分かりましたでございます。要領は掴めましたので、簡単でございます。」

エビふりヤーはゲートの外に出てから、上の機構のピンも破壊した。

「やったー、これでゲートを開いたままにできるよ。じゃあゲートを開けて、記憶部の情報からスクーパーズさんたちを再生する。次は、りとちゃん、お願い。」

「方法がわかんないけど、やってみる。」

「エビふりヤーはまた離れたところで待っていて。」

「分かりましたでございます。」

エビふりヤーが外に出て離れてゲートから離れた。ことがゲートのエネルギー供給を開始する。するとゲートが開いて、エビふりヤーが記憶部の中の方に引き込まれていった。

「あれー！ことこ様！」

エビふりヤーが吸い込まれても、ゲートは開いたままだった。エビふりヤーの叫び声を聞きながら、ことこがつぶやいた。

「そうか、エビふりヤーさんの疲労を計算していなかった。でも大丈夫。他のスクーパーズと一緒に再生するから。」

分析装置を見ながらことが言う。

「ゲート解放成功！やった。りとちゃん、中のスクーパーズの情報が感じられる？」

「ちょっと待って。」

りとはアマツマラの中から伝わってくる情報を感じながら言った。

「うん、3212体の情報。全員わかる。」

「本当に！さすがはりとちゃん。りとちゃんは復元したスクーパーズが外に出れるように窓際に移動して。」

まりが言った。

「そうね、この部屋中に3千体のスクーパーズが入ったら、PARKがこわれちゃうわね。」

りとも窓際に歩きながら返事をした。

「分かった。」

窓際に着いた後、つぶやく。

「みんな、別々の個性を持って。いろんなことを考えて。怖さを乗り越えて戦っていたんだ。それに、みんないろんな希望を持って。そんなこと何も考えないで殺しちゃってごめんね。今、元に戻すから。」

「そうだよ、りとちゃん。みんな良いスクーパーズばかりだったんだよ。」

「そうだね、ことこの言う通り。ん、でもちょっと待って、何この情報。リコとジヤモチャってリア充じゃん。何か復元したくないな。この作戦が終わったら結婚するって、そんなの完全に死亡フラグじゃん。このまま死んどけって感じだよ。」

「りとちゃん！そんなこと言っていないで、全員そのまま復元して。まわりも言う。」

「りとの気持ちは良くわかるけど、ここはそのまま復元しよう。」

「わかっている、わかっているって。冗談だよ。二人とも、もう。冗談。みんなそのまま復元すること。ここが中のみさに連絡する。」

「みさちゃんたちも、記憶部に戻って。」

「分かったですな。ゼクル、行くですな。」

「はい王女様、お供します。」

りとは目を閉じて、アマツマラの中のスクーパーズの情報を正確に捉えようとしていた。そして、静かに言った。

「Our Creation Changed by Park」

PARKの周りが光で満たされた。その光は宇宙に広がって行った。そして、多数のスクーパーズが復元されて、原宿の空に広がって行った。最後に復元されたみさ、エビふりゃー、ゼクルが、りとの前に表れた。りとが尋ねる。

「みさちゃん。大丈夫？前と変わらない？」

「うーん、大丈夫ですな。」

みさは、いろいろな確認しながら、再度言った。

「大丈夫ですな。エビふりゃーとゼクルはどうですな。」

エビふりゃーとゼクルは自分やお互いを見たり叩いたり、スクープビームを発したりしながら答えた。

「はい、大丈夫でございます。」

「はい、前と変わっていないようです。」

「それは良かったですな。さすがはりとちゃんですな。大丈夫のようですな。」

りとはみさを抱きしめながら言った。

「本当に良かった。みさちゃんが死んじゃったらどうしようかと思った。」

「その時は自業自得ですな。自分の責務を果たそうとして失敗しただけですな。りとちゃんが気にする必要はないですな。」

「でも。」

りとを見ながら、みさが言う。

「心配してくれて有難うですな。りとちゃんは、無二の親友ですな。これからよろしくですな。」

「分かった。困ったことがあったら言って。何でもするから。王女様のみさちゃんの力になるから。」

「有難うですな。とりあえず、外のスクーパーズ兵に何か言って戦いを止めてくるですな。そうしないとまた戦争になってしまうですな。」

「わかった。」

「ゼクルル、この作戦の本当の目的のことは暫くは秘密にして欲しいですな。父上がこんなことをするのは絶対に止めさせると約束するですな。だから、お願いですな。」

「分かっております。私は王女様の盾となり、絶対に王女様をお守りします。」

「有難うですな。父上と対決することもあるかもしれないですな。」

「例え王様が相手であろうとも、王女様に従います。」

「お願いするですな。それではゼクルル、皆に話しに行くですな。」

このときは、この親子の争いが局所銀河群の中の十数の銀河を巻き込んだ大戦争に発展するとは、さすがのみさでも想像することはできなかった。

みさたちが、スクーパーズ兵に話すためにPARKの外に向かおうとしたとき、みさがエビふりヤーを制止して言った。

「お前には、まだここで仕事してもらわなくてはいけないですな。」

「えっ、でございます。」

みさが微笑みながら言った。

「スクーパーズの情報が入っているアマツマラがまだ2個あるですな。だから、あと2回、アマツマラの中に入ってもらわないといけないですな。」

エビふりヤーが振り返ると、りとが微笑みながらエビふりヤーを見ていた。

「姫様も、りと様も悪魔でございます。」

第12章 原宿の結婚式

PARKの上空では、3000体以上のスクーパー兵たちが戸惑いながら話していた。

「あれ、僕たち死んだんじゃないっけ。」

「俺は散弾に当たって、体にたくさん穴があいて。すごく痛くて意識が無くなって。僕のスクーパーズコアじゃ、あれほど負傷したら死んだはずだよ。」

「私なんて分隊の仲間と竹下通りで物陰に隠れていたから、いきなりスクーパーズコアを撃たれて。痛くはなかったけれど、間違いなく死んだはずだよ。何が起きたの？」

ジャモチャが分隊で最初に戦死したギデを見付けて、あたりを見回しながら話しかけた。

「ギデ、お前も無事なのか。」

「ジャモチャさん。私は刺されて死んだと思いますが、ジャモチャさんが助けて下さったのですか。」

「いや違う。俺も棒人間、お前を殺した人間に真っ二つにされて、死んだはずだよ。」

「そうですか。了解です。状況は隊長に聞いてみます。」

「隊長でもわかるかどうか。」

その時、上から声がかかった。

「ジャモチャ！ジャモチャ！」

上を見たジャモチャの表情が急に嬉しそうな表情に変わった。

「リコ！」

「ジャモチャ！良かった無事だったのね。良かった。私は何なの？幽霊なの。でも、また会えて嬉しい。」

「いや、色もついているし幽霊には見えない。実は俺もあの後死んだんだ。」

「そうなの？じゃあ天国かな。でもジャモチャと一緒にいられるなら、それでもいい。」

「僕もそうだ。」

リコがギデを見付けて言った。

「ギデもいるんだ。死んだスクーパーズだけでも、みんな一緒だといいいね。」

ギデがパドとイワタを見付けた。

「パドさんとイワタがあっちにいます。」

それを見たジャモチャが言う。

「本当だ。でも、パド、イワタがくつついていぞ。何でだ。」

リコが答える。

「いつも仲が悪かったから、神様がくつつけたのかな。」

「そうかもな。」

3体はパドとイワタの所へ向かい。ジャモチャが尋ねた。

「バド、イワタ、何でお前らくっついてるんだ。」  
バドが答える。

「何でか良くわからない。でも、少しだけだけど、体の一部がイワタと融合している。」  
イワタも答える。

「それはそうですが、一体、何が起きたんでしょ。私は棒人間に撃たれて死んだはずですよ。」

「俺は、棒人間に切られて死んだ。どうしたんだ本当に。」

リコが言う。

「やっぱり、ここが天国なのかも。」

ジャモチャが言う。

「そうかも知れないが、景色はまだ原宿と同じだ。油断するな。やつらが出て来るかも知れない。」  
バドが答える。

「ジャモチャの言う通りだ。戦闘態勢を維持するぞ。ジャモチャ、俺とイワタをスクープビームで切り離してくれないか。切り離れたぐらいの怪我ならば大丈夫だ。」

ジャモチャはそれは乱暴だと思っ言う。

「乱暴だな。軍医に見てもらった方がいいんじゃないか。」

バドがせかす。

「それじゃ戦力が減る。ビームで切り離して大丈夫だ。イワタもいいな。」

「いえ、僕は軍医に見てもらいたいです。」

「臆病なやつだな。我慢しろ。これは命令だ。ジャモチャやってくれ。」

「怪我したら戦力になりませんよ。」

下から声がかかった。

「みんなも無事なんだ。」

「あつ、ゾロモ軍曹。はい、無事であります。」

「私は戦車砲で撃たれたわ。無事なわけではないんだけど。」

「はい。私も死んでるはずですよ。あちらで隊長たちが話し合っています。そのうち情報が伝わって来ると思います。ここはまだ原宿で安全とは言えません。戦闘待機が望ましいかと思えます。」

ゾロモ軍曹、ここでは一番階級が上です。指揮をお願いします。」

「わかった。やつらの本拠地を覗き見ることができる、あの建物の影で待機する。」

全員が答えた。

「了解。」

第7連隊の蟹爪ふりやも状況が分からなかったが、普通のスクープパースの姿になり、大声で指示をしていた。

「第7連隊は明治通りまで下がり低空で待機。至急点呼を取れ。」

ラフォーレ原宿に置いてあった予備のボードを取ってくると、蟹爪ふりやの姿に擬態し、明治

通り上空で隊員を見守っていた。

「中隊長のダイルとベナもいる。どういうことか。」

各中隊の伝令から作戦参謀に情報が伝えられ、それが蟹爪ふりやーに届いた。

「第7連隊隊員は全員無事で、明治通りに待機しています。」

「一体も欠けずにか。」

「はい、一体も欠けていません。」

「それは良かったが。」

ガーチューンは、PARKの近くの低めの位置であたりを見回していた。

「何が起きた？かなりの隊員がいる。俺は死んだはずだ。ここは天国か？だか周りは原宿のままだ。地獄なのか。アルドアはいるか。いたら返事をしてくれ。」

ガーチューンは状況を分析するため、アルドアを探したが、自分の周りにはいなかった。

「連隊長！」

「ガジメ！お前も無事か。」

「無事なんですか？場所は原宿のようですが、ここが地獄と言うことでしょうか。」

「状況がわからない。アルドアはいないようだ。」

「ゼクールはいませんが、それ以外の第111分隊の隊員がここにいます。」

「そうだな。第111分隊は俺も見つけた。お前の分隊は、ゾロモ軍曹の指揮で敵の本拠地が覗ける位置で戦闘待機しているようだ。さすがだな。」

「有難うございます。私よりしつかりしています。ただ、もしここが地獄とすると、実は我々はここに来る前から死んでいて、地獄に落ちていたということでしょうか。」

「揚陸艦が爆発でもして、瞬時に全員死亡して、気付いていなかったということか。」

「はい、それである棒人間が地獄の鬼ということかと思いました。」

「ということは、これから永久にあれと戦って殺され続けなくてはいけないのか。」

「ゾっとしますが、次は勝ちましょう。」

「そうだな。死ぬほど痛かったが、恐れることはないな。何回かかっても絶対に勝とうな。」

「はい、連隊長とならば、絶対にめげません。絶対に勝ちましょう。」

「ああ、やってやるか！」

そのとき下から声がかかった。

「演習は終了ですな！みんな整列するですな。」

ガーチューンらが下を見ると、みさ王女様がゼクールと共にPARKの建物の屋上にいて、兵員に呼びかけていた。

「演習?!これが演習だったのか!おー、ゼクールも無事か。良かった。」

ゼクールが続けた。

「私も今、王女様から伺ったのですが、原宿で起きたことは最新鋭の強化現実環境生成装置オーディナル・スクープによるもので、スクープパーズコアに直接信号を送り込むことによって、現実には仮想空間をミックスさせたものだったそうです。残念ながらデストロイヤーズとの停戦はそんなに長く続かないとのことです。それを見越して、デストロイヤーズとの実戦にできるだけ近づけた演習をする必要がありました。負傷したスクープパーズ兵はいても、死亡したスクープパーズ兵はいないということです。」

ガーチューンが言った。

「驚いたな。これが強化現実なのか。」

ガーチューンのところにモーガンがやってきて話しかけた。

「ガーチューン、第11連隊の隊員は全員無事でここにいる。そっちはどうだ。」

「今、点呼を取っているが、ほとんどいると思う。初期の演習で負傷した兵が囲いの外にいて、集計しなくてはいけないので少し時間が必要だ。」

「わかった。」

ガーチューンがあたりを見回すと、第3連隊隊員が多数いて連隊長を探していた。しかし、ギンシア連隊長の姿が見えなかった。ガーチューンがみさ王女に尋ねた。

「王女様、ギンシア連隊長がここにいないようですが。」

みさ王女が答える。

「大丈夫ですな。少し待つですな。すぐにみんな戻ってくるですな。」

「わかりました。整列して待機しています。」

ガーチューンが第3連隊の第2中隊中隊長に指示した。

「ギンシアも、すぐに戻って来るそうだ。それまで君が第3連隊を指揮して、第3連隊を整列させてくれ。」

「わかりました。連隊長が戻られるまで、第3連隊を指揮します。」

PARKの中で、りとがエビふりヤーに話しかけていた。

「エビふりヤー、次はまりのアマツマラだけだと準備はいい?」

「はい、アマツマラの中はだいぶ分かってきましたので、大丈夫だと思いますが、そこへはどのようなに・・・」

「まり、モード何とかというやつは使えそう?」

「モードイレブン・ポジションワン?でも、ここで使うには威力がありすぎじゃないかな。」

「うーん、周りの建物を壊しちゃうかも。一番近いアマツマラに情報は吸収されるの。だから、一番いい方法は、まりちゃんはエビふりヤーの傍にいて、りとちゃんがエビふりヤーをアマツマラの中に送ることだと思う。」

りとは答える。

「ここ、わかった。その方法がいいと思う。」

まりがりと言う。

「りと、ごめんね。エビふりヤーとはたくさん話してきたし、楽しかったし。戻せると思って、やっぱり。」

「分かっているって。まりには向いていない。私がやる。」

「有難う。」

「ここも、いやだったら私がやるよ。」

「全然嫌じゃないけれど、この弓矢じゃ、エビふりヤーのころもを突破できなさそうだし。ピームライフルならば作れると思うけれど、撃ったことがないし周りが心配。」

「分かった、やっぱり私がやる。」

「りとちゃん、ごめんなさい。いやな役ばかりやらせて。」

「いいって。自分で始めたことだし、責任はとる。それよりここは、アマツマラの制御をお願い。」

「わかった。」

「でも、まりより離れていなくちゃいけないのか。何を使おう？ルナボルグかな。」

「うん、それがいいと思う。キャットストリートの前で見たけれど、あれならエビふりヤーを貫通した後にすぐに止めることもできるでしょう。」

「でも、エビふりヤーがさつきみたいに動くと、何回か貫通させなくてはいけないかも。」

エビふりヤーが言う。

「わたくしを槍で何度も貫通ですか。みなさんで、怖い話をしているでございませう。」

「大丈夫、私が抑えておく。」

そう言うのと、また光の板が出現して、エビふりヤーを6方向から囲んで動けなくした。エビふりヤーが言う。

「また、この光の板。動けなくなるでございませう。」

「ここ、すごい。アマツマラの力？」

「そうだと思うけど、本当は良くわからないの。何かさつき自然にできる気がした。私にもスクーパーズの情報が入ってきているのかもしれない。」

「そうか。じゃあ、後でアマツマラを壊せば消えちゃうんだね。」

「壊さなくても、アマツマラからスクーパーズの情報がなくなり、アマツマラから私たちへの情報供給がなくなれば、私たちの体に投射された情報は定着してないので、自然に消えてしまうと思う。」

「そうなんだ。」

エビふりヤーが話しかける。

「りと様、ことこ様、私をこんな状態で放っておかないで下さいお願いします。」

「ごめんごめん。じゃあ、行くよ。ルナボルグはその光の板を突き抜けるかな？」

「うん、大丈夫と思う。さっきのリア銃のバリエーションよりは弱いから。」

「じゃあ、まり。エビふりヤーの横ぐらいいいて。」

「わかった。」

まりがエビふりヤーの横に移動したあと、りとはルナボルグの準備をすると共に自分のボードをまりの前に飛ばし、コントロールして垂直に立てたあと話しかける。

「大丈夫だと思うけれど、念のため。じゃあ、行くよ。」

エビふりヤーが自分自身に話しかける。

「私は、千回死んでも仕方がない身でございます。今度は自分でも動かないようにするでございます。」

りとが体をそらせながらルナボルグを投げる態勢に入った。りとその表情を見たエビふりヤーは、

「やっぱり怖いでございます。」

と言いながら無意識に少し動こうとした。しかし、

「全く動けないでございます。」

とつぶやきながら、動くことができなかった。りとが、

「ルナボルグ」

という掛け声とともに、ルナボルグを放った。ルナボルグは、光の板を、そして、エビふりヤーのスクーパーズコアを貫いてアルパカの絵のパーカーの直前で停止した。エビふりヤーが消えた後、まりがりとに話しかける。

「りと、すごい。」

「P A R Kを壊さなくて良かった。」

「P A R Kは壊れたら直すけれど、エビふりヤーは大丈夫かな。」

「大丈夫じゃない。エビふりヤーだし。絶対何とかするよ。」

「そうよね。」

りととまりがことこの方を見ると、エビふりヤーとの交信を始めていた。少しして、ことこが言う。

「今回は順調だったよ。記憶部のゲートが開いて固定できた。まりちゃん、スクーパーズの情報を感じる？」

「うん、うん、感じる。たくさんいる。」

「その情報を実態に還元して。」

「うーん。もうちょっと可愛くしたいんだけど。」

「まりちゃん。だから。」

「分かってるって。ここは私のオリジナリティを抑えるわよ。」

りとも言う。

「うん、スクーパーズみんなも個性とオリジナリティも持っている。」

「そうね。その代わり、後でスクーパーズの服を考えることにするわ。」

「それがいい。デザイン画なら手伝うよ。」

「りと、ありがとう。じゃあ、そろそろいくわよ。」

「Our Fashion Changed by PARK」

光があたりを満たすと、数百のスクーパーズが現れて、窓から外に出て行った。そして、最後にエビふりヤーが現れた。ことが確認した後にまりに話しかける。

「まりちゃん、大丈夫。スクーパーズさんを完全に復元できた。」

「ほんと、良かった。」

次に、エビふりヤーに話しかける。

「エビふりヤー、完璧だよ。」

「有難うございます。今回は全く痛くなく、その後に作業に支障がありませんでした。ここご様に固定して頂いたおかげでございます。ただ、次はエビふりヤー、固定がなくても動かないでご覧にいきます。」

「本当に。わかった。」

りとも言う。

「スクーパーズ最強の兵としての誇りもあるよね。」

「はい、分かったのでございます。何で避けなくなるかが。りと様のあの形相を見るからいけないのでございます。りと様の顔を見なければ良いのでございます。」

「何、エビふりヤー。私に百等分にして欲しいの?」

「いやでございます。」

ことが話しかける。

「百等分でも、何でもいいけれど、エビふりヤー早くこっちに来てくれる。情報が保存されている時間が正確にはわからないの。みさちゃんのアマツマラにはスクーパーズの情報が入っていないので、これで最後だから。」

「ことご様も容赦ないでございます。ただ、わたくしがやらなくてはいけないことでございますね。行くでございます。」

「りとちゃん。アマツマラを置いて、こっちに来てくれる。そうすれば、りとちゃんがエビふりヤーに近づいてもりとちゃんのアマツマラに情報が入らないから。」

「そうか、さすがことご。」

りとはブレスレットの形をしたアマツマラを外して、棒も置いて、ことごとエビふりヤーの方に向かった。エビふりヤーはやはり心配そうに見ていた。ことごとりに言う。

「準備OK。」

「わかった。」

りとはエビふりヤーを抱き上げると同時に胸からペンを取り出し、躊躇なくエビふりヤーのスクーパーズコアを刺した。その間0.2秒もなかった。エビふりヤーがつぶやいた。

「さすが、りと様。顔を見る時間もなく。ではエビふりヤー、行ってまいります。」

エビふりヤーの情報がゲートの前に行き、ゲートを閉じる機構のピンを破壊したところで、ことがアルドアに言った。

「アルちゃん。記憶部に戻っていて。絶対に復元して見せるから。」

「わかった。もどっている。」

「うん。戻ったら、一緒に地球のアニメを見よう。」

「楽しみにしているよ。」

アルドアが記憶部に戻ったのを確認した

「アルちゃんがいる。後は、第3連隊？第3連隊のスクーパーズさんたちかな。じゃあいくよ。Our Otaku Changed by PARK」

第3連隊連隊長以下、最後にPARKに突入した隊員たちが復元して、原宿の空に飛び出て行った。アルドアはPARKの中に留まった。ことが嬉しそうにアルドアに呼びかける。

「アルちゃん！」

「ことごとちゃん。」

「アルちゃん、生き返った。よかった。」

「これも、ことごとちゃんや、皆さんのおかげです。」

「大丈夫？ちゃんと復元できている？」

「そうだね。他のスクーパーズのこともあるから僕が解析装置に入るから、ことごとちゃん、解析してみてくれない？。」

「わかった。スクーパーズコアを調べればいいんだよね。」

「うん、それで大丈夫。これが僕の元データだよ。」

アルドアがことごと、自分のスクーパーズコアのデータを渡した。ことごとが見守る中、アルドアが解析装置に入った。そして、ことごとが解析を開始すると、装置の中が、いろいろな色で輝きだした。アルドアが尋ねる。

「どう？。」

データをしながらことごとが答える。

「うん、大丈夫。解析できる範囲では完全に一致しているよ！」

「本当。良かった。有難う。これも、ことごとちゃんのおかげだよ。」

「ううん。アルちゃんがいなければできなかった。」

「それはどこちゃんも同じだよ。あと、王女様、エビふりヤー閣下。あと、棒人間様と射撃手さん。」

「りとちゃんとまりちゃんね。」

「失礼しました。りと様とまりさん。」

横で聞いていたりとが不満げに言う。

「アルドアだっけ。何で私だけ様付け？りとでも、りとちゃんでもいいよ。」

「それはちよつと遠慮したく思います。」

ことがとりなす。

「りとちゃん、まあいいじゃない。いろいろあるんじゃないかな。みさちゃんも、王女様で様付けだし。」

りとは少し不満だったが、とりあえず同意した。

「とりあえず、わかった。うん、みんな生き返って良かった。」

そして、まりがことに声をかけた。

「やっぱり、全員戻せて、なんかホッとしたわ。」

「うん。まりちゃんも、復元に協力してくれて有難う。」

「どういたしまして。」

アルドアがことに言う。

「本当に有難う。全員、ちゃんと復元できたみたいだ。でも僕は一旦、連隊に戻らないと。」

「わかった。また後でね。」

「うん、何か理由を付けてまた来るよ。それじゃあ。」

アルドアが去った後、薄っすらと涙を浮かべて、ことがホッとして言う。

「うん。全員を戻せた。本当に良かった。」

まりが答える。

「でも、この後スクーパーズさんたち、どうするんだろう。」

「それは、みさちゃんが考えてくれると思うよ。」

「それもそうね。王女様だもんね。こっちはPARKの再建を考えなくちゃ。建物は無事だから、内装からやり直しかな。せっかくだから、もっと可愛い内装にしたい。」

りとがまりに言う。

「うん、まりがデザインを考えてくれれば、手伝うよ。」

「アマツマラを使えばすぐだけど。」

「ううん。アマツマラを壊す必要はなくなったけれど、みさちゃんに返さなくっちゃ。まりと、ことごと私で頑張ろう。」

「店長は？」

「あっ、忘れていた。まりと、ことごと、店長と私。」

「店長があれだから、節約しなくちゃね。」

「うん、部屋の塗装は私がやる。やってみたい。」

「柵は中古のお店でもまわって見ようと思う。その方が面白いのがあるし。」

PARKの外では、第3連隊のギンシア連隊長が現れて、第3連隊のみんなが喜んでいた。

「連隊長もご無事でしたか。ご無事とは聞いていたのですが、なかなか出ていらっしやらないので心配しました。」

「いや私は死んだはずだ。何があったんだ。」

「最新の強化現実環境生成装置による抜き打ちの演習だったそうです。」

「なんだ、そうだったのか。そうだろう。はははは。もちろん私は最初から分かっていたがな。」

「さすが、連隊長閣下です。」

みさがPARKの中にいるりと、まり、ことごと、エビふりヤーを外に出てくるように呼んだ。りとたちが外に出て並ぶと、スクーパーズ兵に動揺が走った。みさはそれを無視して、スクーパーズ兵に話しかける。

「この3人の地球人が、今回の演習の敵役を務めた、りとちゃん、まりちゃん、ことごとちゃんですな。特に、りとちゃんはエビふりヤー侍隊長が直々に訓練していたんですな。」

蟹爪ふりヤーがりととの強さに納得した。

「エビふりヤー様が見込んで。きつとエビふりヤー様が見込んだほどの才能があったのだろう。確かに戦闘の感も速さも抜群だった。それにスクーパーズ兵にはない、独創性が加わっていた。それじゃあ強いわけだ。」

そして、みさが言った。

「3人の協力を感謝して、ビーム発射部を回すですな。」

(著者注…ビーム発射部を回すのは、人間の拍手に相当する行為である。)

ゼクル、アルドア、蟹爪ふりヤーなどはビーム発射部を回したが、他のスクーパーズ兵は見回すばかりでビーム発射部を回していなかった。それで、みさがまた言った。

「ビーム発射部を回すですな！りとちゃん、まりちゃん、ことごとちゃんとも、この演習のためにとっても頑張ったんですな。」

少しずつビーム発射部を回すスクーパーズが現れた。しかし、スクーパーズたちが小声で話す声が聞こえた。

「確かに4連隊を壊滅させたんだから、頑張ったというのは分かるけど。」

「棒人間のビームライフルのさばきはすごかったけれど。」

「散弾、死ぬほど痛かったんだよな。」

みさが大声で指示した。

「もっと、盛大にですな。」

エビふりヤーも指示した。

「王女様の御前での直接のご命令でございます。」

二人の指示で、全隊員がビーム発射部を回し始め、空気を切る大きな音がした。りとがまりに話しかける。

「スクーパーズのみんなと和解するには、少し時間がかかりそう。」

「そうだね。」

「でも、みさちゃんがいるから大丈夫。」

エビふりヤーも小声で言う。

「私もついででございます。」

「うん。有難う。エビふりヤー、スクーパーズ兵の尊敬を集めているし、頼りにしている。上手にスクーパーズと人間で平和な関係を築こう。」

「はいでございます。」

それを聞いていたみさも言った。

「りとちゃんの言う通りですな。そのためには、迷惑、そんなものではないですな、被害を与えてしまった地球の地域と和解することが必要ですな。スクープした物は返還できるですな。ただ、奪ってしまった命は、りとちゃんたちと違って復元することはできないですな。」

「本当にそうだね。でも、私たちでできることは手伝うよ。」

「有難うですな。」

みさは厳しい交渉を予感していた。

エビふりヤーの今回の演習に対する講評が始まった。

「私はここで皆の活躍を見ていた。今回はやはりガーチューンが率いる第8連隊が最後まで諦めずよく頑張り通した。大きな犠牲を出しながらも、冷静にそれを最小化するように努力して、目標の建物に侵入した。そして最後には1分隊だけになってしまったが、その中の1体が姫様の救出に成功した。文句なく、今回の演習では最高の成績だ。」

ガーチューンが王女の隣にいるゼクルルを見ながら、言葉を返した。

「私は戦死判定となってしまいましたでしたが、ゼクルルが王女様の救出に成功したのですね。こんな優秀な部下を持って、指揮官として誇り高いであります。有難うございます。」

「それに引き換え蟹爪ふりヤー、お前は何だ。最強の第7連隊の隊員を率いながら、りと隊員一人に意識を集中させすぎて全体を見ていなかった。またスピードで敵わない状況で、数の有利を有効に生かせずに、無駄に兵を消耗した。」

「言い訳は致しません。エビふりヤー様の言われる通りでございます。どのような処分でも受ける所存です。」

「それには及ばない。これは演習だ。その中で問題点を洗い直して、次につなげてくれれば良い。それに蟹爪ふりヤー、この演習のおかげで、お前もとうとう第2形態に擬態できるようになったではないか。この先、デストロイヤーズの特殊部隊と対決する可能性は十分ある。そのときは、お前が敵の特殊部隊を倒すんだ。」

「エビふりヤー様！エビふりヤー様、分かりました、この経験を生かして、必ずやデストロイヤーズの特殊部隊を倒して見せます。」

「うむ。頼んだぞ。」

「第11連隊モーガン連隊長。お前の部下に犠牲を出したくないという気持ちは良く分かる。だが、今回は慎重すぎて、全く何もできずに兵を全滅させてしまった。」

「エビふりヤー閣下、大変申し訳なく思います。」

「非常に残念なことだが、戦争において犠牲なしで勝利が得られることはない。特に、対デストロイヤーズ戦ではそうだ。慎重さばかりでなく、時には果敢さを発揮してこそ、犠牲を少なくして大きな成果を得る事ができる。」

「分かりました。」

「第3連隊ギンシア連隊長、猪突猛進、絶対突破不可能に近かった防衛線を突破する精神力は軍人として見事というしかない。」

「はっ、有難うございます。」

「ただ、もう少し犠牲を少なくする工夫も必要だ。」

「分かりました。作戦立案に際しては犠牲をより少なくすべく、さらに深く考えて立案しようと思えます。」

「うむ。」

そのとき、囲いからきしむような音がした。ことが叫ぶ。

「大変、壁の中性子の結合構造がどんどん不安定になってきている。もうすぐ壊れそう。」

りと言う。

「もう不要だし、壊れていいんじゃない。」

「ううん、壊れる途中で中性子がいつべんにベータ崩壊して、強力なベータ線とガンマ線を発生させちゃう。」

「発生すると、どうなるの。」

「少なくとも、東京の人はみんな死んじゃうかな。」

まりが言う。

「死んじゃうじゃないわよ。何とかしないと。」

「うん、外側と内側に放射線の緩衝壁を作らないと。」

囲いが怪しく揺らめき始めた。まりが言う。

「なんか囲いの様子が変、急いでお願い。」

「できた。」

「さすがごこと。早いわね。」

「でも、3人じゃ無理みたい。みさちゃんもお願い。」

「お安い御用ですな。」

「じゃあ、設計情報を送るね。」

4人が手をつないで、ごことから設計情報を受け取った。みさが言う。

「すごいですな。情報が伝わってくるのですな。ごことちゃんすごいですな。」

情報の転送が終わって、りとが言う。

「まりと私は外ね。」

「そう。」

囲いから大きな音がヒビが入ってきた。ごことが叫ぶ。

「あと5秒！」

まりが言う。

「5秒じゃ外に行くのは無理よ。」

りとが答える。

「まり、みんなアマツマラの起動を初めて。」

「えっ、分かった。」

りとがまりの手を掴む。そして4人が呪文を唱えた。

「Our Creation／Fashion／Otaku／Majesty Changed  
by PARK」

まりは目の前の空間が曲がったのを見て驚いた。まりは、りとがまりの手を引くのを感じた。次の瞬間、原宿の上空、囲いの外にいた。

「これがワープなの？」

同時にアマツマラが輝きだし、あたりを包んだ。囲いの内と外には緩衝へ壁ができていた。外は夕暮れが綺麗だった。渋谷上空に浮かんでいる宇宙艦隊がSFのようだった。緩衝壁の中が一瞬怪しく光り、暗くなっていた。中性子壁が崩壊したようだった。まりが気が付いた。

「私たち落ちている。りと。」

「うん、落ちている。」

「って、どうするの。またワープできる？」

「うーん、この辺にちょうど良いワームホールの入口がないみたい。重力を操って飛ぶのはまだ無理。逆に速く落ちることならできそうだけど。ボードを持ってきたら良かった。」

「持ってきたら良かったって。今から作る？」

「もう間に合わないかな。同じものはできないから、別のを作らなくちゃいけないし。バリアー最強で地面に当たって砕けるかな。でも、アマツマラにスクーパーズの情報がなくなっちゃっているから、バリアーの強度はちょっと不安。」

「りとは、もう、おつちよこちよいなんだから。」

「ごめん。でも、ことが東京の人がみんな死んじゃうって言ったから、焦っちゃって。」

「そっか、それじゃあ仕方ないわね。」

「まりは自分がクツションになるかも知れないと思って、りとを強く抱きしめる。そして、叫ぶ。」

「バリアー最大出力。緩衝材が柔らかければ良いけれど。」

「まり、苦しい。」

「黙ってて。」

緩衝壁に衝突しようとする直前に、ブレーキがかかった。不思議に思ったまりから言葉が漏れる。

「あれ、落下速度が、遅くなった。」

そして緩衝壁にゆっくりとぶつかかった。上から声がした。

「りと様、まり様、大丈夫ですか。」

ゼクールがスクープビームで二人を引っ張っていた。りとが見上げると、ゼクールだった。りとが答えた。

「あまり大丈夫じゃなかった。助かった。有難う。」

「間に合って良かったです。じゃあ、このまま王女様のところにお連れします。」

緩衝壁に当たった軽い衝撃で、中性子壁の芯がない緩衝壁も粉々に壊れていった。

「みさちゃんの命令で？」

「いえ、りと様がボードを置いて行かれたので、全速力で原宿駅の入口を通って来てみました。」

「そう、有難う。」

「それに、りと様たちが落ちると、下がどうなるか心配でしたので。まりが言う。」

「私たちじゃなくて、下の心配ね。」

「もちろん、りと様、まり様も心配でした。」

りとが言う。

「まり、ゼクールはそう。両方心配だったんだと思う。」

ゼクールがみさを見付けて言う。

「あっ、王女様が手を振っています。そこまで、お連れします。」

「有難う。」

みさの所に着くと、みさが言った。

「ゼクールが急に飛んで行ったんで何かと思ったですな。」

「はい、りと様がボードを忘れて行ったもので。」

りと言った。

「うん、助かった。さすが、みさちゃんの騎士様。」

みさも言う。

「そうですね。ゼクールは、みさの騎士ですな。もう絶対にお前を裏切ったりしないですな。」

ゼクールが嬉しそうに答える。

「はい、この命がある限り王女様をお守りします。」

りともゼクールに言う。

「何か手伝えることがあったら言って。喜んで手伝うから。」

「分かりました。王女様を守るために、お願いくこともあるかもしれませんが。その代わりではないですが、僕にできることがあったら何でも言って下さい。」

「うん、分かった。」

みさはりとゼクールが和解したのを見て、安心していった。その後、スクーパーズの各連隊は、それぞれの揚陸艦へ帰って行った。りとがみさに聞く。

「みさちゃんはこれからどうするの？」

「まずはこの国の責任者と会ってみるですな。」

「日本の責任者と言えば総理大臣かな。名前は知らないけど。」

みさが驚いたように言う。

「自分の国の最高責任者の名前を知らないんですな。」

「そんなに、驚かないですよ。あんまり関係ないし。ことも知らないよね。」

「前の山口総理は知っているけど。今の首相だれだっけ。」

まりが言う。

「響総理でしょう。でも、私たちと同じぐらいの歳の子は知らない人も多いかも。」

「そうですね。それはすごいことですな。」

りと言おう。

「ごめん。不勉強で。私じゃあんまり役立たないかも。」

「そうじゃないですな。名前を知らないで済むということが、すごいことですな。」

「そうなの。」

「スクーパーズだと、みんな私の家族や親戚まで知っているですな。」

「そうなんだ。」

まりが言う。

「日本にも、天皇と言って王様のような人はいるわ。ただ、統合の象徴、うーん、実際に政治にはかかわらないで、みんな仲良くしましょうとか、よく頑張りました、というようなことを言っているの。りとはあまり知らないかも。」

「ニュースで出てくるから顔は知っているよ。人の良さそうなおじさんっていう感じ。名前ってあるんだっけ。ニュースだと天皇陛下としか言わないから良くわからない。」

「苗字はないけれど、名前はある。」

「そうなんだ。」

みさが言った。

「王様が皇帝のような人がいるのに、政治にかかわらないというのは良くわからないですな。」  
りとが答える。

「大丈夫。私も良くわからないから。」

「天皇と響総理はどっちが偉いですな。」

りとが良くわからなそうだったので、まりが答えた。

「権威は天皇陛下、権力は響総理かな。」

「難しいですな。」

「とりあえず、響総理と話し合うのが良いと思う。」

「わかったですな。そうするですな。ただ、具体的にはどうすれば良いですな。」

そのとき、さゆみんがやってきた。りとに話しかける。

「りとちゃん、まりちゃん、ことこちゃん、大丈夫そう良かった。スクーパーズ兵がビーム礼

の恰好（地球の軍隊で言えば捧げ銃）していたから、戦闘は終わったと思って来てみたの。」

「うん、戦闘は終わって、だいたい和解できた。」

「本当に。それは良かった。」

「スクーパーズ兵さんがたくさんいるみたいだけど。」

「うん、死んだスクーパーズの情報が全てアマツマラの中に入って、復元できた。」

「復元？りとちゃんが言うんだから間違いないよね。でも、本当に良かった。じゃあ、お店にいたスクーパーズさんも無事なの？」

「うん、全員戻したから大丈夫だと思う。それより、みさちゃんがこの国の責任者と話したいみたいなんだけど、どうしたら良いと思う。」

「うーん。とりあえず六本木の避難所に行って、係りの人に連絡してみるのかな。」

まりも言った。

「それがいいと思う。やっぱり、大人のさゆみんが行くのがいいと思うけど。」

「私？スクーパーズの王女様と？うーん。でもわかった、ここは地球だし、私がみさちゃんに付いて行く。」

みさが言う。

「有難うですな。では、さゆみん、エビふりヤーと私で行ってくるですな。」

りと言った。

「エビふりヤーで大丈夫かな。せめてゼクルが付いて行ったら、だいぶ安心なんだけど。」

エビふりヤーが答える。

「大丈夫でございます。みさ様をお守りしようとする意思是、ゼクルにも負けません。」  
みさも言う。

「りとちゃん、大丈夫ですな。この国のスクープ作戦の途中で、この国とは一度も戦闘にならなかったですな。ここで、戦闘になる可能性はないですな。」

「分かった。でも、なんかあったら呼んでね。」

「はいですな。じゃあ行ってくるですな。」

みさ、さゆみん、エビふりヤーが六本木に向かった。

「じゃあ、りと、ことこ。こっちは、PARKの後片付けよ。」

「了解」「わかった。」

そう言いながら、3名はPARKの中に戻って行った。

原宿の囲いがなくなったことから、国家安全保障会議が緊急招集されていた。

「内閣調査室長、説明をお願いします。」

「現在確認を急いでいますが、原宿の囲いが消滅しました。消える前から異様な音がしていたのですが、突然、人間と思われる2名が原宿上空に出現すると、囲いの外側にさらに壁のようなものができました。そして、2名は落下していきました。スクープパズルの1体が落下を止めようとしたようですが、2名が壁に当たり、壁の方が粉々になって消滅しました。」

「それで、2名は無事なのですか。」

「はい、超望遠レンズで確認したところ、上のスクープパズと会話していたようですし、ゆっくりとPARKの屋上に降りて行きましたから無事だと思います。そして、ラフォーレ原宿上空に4千体近いスクープパズが整列しているのが確認できました。その後で、スクープパズは揚陸艦に乗船したようです。戦艦、護衛艦も原宿に集まって来ています。戦闘は終結したのではないかと思います。原宿にいる残りの2名の安否も気になるところですが、この先のスクープパズの行動が分からないため、現在、自衛隊には臨戦態勢を取っています。」

「我が国とスクープパズとの戦争に発展するかもしれないということですか。」

「現在のところは、何とも言えません。」

そのとき防衛大臣のところに緊急に防衛事務次官がやってきて、耳打ちをしようとしていた。響首相がその様子を見て言った。

「何か緊急の情報ですか？」

「はい、原宿内にいた鈴木彩友美、丸野みさと、エビふりヤーが六本木の避難所に来ていたということです。鈴木さんの説明によると、丸野みさはアメリカ人という話でしたが、本当はスクープパズ王の長女で、エビふりヤーもエビフライ星人と言っていました。本当はスクープパズ王の侍従長とことです。」

「スクーパーズの王女様ということですか。その確認はとれているのですか。」

「スクーパーズであることは、擬態を解除してスクーパーズの姿になったことを確認しています。王女であることは信用するしかないと思います。」

「わかりました。スクーパーズの兵員が上空の整列していたことから、間違いない可能性が高いと思います。それでどういう状況なのですか。」

「原宿で地球人とスクーパーズで戦闘があったが、現在は戦闘が終了し和解した。ついては採取したものは全て返還するので日本とも和平交渉をしたいということですか。」

「そうですか。それは解決に向けて3歩前進という感じですね。それで原宿に残っていた人に関して情報はありますか。」

「はい、須藤りとの祖母、須藤三輪子も原宿に残っていたとのことですか。まとめますと、原宿に残っていた鈴木彩友美、須藤三輪子、須藤りと、白子まり、綿紬ことこの5名、全員無事とのことですか。」

「それは良かった。それでスクーパーズの王女様との交渉はどこで行いますか。こちらから原宿に出向きますか。それとも、スクーパーズの戦艦でしょうか。」

「場所は指定してくれたところに、みさ王女が直接出向くとのことですか。随行員にエビふりやーと地球人の鈴木彩友美が同行することです。それと、同時に資料を渡されたのですが、銀河群条約と呼ばれる、千年以上前にこの銀河やアンドロメダを含めた数十の銀河で交わされた条約で、古いのですが、今でもこれに代わるものはできていないそうです。できれば、これに基づいて平和的に解決できればとのことですか。」

「外務大臣、これは保護を求めてきたスクーパーズ兵から聞いていたものと同じですか。」

「今確認させますから少しお待ちを。」

「わかりました。防衛大臣、六本木に王女様にお待ちいただける部屋はありますか。」

「はい、東京ミッドタウンにVIPルームがあると思います。」

「それでは、そこでお待ち頂いて下さい。」

「承知しました。」

「会談の場所は首相官邸としましょう。こちらからの参加者は、私、外務大臣と外務省の随行員、官房長官にします。外務大臣、至急、同行する人を選んで下さい。」

「承知しました。」

外務省の官僚が外部大臣に耳打ちした後、外務大臣が発言する。

「条約の内容は同じとのことですか。」

「それは良かった。この条約を解析している官僚を呼んで、ここでレクチャーをお願いして下さい。それを30分で終えて、会談は1時間の後の19時からとしましょう。会談の後、夕食の用意も必要でしょうか。逃亡兵の情報では、地球の食事でも大丈夫ということでしたが。」

「はい、地球の食事でも大丈夫とのことですか。至急、松本にいる調理人から、スクーパーズの好

物のメニューを取り寄せて準備致します。」

「1時間後に、首相官邸でお会いすると伝えて下さい。迎える車を向かわせて下さい。警察には護衛もお願いします。最重要の警備をお願いします。また、向こうから会いに来ると言っても、この銀河系を治める王族の王女様です。失礼だけはないようにして下さい。」

東京ミッドタウンのVIPルームで、日本茶を飲み、カステラを食べながらみさとさゆみんが話していた。

「カステラというものは、単純な味ですな。」

「そうね。原宿っぽくはないかも。」

「でも、とても深い味で、これはこれで美味しいですな。」

「みさちゃんの言う通り。シックな味とでも言えばいいのかな。うーん、クレープに取り入れることはできるかな。」

「さゆみんは、クレープのことを考えるのが好きですか？」

「仕事と言うこともあるけれど、やっぱり、美味しさは一つじゃないから、いろんな美味しさを追求していきたい。それに、それで喜んでもらえれば嬉しいし。」

「そうですな。さすがさゆみんですな。ところで、さゆみん。さゆみんは地球人ですか？」

「なっ、何を言い出すの？ 当り前じゃない。日本人です。」

「そうですな。みさもアメリカ人と嘘をついていたですな。」

「・・・。大丈夫、正真、正真正銘の地球人です。」

エビふりやーも言う。

「はい、生体信号も地球人のものがございますよ。」

「そうですな。それならば、良いですな。」

さゆみんが聞く。

「でも、どうして、そんなことを聞くの？」

「何でもないですな。ただ、さゆみん、りとちゃん、まりちゃん、ことこちゃん、みんながそれぞれすごすぎたからですな。」

「そんな、りとちゃんはすごかったけど、私はすごくないわよ。」

「まりちゃんは、全体のことを考えながら、りとちゃんを良くサポートしていたですな。ことこちゃんの分析能力もすごかったですな。死んでしまったスクーパーズをアマツマラの情報から復元する方法を編み出したんですな。」

「そう言われればそうね。でも、私は平凡な地球人だったでしょう。」

「そんなことはないですな。スクーパーズの捕虜をかくまったり、みさより気品を感じるですな。見習わなくっちゃと思ったですな。」

「気品があるなんて。」

「それに、エビふりヤーをワンパンで倒したですな。」

エビふりヤーが申し訳なさそうな顔をしていた。

「ワンパンで倒したって、あの時は驚いていたから。」

「驚いて、本当の力が出てしまったですな？」

「……でも、あの時かくまっていた捕虜のスクーパーズたちも生き返ってくれて、本当に良かった。」

みさには、さゆみんについて、思い当たる存在も無くはなかったが、みさは今の話を聞いて反省して謝罪した。

「つまらない話をして、ごめんなさいですな。さゆみんは、みさなんかでは足元に及ばない素晴らしい生命体ということだけは、みさにも分かるですな。地球人と言うことにはしておくですな。でも、もし、みさの力が必要なことがあれば、遠慮なく言って欲しいですな。今回のお詫びと助けてくれたスクーパーズたちのお礼に何でもするですな。」

「有難う。でも、大丈夫だから。」

「そうですな。分かったですな。」

その時、扉がノックされた。さゆみんが返答する。

「どうぞ。部屋に入っても大丈夫です。」

外務省の官僚が部屋に入ってきた。

「お迎えの車が到着しました。ご出発のご準備はお済でしょうか。」

さゆみんがみさを見てから答える。

「はい、出発できます。」

「それでは、お車までご案内いたします。」

「ありがとうございます。じゃあ、みさちゃん行こうか。」

「はいですな。」

さゆみんを先頭に、みさ、エビふりヤーが案内されて車に向かった。

首相官邸に到着すると、出迎えの外務大臣がやってきた。

「総理は、会議室でお待ちです。このままご案内してもよろしいでしょうか。」

さゆみんがまたみさを見てから言う。

「はい、大丈夫です。」

「それでは、お連れ致します。」

外務大臣の案内で、官邸の会議室に向かった。部屋の前で首相が待っていた。

「お待ちしていました。この部屋です。」

そう言いながら、みさたちを部屋の中に案内した。部屋の中では、外務省の官僚の面々が立って待っていた。首相がみさに声をかける。

「どうぞお座りください。」

「有難うですな。」

「私は響です。総理大臣、この国の代表を務めています。次に、外務大臣。外交関係の責任者です。」

「私は丸野みさですな。スクーパーズ王国の第1王女ですな。そして、これがエビふりヤー。侍従長を務めているですな。普段は、ここから5万年ぐらい離れたスクーパーズ本星で暮らしているですな。この度は、皆様にご迷惑をおかけして大変申し訳ないと思うですな。」

「今回の不幸なできごと、大変遺憾に思っています。デストロイヤーズとの戦闘を控えて、この銀河系が緊迫している状況とのことですが、ご相談下されば、できる協力は惜しまなかったと思います。」

「そうですね。そのことについても、大変申し分けなく思うですな。ただ、今は平和交渉を優先させたいですな。」

「分かりました。ただ、その前に原宿にいました、須藤三輪子、須藤りと、白子まり、綿紬ことこさんの健康状態をお聞かせ願えればと思います。」

みさは一国の代表者が一般の国民の心配をしていることに少し驚いていた。さゆみんが答えた。「りとちゃん、まりちゃん、ことこちゃんは少し疲れているかもしれないけれど元気です。おばあちゃんは、もう全然元気です。」

「そうですね。それは良かったです。では、平和交渉に話を戻しましょう。」

「こちらとしては、局所銀河条約に基づきたいと思うですな。」

「銀河群条約第22条の戦闘の補償に従ってですね。」

「その通りですな。スクープしたものを返還、損害に応じた資源による補償、それと地球の医療技術の向上に貢献するですな。それ以外の技術移転は、地球内や惑星同士の戦争の元になってしまいうのできないですな。それでも、普通の地球人がこの星での一番の死因となっているガンで死ぬことはなくなると思うですな。」

「それはすごいことです。日本としてはそれを基本としてまとめたいと思います。」

「それは有難いですな。」

「ただ、日本では死者がでなかったから良かったですが、アメリカ合衆国ではかなりの死者が出ています。王女様を裁判にかけることを要求する声も出てくるかと思えます。」

エビふりヤーが興奮して言う。

「姫様を犯罪者扱いにするでございませうか。それは、いくら迷惑をかけたからと言って、スクーパーズ王室の王女に向かって失礼であろう。」

「エビふりヤー、響首相は心配して言ってくれていますな。大人しくしていますな。」

「しかし、そんな無礼は王室の名誉にかかわるでございませう。そんなふらちなやつらは、このエビふりヤーが返り討ちにしてやるでございませう。」

エビふりやーが立ち上がろうとするが、さゆみんが抑え込む。

「エビふりやー、分をわきまえて。みさちゃんの命が危ないならばともかく、今はみさちゃんの言うことを聞くときですよ。」

エビふりやーがジタバタ動きながら言う。

「動けないでございます。動けないでございます。分かりましたでございます。姫様の言うことを聞くでございます。さゆみんは本当に怪力でございますね。」

「わかれば良いです。さすがスクーパーズ王室の侍従長。」

そう言いながらさゆみんがエビふりやーを離れた。みさが話を続ける。

「首相の言う通りですな。アメリカ合衆国との交渉は難しいと思っております。何か良い考えがあったら教えて欲しいですな。」

「基本的に地球に宇宙人を罰することができるとは法律はありません。戦争に関する条約も適用外ですし、地球人でないため人道に関する法律も適用外と思います。」

「それでどうなるですな。」

「責任を追及することができない以上、賠償金による補償が中心になると思います。ただ貨幣は意味がないと思えますので、先ほど言いましたように資源による補償になると思います。地球では価値のある金、プラチナ、レアアースによるのが良いのではないかと思います。」

「物で解決できるならば、それに越したことはないですな。」

「わかりました。合衆国大統領とはホットラインもあります、合衆国の意向を事前に伺っております。」

「それは有難いですな。」

「アメリカ合衆国を中心に補償基準をまとめて、国連を通じてその他の国と平和交渉を行うことが良いと思います。」

「その方法でお願いしたいですな。」

「わかりました。喜んで補償交渉のお手伝いを致します。その際に連絡などをしなくてはいけないのですが、どちらに滞在されますか。」

「原宿にいますな。」

「原宿ですか。もし必要でしたら、迎賓館をご用意しますが。」

「大丈夫ですな。滞在するのは原宿が良いですな。」

さゆみんが言う。

「スクーパーズがあまり広い範囲を動き回ると、地球人とスクーパーズの衝突の原因になる可能性があります。ですので、原宿をスクーパーズ特区にして、スクーパーズは原則原宿に滞在するようにしてはどうでしょうか。それ以外の場所に行く場合は日本政府の許可を取る。そして、スクーパーズの代表部をラフォーレに設置すれば、連絡も容易だと思えます。」

「原宿をスクーパーズ特区にですか。原宿の方々は大丈夫でしょうか。」

「それは心配いりません。変わったものが好きな人ばかりですから。みさが言う。」

「そうしてもらえると助かるですな。もう少しだけスクーパーズ軍が地球近くにいると思うですな。宇宙船の中だけだと息が詰まると思うですな。」

「わかりました。都知事と相談して急いで決めたいと思います。」

「有難うですな。」

「講和とスクーパーズ特区の件は承りましたが、他に何かご要望はありますでしょうか。」

「今のところはないですな。」

「分かりました。何かありましたら、官邸までご連絡ください。専用の電話番号は係りの者からお知らせします。」

「有難うですな。」

「夕食の支度ができていますが、如何いたしますか。できれば、銀河系の話をお聞かせいただきたいのですが。」

「さゆみんとエビふりゃーも良いですな？」

「もちろんです。」

「分かったですな。ご招待に預かるですな。」

夕食ではみさが銀河系内外の政治・軍事情勢について説明し、響首相は日本の政治体制に関して説明した。そして、天皇と会食することを約束するなどして、夕食会を終えた。別れ際にみさが言う。

「有意義な話し合いができて本当に良かったですな。また、夕食もとても美味しかったですな。」

「こちらは大変興味深いことが聞けてとてもためになりました。それでは、こちらは平和交渉に向けて作業を入りたいと思います。進行状況については逐次ご報告いたします。ご質問などありましたら、いつでもご連絡下さい。」

「有難うですな。」

みさは車に乗って、PARKへと帰って行った。車の中で考えているさゆみにみさが聞いた。

「何を考えているですな。」

「大したことじゃないんだけど。あの夕食、美味しかったでしょう。」

「そうですな。あんな美味しい食事は初めてですな。国の代表だからではないんですな？」

「うーん、スクーパーズの捕虜がどんな食べ物が好きか見て、スクーパーズの好みを研究していたんだけど、それとピッタリなの。何でスクーパーズの好みがあったんだろうと思って。」

「そうですな。」

「でも、さすがプロが作る味よね。隠し味が絶妙だった。クレープにあの隠し味を取り入れなくちゃ。」

「そうですね。それがいいですな。みさは、地球の民主主義に関してもう少し勉強してみますな。」

「うん、それがいいと思うわ。私も最初、民主主義にはびっくりしたわ。」

「そうですね。昔の日本の統治していた一族の血を引く天皇陛下という方に、民主主義がどんな感じが聞いてみるですな。」

第8連隊のガーチューン連隊長、アルドア少佐と第111分隊隊員がラフォーレの代表部の会議室に呼ばれた。全員が待っていると、すぐにみさとエビふりヤーが部屋に入ってきた。ガーチューン以下全員が敬礼をした。みさが話を始めた。

「今回のことは、みな大変だったと思うですな。」

ガーチューンが答える。

「おっしゃる通り、大変ではありましたが、良い訓練になりました。今回使用した最新の強化現実生成装置は本当に臨場感があり、ずうっと現実のことと思っていました。」

「それはそうですね。あれは本当に起きたことですね。」

「と、おっしゃいますと?」

「最新の強化現実生成装置なんてなかったですな。これから本当の話をするですな。その話を聞いてどんな判断をするかは、みなに任せるですな。」

隊員たちがざわついた。つづけて、みさが言った。

「アルドア少佐、説明をお願いするですな。少佐からの説明の方が、正しく説明できると思うですな。」

「分かりました。今回の作戦の目的・方法・結果に関して説明致します。」

アルドアが今回の作戦について一通りの説明を行った。ガーチューンが驚きながら確認した。

「作戦の目的は、我々を殺して情報を抜き取り、棒人間、いえ、りとさんたちをスクーパーズ化することにあつたということですか。」

「その通りですな。」

「そして、りとさんたちも、王女様を我々から守るために戦っていた。そうなるように、王女様が仕組んでいた。そして、このようなことをスクーパーズの王室は数百年間も行ってきた。」

「その通りですな。」

「我々は一度死んで、蓄えられていた情報から、りとさんたちが復元したものである。」

「その通りですな。」

「まさか、そのようなこと、ガーチューンにはとても信じられません。」  
ゼクルルが弁解する。

「連隊長、残念ながらそれは事実です。復元の方法はアルドア少佐とことこ様が開発したもので、少佐に伺えばその詳細が分かると思います。そして、王女様とエビふりヤー様もその方法を実行

するために、一度死なれて情報になりました。王女様が情報になった後、私はアマツマラの中で王女様のお手伝いをしましたので確かです。もし復元が失敗すれば、王女様ご自身も死んでしまうところでした。その点をお考え頂ければと思います。」

「ゼクール、お前はいつそれを知ったんだ。」

「ラフォーレの手前で、王女様とエビふりヤー様を発見したと連絡しましたが、そのときに王女様から伺いました。」

「そうか。」

「そのときの王女様は戦闘を止めようと、命がけでラフォーレに向かっていました。ただ、連隊長の戦死を知った私は逆上して、王女様を手にかけてしまいました。その時は幸いにも、りと様に返り討ちにあつて私は戦死しました。その後、情報だけになった私のところに、情報だけになった王女様がやってきました。ことこ様たちが編み出したアマツマラの制御部を乗っ取る方法で、意識が戻りまして王女様といっしょに、みなを復元するお手伝いをしました。」

アルドアが付け加える。

「私を含め何体かのスクーパーズを精密に調べましたが、復元は完全です。記憶を含めて完全に元と同じスクーパーズになっています。」

「ゼクールとアルドアの話はわかりました。大変だった2体とも王女様を支持しているようですね。わかりました。みなが無事ですので、私もこの件は強化現実生成装置による演習と言うことにしたいと思います。」

みさが言う。

「ガーチューン、アルドア、有難うですな。ゼクール、私を心から信用してくれたのに、本当に済まないことをしたですな。」

ゼクールが答える。

「いえ、今回の件で王女様への信頼はますます深まりました。」

ガジメが冷やかす。

「少なくとも、ゼクールは本物のゼクールだな。」

部屋に笑いが戻った。みさが話を戻した。

「それで、これからみなにこの話をした理由を話すですな。」

皆の表情がまた引き締まった。

「私にはこのようなことを止めさせる義務があると思うですな。そのためには王様との対立も辞さないつもりですな。もしかすると小規模な戦闘になるかもしれないですな。その時は、みなに手伝って欲しいと思っていますですな。」

ゼクールとアルドア以外の隊員が息を飲んだ。ガーチューンが尋ねた。

「王様と戦争も辞さない。」

「戦争は起こさないようにするですな。このようなことをしている証拠を複数掴めば、平和的に

止めさせることも可能と思うですな。ただ証拠を集める過程で小規模な戦闘も考えられるですな。」

ゼクールが言う。

「私は王女様の剣となって、生きている限りお守りします。」

普段ならばガジメが突っ込むところだったが、自分が忠誠を誓ってきた王様を裏切れと言う話に、心の余裕がなかった。

「父上との対立は近いうちにはないですな。今回の件は、父上には、アマツマラにバグがあつてスクーパーズの全員が復元してしまい、隊員には強化現実生成装置による演習と説明したと伝えているですな。みなには、これからどうするか、考えて欲しいですな。みさは今から証拠集めを頑張るですな。ただ近衛連隊が信じられない以上、他に護衛をお願いする必要はあるですな。それを第111分隊に引き受けて欲しいですな。第111分隊がみさの護衛を務める件については、既に父上の許可を取っているですな。」

ガーチューンが答える。

「私もまだどう考えて良いか分かりません。アルドアとももう少し話をしてみたいと思います。ただ、第111分隊の王女様の護衛に関しては王様の許可を得ているということですので、全力をあげて取り組みます。というわけだ。ガジメ、王女様の護衛を頼む。」

「はい、了解しました。王女様の護衛に関しては、ゼクールとも相談しながら遂行したいと思えます。」

「有難うですな。」

ゼクールは王女様を直接護衛できることを光栄に感じながらもみさに尋ねた。

「王女様、りと様に協力を依頼しないのでしょうか。」

「まず、これはスクーパーズで片づけなくてはいけない問題ですな。それに、りとちゃんは仲間を守ろうとする気持ちが強すぎるですな。我々を守ったは良いが、他のスクーパーズが全滅しているということも考えられるですな。りとちゃんへの協力の依頼は慎重にする必要があるですな。」

ゼクールが苦笑しながら答えた。

「王女様のおっしゃる通りです。分かりました。我々が全力を上げて王女様をお守り致します。」

「有難うですな。りとちゃんが意識する仲間にはゼクールも入っているですな。だから、ゼクールもりとちゃんが暴走しないように気を付けて欲しいですな。」

「へっ、僕もですか。」

「そうですな。りとちゃんは、ゼクルールの死を無駄にはしてはいけないと、自らスクーパーズになつつもりだったですな。」

「そうですか。りと様に助力を依頼するときは気を付けるようにします。」

「それは、全スクーパーズのためをお願いするですな。」

みさがエビふりヤーの方を向いて言った。

「エビふりヤー、りとちゃんたちを呼んできて欲しいですな。」

「分かりましたでございませう。」

エビふりヤーが部屋の外に出て行った。みさが続ける。

「和解のために、近くで話して欲しいですな。みんな素直で良い人間ですな。」

ゼクールとアルドアが言う。

「りと様は、本当に信用することができます。」

「ことこちゃんは、とても優秀な科学技術者です。」

エビふりヤーがりと、まり、ことを連れて部屋に入ってきた。部屋の中がどよめいた。エビふりヤーが叱咤する。

「何ですか。それでも誇り高きスクーパーズ兵ですか。」

ガジメが返事をした。

「申し訳ありません。ただ、棒人間、いえ、りと様に4等分にされたときの記憶がよみがえりましたもので。」

「情けない。私などりと様に5等分にされて死んで、復元したと思ったら槍で刺されて死んで、また復元した後ペンで刺されて、計3回死んだんですぞ。」

みさが言う。

「別に、自慢することではないですな。」

エビふりヤーが顔を床に付けてお詫びを言う。

「そうでございました。私も皆様に酷いことをした側のスクーパーズでございました。皆さま、大変申し訳ございません。お詫びにはならないかもしれませんが、このエビふりヤーは、姫様にはひもで縛られた後に衣が剥がれるぐらい鞭で叩かれ、今申したように、りと様には3回ほど殺されましたので、それに免じて頂ければと思います。」「

ガーチューンが答える。

「私も王様に忠誠を誓ったスクーパーズ兵です。王様の命令ならば仕方がないこともあると思います。もし私に同じ命令が下ったら、私も同じことをしたと思います。さぞかし、お辛かったと思います。面をお上げ下さい。」

「有難う。ガーチューン。お前にそう言ってもらえると心が軽くなる。」

「りとちゃん、まりちゃん、ことこちゃん、自己紹介をお願いしますですな。」

「私は須藤りとです。このPARKというお店で広告の絵やポップ、えいと、商品を紹介する絵を書くのが主な仕事です。みさちゃんやみんなを守らなくちゃって思っ、みなさんに酷いことをしてごめんなさい。できれば、これからは仲良くやっていきたいです。絵が必要だったらいつ

でも描きますから言って下さい。」

「私は白子まりと言います。このPARKでファッションデザインと時間帯責任者をやっています。時間帯責任者というのは、決められた時間だけ店を管理するのが仕事です。私も、りとの力にならなくちゃっと思つて、やっぱり皆さんに酷いことをしてしまいました。深くお詫びをしたいと思ひます。私も、これからは仲良くやっていきたいと思ひます。スクーパーズさんの服を作つてみたいと思ひつていますので、服を着てみたい方は言つて下さい。」

「私は綿細ことだよ。アルちゃんの友達です。皆さんのことは最初は怖い宇宙人と思つていたの。でも、捕虜になつてアルちゃんと知り合つて、そうじゃないつてわかつたよ。りとちゃんとまりちゃんをサポートするためだけど、いっぱい武器を作つてみんなを死なせてしまつてごめんさい。これからも仲良くやつていけたらいいな。本当だよ。」

みさがスクーパーズ兵の方を見る。

「第8連隊連隊長のガーチューン大佐です。」

ことが大佐に反応する。

「ガーチューンさん、大佐なんだ。カッコいい。」

「あ、ありがとうございます。りと様、覚えていらつしゃいますでしょうか。PARKがある建物の中の角で二つに切り裂かれたものです。」

りとが答える。

「あつ、あの頭のいいスクーパーズ。覚えています。でも、ご、ごめんさい。」

「その後、爆弾が爆発したのではないかと思うのですが、大丈夫でしたか。」

「はい、おばあちゃんに助けてもらいました。」

「そうですか。それは良かったです。」

ゼクルがりとに尋ねた。

「もしかすると、そのおばあちゃんという方もワープができて、それで助かつたんですか。」

「はい。私もその後からワープができるようになりました。」

ガーチューンが驚く。

「生身でワープができるのですか？すごいな地球人は。そういえば、囲いが終わる前に急に姿が消えたのもワープだったんですね。」

「はい、そうです。外に緩衝壁を急いで作るためにワープしました。」

ゼクルが答えた。

「私は最初ラフォーレでりと様がワープするのを見ました。コントロールを失つた私の槍が王女様に向かって行つたとき、りと様がワープで急に王女様の前に現れて、槍を掴んだのです。」

「なるほど。それはすごい。その割には他の地球人は弱かつたな。」

まりが答える。

「はい、普通の地球人はワープできません。ワープができるのは、りとと、たぶんりとおばあ

ちゃんだけだと思えます。」  
「ことも同意する。」

「りとちゃんのおばあちゃんのSFで読んだことがあるけど、ワームホールを變形できるのは、りとちゃんとおばあちゃんだけで、他の地球人はワープはできないよ。私はできないし、まりちゃんもできないよね。」

「うん、できない。りとに引っ張って行ってもらった時はワープしたことになるけど。」

「いいなー。まりちゃん。」

りとが答える。

「そんなんで良ければいつでもやるよ。」

「本当？嬉しい。この後でお願いね。」

「OK。」

まりが注意する。

「でも普通の人が見ると驚くから、人のいないときにね。」

「わかったー。」

ガーチューンが話を戻した。

「りと様たちからすると、私たちが王女様を狙っていたかと思っていたということで、一番最初の私の判断が性急すぎたと反省しているところでもあります。王女様が連れて行かれるのを見て焦ってしまったわけですが、今後は注意したいと思います。また、これからは是非よろしくお願ひしたいと思えます。」

りとが答えた。

「こちらこそ、私に射撃があつて、その後友達が狙われていると思つて、慌ててしまいました。これからは、よろしくお願ひします。」

次にガジメが答えた。

「私は、第8連隊第111分隊のガジメと言います。曹長です。」

「ここが言う。」

「曹長！なかなか渋い。」

「有難うございます。私は原宿駅の近くで、りと様に4等分されて戦死しました。」

「あー、あの時の。踏みつけにしてごめんなさい。」

「今、第111分隊は、王女様を守る役割を命じられました。私は両親を戦争で失ひ。幼年兵学校からのたたき上げです。戦うこと以外に能はありません。これから命をかけて王女様をお守りするつもりです。」

「子供の時からなんだ。私はガジメさんと違つて、戦うのは得意じゃないけれど、」  
「スクーパーズ兵の全員がビーム発射口を横に振つた。」

「みさちゃんを守るためならば、できる協力はするよ。あと、ガジメさんも、せっかく原宿に来

たんだから、いろいろ楽しむと良いと思う。」

「楽しむですか。考えてみます。あと、王女様を守る手伝いのお申し出、有難うございます。ただ、王女様からはなるべく地球人に迷惑をかけないように言われています。ですので、できるだけ戦闘に巻き込まないようにしたいと思います。」

「みさちゃんらしいけど。」

ゼクールがりとお願いをする。

「お言葉に甘えて、私たちを鍛えて頂けませんでしょうか。」

「私が本当の兵隊さんを鍛えることなんてできるかな。」

「できます。りとさんは宇宙最強なんじゃないかと思っています。」

「あまり嬉しくない誉め言葉だけど、わかった。ゼクールは、みさちゃんを守りたいんだよね。」

さつき言った通り、私でできることならば何でもする。やってみる。」

「有難うございます。りと様に訓練して頂ければ、王女様も守れますし、りと様を戦闘に巻き込むこともなくなると思います。」

「ゼクール、ありがとう。私のことも心配してくれているの。」

「あっ、はい。そうです。」

ガジメ分隊長が話を進める。

「ここからは、私が司会をします。次はゾロモ。」

「私は、第111分隊所属ゾロモ軍曹、一応女性です。」

「ここが反応する。」

「へー、女性で軍曹なんだ。カッコいい。」

「私は、ラフォーレで下から戦車砲で撃たれて戦死しました。」

りとは少し安心したような顔をした。まりが謝罪する。

「それは私です。ごめんなさい。りとを守ろうと。」

「わかっています。私は地球のファッションにすごく興味があります。」

「あっ、思い出しました。ラフォーレのホールで私の服を着ていたスクーパーズさんですね。」

「はい、そうです。あの後も戦闘になってしまっただけでも素敵な服でした。もし良ければ、作り方を教えて頂けませんか。」

「もちろんです。是非、いっしょにスクーパーズさんのための服を作りましょう。」

「有難うございます。」

「では、うちのエースのゼクール。」

「エースって、分隊長。エースではないと思いますが自己紹介をします。皆さんとは、アマツマラの中から協力しています。僕はゼクール軍曹です。軍曹と言っても、この作戦中に上等兵から

昇進しました。これも、みなさんのおかげと思います。ことが祝福する。

「わー、昇進おめでとう。」

「これからも、みさ王女様を守るために、全力を尽くしていきます。あっそうだ。どうやって死んだか言うんでしたね。」

りとが答える。

「そんな決まりはない。」

「一応、ラフォーレの中でりと様にペンで刺されて戦死しました。」

「もう、ゼクルは。だから、それはいいって。」

「でも、今は協力関係ができてうれしいです。りと様との訓練、楽しみにしています。」

「はい。わかった。頑張ってみる。」

「次は、パド。」

「私はパド上等兵です。ラフォーレの上空で散弾が当たって怪我をして、さゆみん様に助けていただきました。そこでりと様とお会いしました。一緒に捕虜になっていた、こいつがイワタです。」

「イワタ2等兵です。まだ、新人です。王女様とパドさんを逃がすために待ち伏せしていたところを返り討ちにあいました。銃身を見てよけられると思ったのですが、まさか、散弾が出て来るとは思わなかったでした。」

「私は、みさ王女様を連れて、もう明治通りまでもうすぐというところで、りと様に追いつかれて、王女様が明治通りに逃げるまでの時間を稼ぐために、りと様に挑んだのですが、蹴とばされて、棒で刺され戦死しました。」

「パドって言うんだ。ビームがちゃんと出ないのに、みさちゃんを逃がすために命をかけたんだよね。ごめんなさい。」

みさも謝罪する。

「パド、みさを信用して命をかけて逃がそうとしていたのに、それを裏切って、大変申し訳ないことをしたですな。パドたちが必死に私を助けようとするところを見て、この作戦に疑問を持つようになったですな。今は、この作戦は二度としてはいけないと決意していますな。」

「王女様にもお立場があると思います。私たちを生き返らせるために、王女様も命をおかけになったとのこと。そのお気持ちで十分です。」

イワタも答える。

「そんなことより、せっかく生き返りましたので、また、さゆみん様のクレープが食べたいです。パドがからかう。」

「お前は食えることばかりだな。」

「パドさんも美味しいって言っていたじゃないですか。また食べたくないんですか。」

「それは、食べたいけれど・・・」  
りとが言う。

「わかった。さゆみんのお店に連れて行ってあげる。そこで食べられるよ。」

「本当ですか。有難うございます。パドさんはどうします。」

「イワタは俺が付いていないと心配だからな。付いて行ってやるよ。」

「りと様がいっしょですので、それには及びませんけれどね。」

部屋に笑い声が響いた。りとが言う。

「みんなで行きましょう。本当においしいから。」

イワタが分隊のみんなに向けて言う。

「それは本当です。美味しさは、私が確約します。」

ガジメが答える。

「グルメのイワタが言うなら本当だろう。分隊に休暇が出たら、みんなで行こう。」  
全員が答えた。

「わかりました。」

「では、ゴモ。」

「ゴモ上等兵です。私も、ゼクルと一緒に、この作戦中に1等兵から昇進しました。」  
ことが答える。

「昇進、おめでとう。」

「有難うございます。私は、りと様が描いた私の絵を見ている間に切られて、真つ二つになりました。」

「やっぱり、私の絵を見ていたんだ。知らなかったとは言え、本当にごめんなさい。」

「いえ、絵に集中している間にスクープゾアを切られて戦死しましたので、全く痛くはなかったです。それに僕を絵にかいてもらえて、嬉しかったです。」

「絵が好きなの？」

「はい。他の星に行くたびに、その星の絵を見るのを楽しみにしていました。その中でもりと様の絵は暖かくて、可愛くて大好きでした。ですので、みんなと違って、僕は棒人間、りと様のことですが、はじめから悪い生命体だとは思っていませんでした。スクープしている我々がいけないだろうなと思いつつ戦っていました。」

「有難う。そう言ってもらえると嬉しい。」

「恥ずかしいのですが、これを見てください。」

そこには幼稚園生が描いたようなりと様の絵があった。

「これ、私?!ゴモさんが描いたの。嬉しい。」

「全然、上手に描けなくて。」

「そんなことはない。優しそうに描けていて。ゴモさんの性格の良さが現れている感じ。」  
「有難うございます。でも、りとさんが描いた自分の絵とは、レベルが全く違うことはわかりません。」

「じゃあ、一緒に絵を描く練習をしよう。少しコツをつかめば、そこそこは描けるようになると思う。だけど、その先のプロの世界はまだ私にもわからないけど。」

「本当ですか。絵を教えて頂けるのですか。」

「教えるほどうまくはないけれど、助言できるところがあったら助言する。それに、文化に関して教えるというのは、一番最初に約束したこと。絶対に守るよ。」

「有難うございます。それでは、休みの日にはお願いしたいと思います。」

「OK。いつでもPARKに来て。」

「ここが言う。」

「でも、ゴモさんの絵、本当に性格の良さが出ている。子供が描いたお母さんの絵みたい。まりが言う。」

「ここも言い方を考えないと。」

「あっ、ごめん。でも本当に良い意味で言ってるんだよ。この絵の雰囲気が良いって。」

「そうじゃなくて、りとがお母さんは、まだ早いでしょ。」

「そうか。りとちゃんごめんさい。」

りとが答える。

「えっ、いいよ。絵を見ていて、気づかなかったし。」

まりが苦笑しながら言う。

「そうね。この二人なら大丈夫ね。」

「次に、ジャモチャ。」

「私は、ジャモチャ一等兵です。ラフォーレの中で柵の後ろに隠れているところをりと様に真つ二つにされて戦死しました。」

りとが反応する。

「あっ、ジャモチャさん。リコさんと結婚予定の。」

「はい、そうです。でも何故それを？」

「情報になっているときに、思考も垣間見えたの。強い思考だったから。」

「そうですか。紹介します。これがリコと言います。」

「リコ二等兵です。ラフォーレの屋上で、りと様に撃たれて戦死しました。」

「怪我をしている僕をかばってくれたんだよね。」

「あまり取り柄はないですが、ジャモチャを愛する心だけは誰にも負けません。」

「リコ。」

「僕もだよ。」

見つめあっている二人に、まりが口を挟む。

「あのー、仲が良いのは良いけど。」

「あっ、大変申し訳ありません。リコが生き返って、これ以上のことはありません。」  
りとがリコに話しかける。

「リコさん、本当にジャモチャさんに関しては安心はできるよ。情報だけになったときに、ジャモチャさんの頭の中が少し分かったけど、ほとんどリコリコリコリコだったから。後は、棒人間死ね、だったかな。」

「王女様を守ろうとしていたことを知らなかったとは言え、失礼なことを考えていて、申し訳ありません。でも、ラフォーレで私が投げたたくさんの障害物を難なくかわして迫って来た時には、すごいレベルが全く違うと思えました。さすがは、エビふりヤー様が見込んだだけのことはあります。」

「有難う。エビふりヤー師匠、有難うございます。」

エビふりヤーが答える。

「えっ、あっ。そうです。りと様はすごい才能をお持ちと思うでございますよ。私ではもう全くないません。」

みさがフオーする。

「でも、りとちゃんは絵の才能もすごいですな。すごい可愛い絵を描けるですな。みんなもりとちゃんの絵を見るといいですな。」

「本当！有難うみさちゃん。うん、また絵を描いたら見せるね。」

「有難うですな。」

まりが提案する。

「ジャモチャさんとリコさん、地球で結婚式を挙げてみたらどうですか。原宿的な感じで。ジャモチャがリコに言う。」

「僕は面白そうだと思うけど。」

「うん、思い出にもなりそう。」

「わかった。ウエディングドレスは私が作る。LUNAMARIAにも負けない宇宙的なものを。ゾロモさんにもお手伝いをお願いして良いかな。」

「私にできますでしょうか。」

「大丈夫。作り方は教えるわ。絶対楽しいよ。それに、ゾロモさんのアイデアが加わった方が宇宙性が増して助かる。」

「分かりました、お手伝いします。」

「話しはまとまったわね。会場はラフォーレの6階を抑えるわ。」  
りとが言う。

「私も、二人の絵を描くよ。」  
「ところが言う。」

「ウエディングケーキは任せて。」  
「みさが言う。」

「みさが媒酌人をするですな。」  
「まりが聞く。」

「スクーパーズは結婚してなくても媒酌人ができるの？」

「今回は全体の指揮官ということで大丈夫ですな。ゼクルも手伝うですな。」

「はい、分かりました。命に代えても、お手つだいします。」

「そんな大げさなものではないですな。荷物運びですな。」

「分かりました。命をかけて、お荷物をお運びいたします。」

「ジャモチャとリコが話す。」

「楽しみだね。リコ。」

「王女様が媒酌人だなんて、私幸せです。」

二人そろって言う。

「本当に有難うございます。」

「ザトム1等兵です。バンクス1等兵といるときに、りと様に槍を投げられましたが、ことごとまり様に助けられて、最後まで生き残りました。」

「あの時の！良かった、まりのリア銃にバリヤーが付いている。」

「バンクス1等兵です。りと様に最初に蹴とばされましたが、最後まで生き残りました。」

ザトムが言う。

「バンクスは槍で腰を抜かしていたけれどもね。」

「それは、あの槍とバリヤーのせめぎ合いの後に、槍が目の前5センチメートルで止まったんだよ。お前だって腰をぬかすよ。」

「俺は、全然、平気だよ。」

「本当か。」

バンクスがりとの方を向いて、お願いする。

「りと様、お願いがあります。槍をザトムに投げて、5センチメートル手前で止めて頂けませんか。」

ザトムが言う。

「おいおい。」

「心配は要らないって。万が一失敗しても、りと様ならば、生き返らせてくれるって。死ぬほど痛いそうだけれど。りと様、お願いします。りと様のお力を見せてあげて下さい。」

りとは困って、みさの方を見ていたが、ここが言う。

「アルちゃんといっしょに、りとちゃんのアマツマラの残っていたリミッターを解除したし、まりちゃんのアマツマラも調整したの。ルナボルグもモードフォーのバリヤーも威力が上がっているはずだよ。だから、試してみるのにはちょうどよいかも。それじゃあザトムさん、夜になったら前の時の位置にいてもらえるかな。りとちゃんもまりちゃんも。」

「いえ、今晚はちょっと用事がありました。」

「そう、いつなら大丈夫？」

「えーっと。」

まりが止める。

「あれより威力があるなら、夜でも周りの人に危ないわよ。試すのはまたいつかの機会にね。」

「そうかー、残念だなー。でも、今のりとちゃんとアマツマラならば、人間でも復元できるけど。」

「一般の人、一般のスクーパーズもそうだけど、復元できるからって巻き込むのはいけないわ。」

「うーん、まりちゃんがそこまで言うなら、やっぱり止めておこうかな。アマツマラが面白くていろいろ改造してみているけれど。」

「もう大変なのは、りとだけにして欲しいわ。」

りとが答える。

「やっぱり、私、大変？」

「えっ、いや、そんなことはないけど。いいわ、私が二人とも面倒を見る。」

「有難う。まり、いつもそうしてくれているよね。」

ことここもお礼を言う。

「まりちゃん、有難う。」

「そうね。私も二人が居たほうが楽しいわ。」

「私も。」

「私もだよー。」

3人の話を聞いて、ザトムはほっとしていた。

「ワクチュン！」

「ワクチュン1等兵です。原宿駅の近くの建物に隠れて隊長達に状況を報告していたのですが、りと様に見つかって撃たれて戦死しました。」

「ごめんなさい。あの時、照準装置が壊れていて、至近距離から散弾を撃つしなくて。穴だらけになって痛かったですよ。」

「はい、死ぬほど痛かったです。と言うか、死んだんですが。」

「本当に、ごめんなさい。」

ガーチューンが尋ねる。

「あの時の戦闘で、ビームをあまり撃ってこないとは思っていたのですが、照準装置が壊れていたのですか。」

「はい、ガーチューンさんが撃った最初の黒いビームを棒で払ったのですが、それが飛び散ったときにモノアイディスプレイが壊れてしまいました。」

「ビームなしで、あの強さか・・・」

ガジメが考え込んでいるようだったので、デツホは自分で自己紹介を始める。

「えーと、デツホ2等兵です。最初に、ラフォーレに向かったとき、原宿上空でゾロモさんを助けようとして、戦死しました。」

ゾロモが言う。

「あのときは有難う。これからも狙撃の補助よろしくね。」

「はい。またゾロモさんのそばにいられて幸せであります。これからも、ゾロモさんの目となり耳となりがんばります。」

「狙撃時はどうしても、目標に集中しないといけないので、デツホ、よろしくお願いね。」

「はい、わかりました。」

ガジメが言う。

「今回みたいに相手が前進してきたら、狙撃チームは独自の判断で後退して構わない。十分な警戒と早期の判断を頼むぞ、デツホ。」

2体が答える。

「わかりました。」

ガジメが続ける。

「では、次はガビー。」

「ガビー2等兵です。ラフォーレの中で戦車のビーム機関銃のビームに当たり戦死しました。先輩方は気付いていたようでしたが、私は未熟なため誘導されていることがわからず、反省材料としたいと思います。」

りとが答える。

「あの時も、みんな本当に必死で戦車に向かってきていた。逆に、捕まったことには優しかったし。もっと早くみんなのことが分かれば良かった。」

「では、最後はギデ。」

「ギデ2等兵です。一番最初に隊長を守ろうとして、りと同様に刺されたものです。」

「あっ、あの最初にPARKの前で囲まれたときの。」

「はい、その通りです。一つだけお伺いしたいのですが、あの時、誰が指揮官かお判りになられたのですか。」

「何となく。そう、あと、ここからそうも連絡が来たので。」

「そうですか。さすがです。」

「あの、これからは、よろしく願います。」

「こちらこそ、よろしく願います。」

みさは途中から涙を流していた。

「報告書だけでは分からなかったですな。今話を聞いて、第111分隊はみさを助けるためにどれだけ頑張ったかわかったですな。あのときゼクールがあんなに怒るのも無理はないですな。謝っても謝り切れるものではないですな。みさができる謝罪は、こんな作戦を二度とやらないようにすることだけですな。これだけは、命をかけて実現することをみんなに約束するですな。」

そして、りと達に話しかけた。

「第111分隊のみんなは、みさといっしょに、しばらく地球に滞在するですな。りとちゃん、まりちゃん、ことこちゃん。よろしく願いますな。」

「もちろん、こちらこそ、よろしく。私は忘れっぽいたちなので、今はゴモさんといっしょに絵を描くのが楽しみです。」

「私も、スクーパーズのゾロモさんといっしょにファッションをデザインするのが楽しみです。宇宙の方と共同でデザインするなんて、地球で初めてと思います。反響が楽しみです。」

「地球、そして日本に来たんだから、やっぱりアニメを見ないと。面白いアニメを紹介するよ。ぜひ見てね。あと、アロマとスイーツに興味のある方は、是非、遊びに来てね。」

イワタが答える。

「スイーツには興味があります。さゆみん様のクレープとの味の違いも知りたいです。」

「じゃあ一緒にスクーパーズ用のスイーツを研究しよう！」

「わかりました。試食ならば他のスクーパーズの10倍はできますので任せて下さい！」

部屋が苦笑で満たされた。

Koko

それから1カ月ぐらいが経った。りととガジメ、ゼクール、ゴモで1対3の戦闘訓練が行われていた。訓練は毎週2回行われていて、今回でもう9回目になろうとしていた。ゼクールがりととをマークして、ガジメとゴモがその援護を務める。ことことアルドアがゼクールのために、りととの最後の戦闘に使った道具を実際に作ってゼクールに渡していた。ゼクールはこれまでの訓練でそれを自由に使いこなせるようになっていた。全員が危険がないように訓練用のビームやブレードを使用している。ガジメが叫ぶ。

「ゼクール、そっちに行ったぞ。」

りとが、ゼクールに迫る。ゼクールは盾で防御しながら、りとに向けてビームを放ち、棒を飛ば

す。りとは、向かってきたゼクルの棒を棒でガジメの方に向けて弾き飛ばす。ガジメがゼクルの棒をかわそうとする。りとは、ゼクルのビームをかわし、盾を蹴って加速して、ゼクルに接近してゼクルをゴモの方に蹴飛ばす。

「わー。」

ゼクルルが飛ばされながらも、態勢を立て直して盾を呼び寄せガードする。りが迫ってくるが、りとは素手だった。そのとき、アルドアの冷静な声が響いた。

「ガジメ曹長、戦死です。離脱して下さい。」

ゼクルの棒を弾くと同時に投げていた棒がガジメに命中していたのである。りとはゼクルに迫る。態勢を立て直したゼクルとゴモがりとにビームを放つ。さらにゼクルは、りとに弾き飛ばされた棒をりとに向けて飛ばす。りとは2体のビームをかわしながら、ゼクルに迫る。ゼクルの盾を蹴り飛ばし、飛んできたゼクルの棒をキャッチしてゼクルに迫る。

「くそっ。させるか。」

ゼクルが叫びながらビームを放つが、りとのボードで弾かれて、ゼクルの棒の先でりとがゼクルを叩く。同時に、ゼクルを援護していたゴモにりとが棒が後ろから当たる。

「えっ。」

ゴモが叫んだが、アルドアが冷静に言う。

「ゼクル軍曹、ゴモ上等兵とも戦死です。これで、だいたい所定の時間になりましたので、今日の演習はこれで終了したいと思います。訓練の様子を分析した結果をお話しますので、ブリーフィングルームに集合して下さい。」

ゴモが言う。

「あいたた。りと様、絵の描き方を教えてくれるときは、あんなに優しいのに、戦闘訓練だと別人のようです。」

「ゴモ、ごめんね。でも、みさちゃんはこの銀河系を治める王族の王女様なんでしょう。だから、どんなやつに狙われるかわからないから、力を出し惜しみしてはいけないと思って。」

ゼクルも言う。

「りと様のおっしゃる通りだ。練習相手になって頂けるだけ有難いんだぞ。」

ゴモも答える。

「はい、最高の練習相手と思います。有難うございます。」

アルドアが演習の解析結果を持ってきて言った。

「3体とも、判断力、俊敏性、スピードが、訓練と共に向上しています。」  
ガジメが言う。

「ゼクルが一番向上しているようですね。」

「はい、ゼクル軍曹の戦闘能力の向上は著しいです。ビームやバリアーの強度も向上しています。擬態できないスクーパーズの中では圧倒的に最強と言えらると思います。」

「アルドア少佐、階級がかなり上なので、敬語を使わなくても大丈夫と思いますが。」

「そうですが、この話し方は元からですので気になさらないで下さい。それに、私は演習でことこちゃんにも敵わないぐらい弱いですから。」

「演習をやられたのですか。」

「はい。ことこちゃんが、演習の装置がどんなものかと興味を持ったので、戦闘訓練をやってみました。最初は勝っていたのですが、最後は全然勝てなくなりました。」

「アルドア少佐には優れた分析能力がありますから。原宿での作戦でもそれは明らかだったです。」

「有難うございます。話を続けます。ゼクール軍曹に関しては、後は擬態でできる能力だけです。ゼクールが答えた。」

「ありがとうございます。確かに擬態能力が備われば、さらに戦闘能力が向上すると思います。」

「はい、戦闘能力が数倍にはなると思います。」

「ただ、こればかりは突然身につくものとのことですから。」

「その通りですが、スクーパーズコアの出力の推定から、この訓練を1年ほど続けていれば、擬態能力を身に着けられる可能性がかなり高いです。」

「そうなのですか。やる気が出てきました。」  
りとも感心して言う。

「へー、ゼクールがどんな風に擬態するか見てみたい。人間みたいな形？それとも、フライもなの？楽しみ。」

アルドアが答える。

「それは、ゼクルルの創造力しだいです。それで、次に、りと様。」

「はい。何、アルドア。」

「先ほど、力を出し惜しみしておっしゃっていましたが、脳電図を見る限り、まだ余裕がありそうです。」

ゼクールが尋ねる。

「ワープを使わないルールにしているのですか。」

りとが答える。

「えーと、一応、そうかな。うん、訓練に慣れてきたんだと思う。だいぶ余裕を感じるようになった。」

ゼクール、ガジメ、ゴモが驚いた。

「えっ。」「ああっ。」「あー。」

アルドアがダメを押す。

「戦闘能力の伸び率という意味では、りと様が一番高いと思います。」

「えっ、何、3人とも、人を化け物をみるような目で。」

ゼクールが謝罪する。

「申し訳ありません。」

「だって、私、戦闘ゲームはしたことがあるけれど、本物の戦闘訓練なんて初めてだから。」

「そうでした、表向きはエビふりヤー様が鍛えたことになっていましたが、本当は一般人でいらっしやいましたね。」

「そう。少なくとも、そうだった。でも・・・」

「でも?」

「おばあちゃんの勧めでやっていた、戦闘ゲームとは似ていた気がする。」

「そうですか。ゲームと言えども侮れません。現状では我々よりはるかに強いです。これからも戦闘訓練にお付き合い下さればと思います。」

「わかってるって。みさちゃんとゼクール、ゴモ、あとガジメ隊長のためにも頑張る。それに前の作戦で、みさちゃんを助けるために諦めずに少しずつ進んできた、スクーパーズのみんなの精神力は凄いと思った。みさちゃんとみんなが協力すれば、きっとスクーパーズの国を良い方向に進ませることができると思う。」

3体がそろって感謝する。

「有難うございます。」

アルドアがゴモやガジメの問題点を説明した後、今日の訓練の終了を告げた。

「それでは訓練はここまで、休憩後帰隊して下さい。りと様は人間の飲み物ならば何でもありますが、何でもおっしゃって下さい。」

「ありがとう。じゃあ、ドクターペッパーをもらえるかな。」

「はい、承知しました。」

ソファーに座って、ドクターペッパーを飲みながらカタログを見ているりとにゴモが尋ねる。

「何を見ているのですか。」

「液タブ。うーん、絵を描くための道具と言えはいいのかな。PARKでのアルバイト代が溜まったら買おうと思って。」

「いくらぐらいするんですか。」

「20万円もするんだよ。」

「20万円ですか。20万円ぐらいならば私の地球での生活のために支給されている給料の半月分で買えますので、買ってプレゼントします。特に買いたいものもありませんし。」

「そんな。こんな高いの悪いよ。」

「そんなことはありません。絵を教えて頂いているお礼です。」

「うーん。」

ゼクールが言う。

「良くわからないけれど、りと様が欲しいものならば、私も半分出します。演習に付き合っ

いているお礼です。ですので是非受け取って下さい。」

「うーん。」

「是非、私にもりと様の役に立たせて下さい。」

「そう、わかった。じゃあ、ゼクルにはみさちゃんの絵を書いてあげるね。」

「本当ですか。それならば、私の給料を全部使って、液タブというものを2枚でも3枚でもプレゼントします。ただ、できれば・・・」

「分かった。スクーパー姿のみさちゃんがいいのね。頼んでみるよ。でも、液タブは1枚で十分。本当に有難う。」

ガジメも言う。

「ゾロモの絵を描いてくれるならば、私も乗りたいのですが。」

「分かった。ゾロモちゃんは、服を作るときにデッサンがあるから描けるけど。でも、勝手に描いて怒られないかな。」

「大丈夫です。私から言っておきます。ゾロモも喜ぶと思います。」

「本当？わかった。じゃあ、ゾロモちゃんも描くよ。」

1人と3体は、ガジメのクレジットカードを使って、ショッピングサイトで液タブを配送先をPARKに設定してポチって、帰宅することになった。帰宅間に、ガジメがりとにスクーパーズの写真集を渡した。

「これを参考にして、ゾロモ軍曹を描いて頂けますか。」

そのページをめくってりとが言う。

「スクーパーズの写真集。すごい、宇宙人の写真集なんて初めて。うん、参考になる。有難う。」

喜んでお借りします。写真集をよく見て雰囲気がつかめたらゴロモちゃんを描いてみる。」

「あっ、有難うございます。」

「わかった頑張る。」

ガジメは、その時、りとがみさまでその写真集の感じで描くとは全く考えていなかった。

翌日、りとはPARKに届いた液タブで早速、様々な絵を描いていた。

「やっぱり、液タブ、使いやすい。」

そのとき、みさが、ラフォーレのスクーパーズ代表部からPARKに息抜きにやってきた。

「りとちゃん、まりちゃん、こんにちは。」

まりが返事をした。

「みさちゃん。いらっしやい。」

「こんにちはですな。何かお手伝いすることはないですな？」

「うーん、今はないかな。」

「そうですな。何かあったら、何でも言って欲しいですな。」

「王女様をお願いするのも、なかなかだけど。」

「気にすることはいいですな。みさはまりちゃん達の友達ですな。」

「有難う。何かあったらお願いするですな。」

「わかったですな。それにしても、りとはちゃんはみさが来たことに全然気が付いていないですな。」

「液タブ。新しい絵をかく道具が来て、それを試しているみたい。」

「なるほどですな。ちょっと見に行くですな。」

みさがりとのところに行くと、りとは液タブに一糸懸命絵を描いていた。みさは邪魔しないように、静かに絵を描くところを見ていた。りとはが描くものを探すために顔を上げて周りを見回した。すると、すぐに傍にみさがいるのを見付けて言った。

「みさちゃん、来てたんだ。声をかけてくれればいいのに。」

「りとはちゃんが熱心に絵を描いていたので、じゃましたくなかったですな。」

「みさちゃんなら大丈夫だよ。いつでも声をかけて。」

「わかったですな。今使っているものが新しい絵を描く道具ですな。」

「そう。液タブ、液晶タブレット。描いたものが直接見れるので便利。」

「そうなんですな。どんな絵ができるか楽しみですな。」

「そうだ、みさちゃん、モデルになってくれない。」

「もちろんいいですな。」

「できれば、スクーパーズの姿で。」

「わかったですな。」

「有難う。」

「もしかすると、その液タブはゼクルルに買ってもらったですな？みさを描くということ。」

「3分の1はそう。ごめん、さすがみさちゃん。簡単にバレちゃった。」

「いいですな。みさはみんなにすごく迷惑をかけたですな。モデルになるぐらいお安い御用ですな。それに、みさも、りとはちゃんが描いたみさのスクーパーズ姿の絵も見たいですな。」

そう言いながら、みさはスクーパーズの姿になった。りとはみさを見つめながら描き始めた。

「みさちゃんはスクーパーズになっても可愛い。」

「そうですな？有難うですな。」

「液タブだけれど、正確に言うとうとゴモが絵を教えてもらっているお礼、ゼクルルはみさちゃんを描く、ガジメ隊長はゾロモさんを描くということで購入してもらったの。」

「そうですな。りとはちゃんは人気者ですな。でも、みさに言ってくれれば、百枚でも買ったですな。」

「うーん、やっぱり年下から高いものをもらうのは気が引けるかな。あつ、後ろを見してくれ。」

「わかったですな。でも、本当に必要なものがあったら何でも言ってくれたいですな。」

「分かった、どうしても必要な時は、みさちゃんに頼むね。」

「いつでもどうぞですな。」

「まりが、みさを見ながら言う。」

「こう見ると、みさちゃん、やっぱりスクーパーズの王女様って感じ。なんか小さいけれど威厳がある。」

「そうですな？」

「アメリカやロシアの大統領、中国の国家主席と交渉してきたんでしょう。」

「そうですな。日本の響首相がいろんな国と仲介してくれて助かったですな。無事に講和するところができたですな。」

「そうだった。みさちゃんは、首相や天皇陛下とも会話したんだよね。」

「そうですな。2人とも、まりちゃんたちのことを心配していたですな。講和の中に、戦闘でスクーパーズを攻撃した地球人、實際上、まりちゃん、りとちゃん、ことちゃんのことですな。その地球人たちを免責するという内容も入っていたですな。父上が一般のスクーパーズのことを心配するなんて考えられないですな。自分の国民を粗末にしたみさは、とつても恥ずかしかったですな。」

「そうね。お互い協力して、もっと良い銀河にしていけるといいわね。」

「まりちゃんの言う通りですな。地球で、いろんな考え方を勉強して、それをスクーパーズでも生かすですな。」

「うん、期待してるわ。」

「ありがとうございますな。それにしても、りとちゃんに近くから集中して見られていると、やっぱり、すこし恥ずかしいですな。」

りとはみさの近くまで寄って熱心に絵を描いていた。そして、元の位置に戻って仕上げをしたあと、りとがみさに話しかけた。

「大体できた。見てみる。」

「もちろんですな。」

みさはスクーパーズの姿だったので、りとちゃんの方に文字通り飛んで行った。そして、大きな声で叫んだ。

「りりりりとちゃん。ななななんですな。この絵は。」

「えっ？みさちゃんだけど。」

「それは分かっていますな。この構図はどうやって決めたですな？」

「ガジメさんが、スクーパーズを描くならば、これを参考に見たらって、写真集を貸してくれたの。ゾロモさんのもこれで描いてみたよ。見てみる」

ゾロモの絵をみたみさが感想をもらす。

「これはまたすごいですな。」

「この写真集のタイトルはスクーパーズの言葉で月という意味なんだよね。素敵なタイトルだよね。」

「タイトルはそうですな。でも、これは、スクーパーズでは有名な変態写真集ですな。」

「えっ、変態写真集。」

「そうですな。変態なかつこうした写真がたくさん写っているですな。たぶん、スクーパーズ化した宇宙人が撮ったと思うですな。スクーパーズには刺激が強すぎて発行禁止になったですな。」

「えっ、ごめんなさい。みさちゃん。そうとは知らなかったと言っても言い訳にならないかもしれないけど。」

「分かっているですな。りとちゃんには罪はないですな。ガジメ曹長ですな。」

「ガジメ曹長もいたずら心だっただけじゃないかな。演習で頻繁に話すけど、悪いスクーパーズじゃないと思うよ。私からも謝るから彼らをあまり怒らないで。」

「怒っていないですな。ただ、ちょっとだけ注意しようと思うだけですな。」

「ほんとう。わかった。じゃあ、とりあえず普通に書き直すね。」

「有難うですな。」

みさが向きを変えてエビふりやーを呼ぶ。

「エビふりやー！」

「みさ様、何でございます。」

「ガジメ、ゼクルとゾロモをここに呼んで欲しいですな。」

「何事でございます。」

パソコンの画面を見たエビふりやーが叫んだ。

「りと様、こっこれは何としたことですか。」

「ごめんなさい。」

みさが取りなす。

「りとちゃんは悪くないですな。この本を参考にと渡したスクーパーズがいるですな。」

「それは許されぬ罪です。この銀河系を治める王室の王女様を侮辱するなど、そやつは死刑が適当かと思えます。」

りとが驚く。

「えっ。それは。ごめんなさい。私からも謝るから、死刑は許してあげて下さい。」

みさが取りなす。

「エビふりやーも大袈裟ですな。ちょっと注意するだけですな。」

「しかし、姫様。」

「私が良いと言っているから良いですな。」

「それはその通りでございますが。」

「この件は注意して終わりにするですな。」  
「はい、分かりましたでございます。」

少しして、ゼクール、ガジメ、ゾロモがやって来た。部屋に入って来たゼクールは、りとが申し訳なさそうに見ているので、絵を描くことを依頼したことを王女様がお怒りにいられていると思い、ゼクールがつぶやいた。

「りと様に申し訳ないことをしてしまった。」  
エビふりやーが告げた。

「ガジメ曹長、ゼクール軍曹、本当ならば死刑が妥当なところであるが、お姫様が注意するだけで不問にするとのことだ。よく反省して、二度とこのようなことを起こさないようにすることを厳命する。」

ゼクールは思った。

「勝手に絵を描くのは、死刑なのか。」

みさが言う。

「少し恥ずかしいですな。ただ、この重要性を分かってもらうために、りとちゃんが描いた絵を見せるですな。」

みさが、りとが描いた絵を見せた。ゼクールが驚いて絶句した。

「……………」

みさが説明する。

「ガジメ曹長が、りとちゃんに参考にと、この写真集を渡したそうですな。りとちゃんがこの写真集を参考に私の変態な絵を描いただけですな。」

ゼクールがその写真集を見て叫ぶ。

「隊長！これは許されることはありません。成敗です。そこに直して下さい。」

「いや、ゼクール、落ち着け。」

「隊長を成敗したあと、自分も自害してお供します。ですので、そこに直して下さい。」  
みさが取りなす。

「ゼクール落ち着くですな。ガジメ曹長、理由があれば説明して欲しいですな。」

「王女様、大変申し訳ありません。ただ、この写真集のように描いてほしいとお願ひしたのはゾロモ軍曹で、まさか王女様を描くとは思いませんでした。」

りとも言った。

「うん、そうだった。その写真集のようにゾロモさんを描いてと言ってた。でも、こういうのが良いのかなと思って、みさちゃんも描いちゃったの。」

「そうですな。そう思っていたですな。思い込みの連鎖でこんなことが起きたですな。ガジメ曹長は、りとちゃんがみさをこんな感じで描くはずはないと思ったですな。ただ、注意するですな。」

これが本星だったら、お前たちは本当に死刑になるところだったすな。ゼクールが謝罪する。

「大変申し訳ありませんでした。二度とこのようなことは致しません。」

「事情がわかったから、いいすな。この絵の代わりに普通の絵ならば持ってもいいすな。りとちゃん、ゼクールに普通の絵を渡してあげて欲しいすな。」

「わかった。」

りとがゼクールに普通に描いた絵を渡す。

「りと様、有難うございます。すごい素敵な絵です。一生大切にします。」

「ゼクール達に買ってもらった液タブで描いたんだよ。喜んでもらって嬉しい。」

ガジメも謝罪する。

「大変申し訳ありませんでした。以後、異星人と会話するときには、常識が違うことを肝に命じ、齟齬が生じないように細心の注意を払いたいと存じます。」

「それがいいすな。」

話が一段落したとき、ゾロモが言った。

「ちよつと待ってください。今までの話を聞いていますと、りと様。私の、あの、何と云うか、変態な絵も描いたのですか。」

みさは思った。

「そっちの件が残っていたすな。王女としてなんとかうまくまとめなくてはいけないすな。りとが答える。

「ゾロモさんごめんなさい。ガジメさんがゴロモさんの許可を取るとい話だったの。」

「りと様が悪くないのは分かっています。ただ、描いたものを見せて頂けますか。」

「はい。これです。ごめんなさい。」

りとが描いた数枚の絵をゾロモに見せた。ゾロモが驚いて言う。

「えっ、これは。すごいです。これが私ですか。いえ、確かに私です。いえ。」

みさも言う。

「確かに、りとちゃんの絵はすごいですな。スクーパーズ本星に来たら、絵を描いて一稼ぎできそうですな。」

すこし見入っていたゾロモがりとに言った。

「この絵を地球に来た記念に頂いてもよろしいでしょうか。」

「もちろん、こんなもので良ければ喜んで。」

「本当に、スクーパーズ星では絶対に手に入らないものです。良い記念になります。有難うございます。」

ガジメが言う。

「なっ、ゾロモ、りと様の絵を描く能力はすごいだらう。」

「それはそうですが。隊長！それとこれは話しが違います。」  
「うっ。」

「他のスクーパーズのこんな絵を、勝手に依頼するのは卑怯です。」  
「すまん。本当にすまん。何でもするから許してはくれないか。」

「これからは、ちゃんと断つてからお願ひします。」

「何を言っている。ちゃんと断れば許してくれるのか？」

「場合によっては。」

「場合って。」

「じゃあ、この絵は可愛いから、この絵だけあげます。」

「えっ、これを俺に。」

みさが心配をして損をしたとばかりに話を止める。

「わかったですな。あとは二体でやってくれですな。みんな帰隊して良いですな。」  
エビふりヤーが命じた。

「全員、速やかに帰隊し、所定の任務に就くように。」

ゼクルル、ガジメ、ゾロモが返事をする。

「分かりました。」

3体が帰って行った。その後、りとがみさに話しかけた。

「ゾロモさん、機嫌が直ったようで良かった。」

みさが返事をする。

「まあそうですな。」

今日はラフォーレで、リコとジャモチャの結婚式が執り行われる日である。結婚式は修復が終わったラフォーレ6階のホールで行われる予定になっていた。朝から、ことがウエディングケーキの準備をしていた。りとがことこに尋ねた。

「まりとゾロモさんは、ラフォーレでジャモチャとリコの服の準備中みたい。披露宴の途中で色直しをするみたいで大変そう。ここはどう？」

「ウエディングケーキを作るのは初めてだから、やっぱり大変。スポンジの部分は、さゆみんが紹介してくれた店から買ってきたものだけど、デコレーションを頑張っているところだよ。」

「私は、式の絵を描くだけだから、今はあいているけれど、手伝うことはある？」

「大丈夫だよ。さゆみんも手伝いに来てくれるから。」

「さゆみんが来てくれるなら安心。わかった。邪魔しちゃ悪いから、みんなが準備しているところを絵にするために、今はスケッチをしているよ。」

「うん、それがいいよ。ところで、みさちゃんは？」

「祝辞の準備中みたい。ゼクルルといっしょ。みさちゃんは完璧主義だから熱心にやっている。」

「そうなんだ。さすがみさちゃんだね。」

さゆみんが部屋に入ってきた。

「こんにちは。どう？ウエディングケーキの方は。」

「うん、一番下のケーキは作り終えたよ。次は、2段目。あと、さゆみんが紹介してくれた店のスポンジケーキ、美味しそう。」

「本当？ありがとう。じゃあ、2段目は私がつくるから、ことこちゃんは3段目をお願い。」  
「わかった。」

ことこさゆみんがケーキを作り始めた。りとはそれをスケッチしていた。

少しして、ことこが作っていた3段目とさゆみんが作っていた2段目が完成した。さゆみんがことこに言う。

「じゃあ、2段目を載せるね。」

「うん、これからは背が高いさゆみんに任せるね。」

「責任重大。慎重にしくちゃ。」

「さゆみんなら大丈夫だよ。」

「ありがとう。」

そう言いながらも、さゆみんは真剣な表情で2段目を1段目の上に載せた。ケーキの周りを回って確認した後、さらに3段目を載せてウエディングケーキが完成した。ことこさゆみんが確認した後、ことこがりと呼んだ。

「ウエディングケーキができたよ。」

「すごい、本当に綺麗。まだ時間があるよね。良かったらスケッチさせて。」

「うん、いいよ。」

りとがスケッチをしていると、みさとゼクルルが入ってきた。ことこがみさに尋ねる。

「スピーチの準備はできた。」

「バッチリですな。これがウエディングケーキですな。」

「そうだよ。どう？」

みさがケーキの周りを回ってケーキを見ながら言う。

「スクーパーズ星では見たことがない可愛いさですな。さすが、ことこちゃんですな。」

「ありがとう。うれしい。」

「これをラフォーレに運ぶですな。」

「うん、この箱に入れて運ぶ。」

「大きな箱ですな。みさもお手伝いするですな。」

ゼクルルが進言する。

「いえ王女様、危ないですので、私がスクーパービームを使ってお運びします。」

「大丈夫ですな。それに、お前のスクーパービームではケーキを壊してしまうかもしれないです…。」

みさが言い終わる直前、床に落ちていたクリームで滑って、ケーキの方よろけてケーキに抱きついてしまった。

「わー、ですな。」

ゼクルルが叫ぶ。

「王女様！」

ケーキを掴んだみさを見て、ことが言う。

「みさちゃん、大丈夫？」

「みさは、大丈夫ですな。でも可愛いケーキが壊れてしまったですな。ことちゃんごめんなさいですな。」

「みさちゃんに怪我がなくて良かったよー。ごめんなさい。床のクリームをそのままにした私が悪いから、みさちゃんは気にしなくてもいいよ。」

さゆみんがみさを見ながら言う。

「みさちゃん、ケーキでベタベタね。どうしようか。」

「このぐらい大丈夫ですな。」

りと言う。

「とりあえず今仕事がない私が、みさちゃんを銭湯に連れて行く。」

さゆみんが言う。

「有難う、りとちゃん。じゃあ、私はことちゃんとウエディングケーキの代案を考えておくね。ことが言う。」

「うん、わかった。みさちゃん、心配しなくて大丈夫だよ。さゆみんと私でなんとかするから。」

涙をこぼしながら、みさが謝罪する。

「ごめんなさいですな。」

りと言え。

「みさちゃんは悪くない。」

「クリームで滑ったみさが悪いですな。」

りと言を見ながら言う。

「違う。これは、まりが言っていた、この世界を作っている邪悪な存在が、みさちゃんと私を銭湯に行かせようとしているだけ。」

「そうですな？」

「そう。だから気にする必要はないよ。」

「わかったですな。気を取り直して、銭湯行って媒酌人の準備をするですな。」

「うん、それがいい。」

みさがゼクルルに向けて言う。

「みさはりとちゃんと銭湯に行ってくるですな。ゼクルルはさゆみんとことちゃんのお手伝

いをお願いするすな。」

「わかりました。それにしても、この世界の創造者は許せません。機会があったら懲らしめてやります。」

りとがゼクルルに答える。

「でもゼクルル、この世界が無くなっても困るから、ほどほどにね。じゃあ、さゆみん、ここ、行ってくる。」

「わかった、みさちゃんをお願いね。」「行ってらっしゃい。」

銭湯に向かう道すがら、みさがりとに話しかける。

「それにしても、りとちゃんとみさを銭湯に行かせるとは、変わった趣味の邪悪な存在すな。普通なら、まりちゃんとさゆみんですな。」

「なるほど、そうか。邪悪な存在は、そういう趣味なんだ。もしかすると、邪悪な存在さんは、いい邪悪な存在さんなのかも。」

ラフォーレの控室では、まりとゾロモがそれぞれジャモチャとリコの着付けをしていた。ゾロモが隣で作業しているまりに尋ねる。

「まり様、こんな感じで大丈夫ですか。」

じつと見たあと、まりが言う。

「うん、リコさんすごく綺麗。大体はこれでいいと思う。でも、この折り返しをもう少しだけ整えたほうがいいかな。」

「分かりました。もう一度やってみます。」

ゾロモがビームを使って折り返しを整える。

「うん、だいぶ綺麗になった。まり様に見てもらおう。」

そう言いながら、ジャモチャの着付けをしているまりを呼びに行った。ジャモチャの様子を見て、ゾロモが言う。

「なに、ジャモチャのくせにカッコいい。」

「ひどいです。ゾロモ軍曹。」

ゾロモの後についてきた、リコが言う。

「ジャモチャ、私にはいつも王子様みたいにカッコいいわよ。」

「本当に？うん、僕はリコがそう言ってくれれば、他に何もいららないよ。うん、リコもいつもお姫様のように可愛いよ。」

「お姫様？嬉しい。有難う。ずうっと一緒に居ようね。」

「もちろん。ずうっと一緒だよ。」

ゾロモが言う。

「2体の話を聞いていると、何か馬鹿らしくなってくるわ。何を着ても幸せなんじゃないかな、

この2体なら。」

「そうかも知れないけれど、それをもっともっと綺麗に引き立てて、みんなが羨ましいと感じるほど、素敵にするのがドレッサーの仕事。」

「まり様、さすがです。はい、わかりました。頑張ります。」

「うん、もう一息。」

銭湯の中では、りとがみさの頭を洗っていた。

「他の人の髪を洗うのは初めてだから、さゆみんみたいには上手くいかないかもしれない。」

「大丈夫ですな。有難うですな。」

「本当？」

「大丈夫ですな。」

「髪のこともあるけど、こんな小さいのに、大きな責任を背負わされて。」

「それは生まれたときから覚悟していたですな。その代わりに楽しいこともあるですな。地球に来て、りとちゃん、まりちゃん、ことちゃん、さゆみんと友達になれたですな。」

「それはそうだけど。ねえ、みさちゃん、みさちゃんのお父さんってどんな人、っていうかどんなスクーパーズなの？」

「厳しいスクーパーズですな。デストロイヤーズとの戦争が続いているですな。もう、何億体ものスクーパーズが死んでいるですな。だから今回みたいな酷いことができるですな。」

「でも、みさちゃん。みさちゃんは、スクーパーズ王室は、何百年もこの作戦を続けてきているって言うってだけど。ということは、その戦争の前から続けているんだよね。」

「りとちゃんは厳しいですな。」

「厳しいって。やっぱり、私、きついのかな。」

「そんなことはないですな。素直なだけですな。それはりとちゃんの良いところですよ。」

「ありがとう、みさちゃんがそう言うなら、そう思うことにする。」

「りとちゃんの言う通りですな。今は、この作戦に関しては、みさも知らない秘密があるのかもって思っているですな。そのことも調べてみないといけないですな。」

「みさちゃん、これからも大変そう。」

「仕方がないですな。」

「そういえば、さゆみんが、今度みんなでフットサルの練習をしようと言っていたから、息抜きにやってみる？」

「フットサルですな？」

「うん、サッカーの小さいやつ。足と頭でボールを扱って、相手のゴールにボールを入れると1点というスポーツ。」

「デストロイヤーズがやっているゲームみたいですな。」

「へー、宇宙人もやっているんだ。」

「デストロイヤーズの次の皇帝はフットサルのようなゲームで決めていますな。皇帝候補はチームの監督をするですな。そして優勝したチームの監督が皇帝になるですな。それをずうっと何百年間も続けているですな。」

「そうなんだ。でも、その話を聞くと、デストロイヤーズはとっても平和な宇宙人に聞こえる。次の皇帝をフットサルで決めていて。デストロイヤーズは何でも破壊するひどい宇宙人という話だったけど。」

「そう言われてみればそうですな。うーん、デストロイヤーズに関しても調べてみる必要があるですな。」

「アンドロメダ銀河だよね。」

「行ってみたいですな？」

「ここは行ってみたいだろうね。」

「スクーパーズとデストロイヤーズが平和になったら、みんなで行ってみようですな。」

「分かった。どのくらいかかるの？」

「高速船をチャーターして、片道1カ月ぐらいですな。」

「なんか、大航海時代みたいで楽しそう。」

「みさも、りとちゃんたちがいれば、退屈はしないですな。」

「じゃあ行こう、アンドロメダ銀河。」

「そのためには、デストロイヤーズとの戦争を終わらせないといけないですな。それまでは、地球で待っていて欲しいですな。」

「わかった。手伝えることがあれば手伝うけど、みさちゃんにも立場がありそうだから、無理は言わない。でも危なくなったら呼んでね。それまでは地球で絵を書いている。」

「有難うですな。」

みさは、地球での戦闘を思い返しながら、デストロイヤーズとの戦争にはスクーパーズ側にも非があるのかもしれない。それを正して平和を確立しなくてはいけないと考えていた。

銭湯からの帰りに、ことごと出会った。さゆみんがいろいろなケーキ屋さんに連絡し、ラフォーレにケーキを運ぶように手配をしていた。ここは既製品のケーキに飾りを加えるための材料を買いに出していた。ことが話しかける。

「もう時間がないので、やっぱり大きなウェディングケーキを用意するのは無理みたい。」

「そうですな。」

「小さなケーキならば用意できるので何とかする。」

「それだとケーキ入刀ができないですな。」

りと言おう。

「あの初めての共同作業ですってやつ？いいんじゃない、できなくても。それに、そんなの無くても全然心配いらぬし。できなかつたらできなかつたで、それも思い出になるよ、あの二人なら。」

ことが苦笑しながらみさに答える。

「ケーキ入刀は、バースデーケーキを重ねて飾りを加えて何とかする。」

みさがことにお礼を言う。

「いろいろ有難うですな。」

PARKでは、ケーキ屋への連絡を終えて、ことこの帰りを待っていたさゆみんが、みさがケーキを抱きついたときに落としたアマツマラを手に取りながら、昔のことを思い出していた。

「もう、地球に来て8年か。」

父が謀殺された後、母から引き離され、自分の身も危なくなつて地球に逃げてきたときのことを考えていた。

「お母さんはどうしているかな。みさちゃんにとっては敵だけど、聞いたら今のデストロイヤーズの状況を教えてくれるかもしれない。どうせ、みさちゃんには正体がばれているみたいだし。」

さゆみんは、アマツマラに目を落とした。

「これがあれば、強力な武器が作れるのかな。それで、りとちゃんみたいに強くなつて、お父様の仇が討てたりするのかな。」

少し考えた後、さゆみんは立ち上がった。

「ちよつと使ってみようか。呪文を唱えればいいんだよね。ことちゃんと違つて、武器の作り方は良くわからないけど。」

呪文を唱える。

「Our Friendship is Changed by PARK」

周りが白い光りに包まれた。光が収まると、りと、ことこ、みさが部屋に入つてきた。りとが言う。

「今の光、さゆみん、アマツマラを使ったの？」

さゆみんが慌てて取り繕う。

「ごめんなさい。りとちゃんのまねを試してみたの。」

ことこが言う。

「さゆみん、その衣装、可愛い。」

「えっ、有難う。」

さゆみんは色とりどりのパステルカラーのドレスに包まれていた。

「本当ですな。さゆみんから気品が溢れているですな。」

「あつ、ありがとう。みさちゃんに言ってもらえると嬉しい。」

りと言おう。

「すごい。大きなクレープを作ったんだ。さすが、さゆみん。」

「えっ、クレープ?!」

さゆみんが作ったものの方を見ると、宇宙や原宿の絵でデコレートされた大きなクレープが大きな皿の上に乗っていた。

「ウエディングクレープでしょう。さすが、さゆみん。」

さゆみんもそのクレープを見ながら答える。

「えっ、そうよ。ウエディングクレープ。でも、食べれるかな。」

ことが言う。

「わかった。調べてみるね。」

ことが分析装置を使って調べる。

「うん、大丈夫だよ。成分は完全にクレープの素材に一致している。食べても大丈夫。」

みさが言う。

「可愛いクレープなんですな。これで原宿らしい結婚式ができるですな。ありがとうなんですな。」

「本当。良かった。気に入ってもらえて。じゃあ、運ぶための箱を作るね。」

そう言いながら、さゆみんは箱を集め始めた。りと言おう。

「さゆみん、アマツマラでいろんなクレープを作って売れば、材料費がいらなくて商売が繁盛しそう。」

「うーん、どうだろう。やっぱり自分の手を動かさないと、新しいものができなくなってしまいうそう。」

「そうか。私もやっぱり手を動かして描かないと、絵のアイデアも浮かばない気がする。さゆみんの言う通り。」

みさが、さゆみんの考えに感心して言う。

「なるほどですな。もしかすると、スクーパーズはアマツマラを作って、アマツマラを使い過ぎたためにクリエイティブティーを失ったのかもしれないですな。」

りと言おう。

「そうかも、それにしても、さゆみん、なんか人間のできが違う気がする。」

みさが途中まで言って、言い換える。

「みさも、さゆみんから色々勉強しなくてはいけないと思うですな。元とは言え皇女をしていた……やっぱり、彼氏ができる人は、一味違うんですな。」

さゆみんは、はっとした顔をしたが、そのあとうつすらと笑みを浮かべていた。りと言おう。

「みさちゃん、一言よけい。」

「りとちゃん、顔が怖いんですな。そんなんじゃ、もっと縁遠くなるんですな。」

「みさちゃん、そんなこと言うんだったら、秋葉原に連れて行ってあげないから。」

「ごめんなさい、ごめんなさいですな。」

りとがみさに抱きついて言う。

「わかった、許してあげる。」

しかしここは、別の理由を探し当てていた。

「そういうこともあるかもしれないけど、アマツマラが抽象化して残っていたスクーパーズさんたちの情報を分析してみると、スクーパーズは8百年ぐらい前に創造力を失ったみたいなんだよ。」

「そうなんですな。」

「うん。現在は創造力が少しずつ回復しているみたいだけど。その回復を逆に遡っていくと、800年ぐらいのところで創造力が0になっているの。もし、初めから0のままだったら、他から文明を奪うことさえできない。だから、その前には創造力があつたはず。抽象化された情報が残っていないので不確かなところもあるんだけど。」

「そうですね。800年前ですな。わかったですな。ありがとうございます。とっても参考になるですな。」

「分析した結果は、アルドアにも渡してあるから見てみて。」

「ゼクル、アルドアにその分析結果を口外しないように伝えて欲しいですな。アルドアのためですな。ゼクルもですな。」

「分かりました。今のことは口外致しません。では、アルドアに伝えるために戦艦の方に向かいます。」

ゼクルが出て行った後、みさがここに謝罪する。

「ごめんなさいですな。でも本当にアルドアのためですな。あまり良い予感がしないんですな。」

「わかった。私も気を付ける。じゃあ分析結果は結婚式が終わったらみさちゃんに直接渡すね。」

「有難うですな。それでは、リコとジャモチャの結婚式に向かうですな。」

大きなクレープは、さゆみんが複数の箱を組み合わせて大きな箱を作って、その中にしまわれていた。さゆみんも言う。

「では、出発しましょう。」

「うん。」「わかった。」「わかったですな。」

りと、ことこ、みさ、さゆみんがクレープが入った箱を台車に載せて、ラフォーレに向かって台車を押していった。

ラフォーレ原宿6階のホールでは、リコとジャモチャの結婚式が始まろうとしていた。スクーパーズ十人前結婚式で、披露宴と兼ねているものである。みさ、エビふりゃー、ガーチューンなどは、響首相、外務大臣、官房長官などの政府関係者の席についていた。りと、まり、ことこ、

さゆみんは、ガジメ、ゼクール、ゾロモ、パドなどと友人席についていた。

音楽が鳴り、リコとジャモチャが入場してきた。会場にスクーパーズたちの歓声が漏れた。そして、人間の拍手とスクーパーズがビーム発射部を回す音が響いた。ガジメが言う。

「すごいな、ジャモチャが服を着ている。服を着ているスクーパーズは初めて見たが、なんだか立派でしっかりしているように見える。」

パドが言う。

「リコもすごい綺麗だ。あんなに美スクーパーズだったけ。」

ゾロモがまりに話しかける。

「まり様の言った通り！すごい歓声。リコもジャモチャもすごい立派に見える。」

「やったわね、私たち。」

「はい。」

ガーチューンによる2体の紹介の後、響首相が祝辞を述べた。自分の結婚に関するエピソードや、これからのスクーパーズと日本との友好関係の象徴になり喜ばしいことなどを話した。りとは来賓のスピーチの間、会場の様子をスケッチしていた。スピーチの最後は、みさが地球に迷惑をかけたことをお詫びし、二体の結婚式を地球で開くことができることを感謝した。そして、リコとジャモチャに、結婚の誓いをするを促した。

「わたくしリコと、」

「わたくしジャモチャは、」

「健やかなときも、病めるときも、お互いを支えあえ、一生いっしょに協力していくことを、この会場にいらっしやる地球の皆様とスクーパーズの皆さまに誓います。」

司会者が言う。

「それでは、今の誓いのスクープビーム交換で確かにしたいと思います。」

リコとジャモチャが向かい合いあった。

「リコ」

「ジャモチャ」

お互いにビームを吸引モードで発射して、一生添い遂げることを誓った。会場では、また拍手とビーム発射部を回す音が響いた。司会者が言う。

「皆様の祝福のもと、リコさんとジャモチャさんの結婚誓いが無事に行われ、お二人は夫婦となられました。それでは、結婚して初めての共同作業です。」

りとがつぶやく。

「きたよ。」

司会者が続ける。

「わたくしは35年間、ルナセルモの結婚式場で司会を務めてきましたが、ウエディングクレープというのは初めてございます。見て下さい。この立派で可愛いクレープを。」

拍手と発射部を回す音が響く。さゆみんがここに話しかける。

「良かった。好評みたいで。」

「うん、みんな原宿らしいって言っているよー。」

「うーん、それは誉め言葉かな？ただ、もの珍しいって意味だったり。」

「個性的という意味とは思うけど。でも、さゆみんのクレープは美味しいから大丈夫だよ。」

「有難う。スクーパーズさん向けのクレープはグルメのイワタさんから助言をもらいながらだいぶ研究したから自信がある。」

「人間向けはもとからバッチリだしね。」

「じゃあ、こんどお店で商品化して見ようかな。ウエディングクレープ。」

「うん、原宿での結婚式には人気になるかも。」

「そうだと、嬉しい。」

司会者が話を続ける。

「まさに、原宿らしい結婚式です。それでは、リコさんジャモチャさん、スクープビーム使用での入刀をお願いします。」

リコとジャモチャがスクープビームでクレープを上手に切った。ガジメが言う。

「リコとジャモチャ、上手に切るな。まだまだビームが弱いからか。りと様ならば、どんなに力を加減しても、机ごと切れてしまいそうだが。」

ゼクールが答える。

「いえいえ、今のりと様ならばこの建物ごと真っ二つです。」

まりが苦笑しながら、りとに言う。

「ガジメさんとゼクールさんは、りとを誉めて言っているみたいだよ。」

「そんな感じは、何となくするけれど。」

まりがりとを思いやって、ゼクールとガジメに言う。

「二人とも、レディーに向かって失礼よ。」

ゼクールが答える。

「りと様、これは失礼しました。この惑星ごと真っ二つですね。」

りとが答える。

「そんなこと言うんだったら、ゼクール、次の訓練、覚えていなさいよ。」

「はい、殺す気で来てください。王女様には強い敵がいっぱいいます。僕が強くならないと。」

「そっか、そうだよ。ゼクールは真っ直ぐだもんね。で、ゼクールはみさちゃんと結婚したいの？」

「とっ、とっ、とんでもない。身分が違います。結婚はできません。護衛役になればそれです。」

「そんなことは聞いていないよ。みさちゃんと結婚したいのしたくないの。したいなら、身分を乗り越えて結婚できるよう、ゼクールに協力してもいいよ。」

ゼクールには返す言葉がなかった。まりがりとに落ち着くように言う。

「スクーパーズの社会にはスクーパーズの決まりがあるんじゃないの。無理を言ったら真面目なゼクールが可愛そうよ。」

「そうかな。私がゼクールで、みさちゃんも望んでいるなら、例え他の全スクーパーズと戦っても、みさちゃんと結婚しようとするけど。」

「りとはそうかも。でも、あんまりゼクールを炊きつけると、ゼクールが大変なことになるかもしれないわよ。」

「そのときは、私もみさちゃんとゼクールのために、ゼクールといっしょに戦うよ。」

「りとはもう！私は戦うのはもういや。」

「だって、その方がみさちゃんのためになる気がして。」

ゼクールが答えた。

「りと様、有難うございます。ただ王女様はまだお若いです。考える時間はまだまだあります。まりも言う。」

「お若いというより、まだ幼女よね。今、結婚なんて言ったら、ゼクールがロリコンになってしまうわ。」

「それもそうか。みさちゃん、話しが大人びているから勘違いしちゃった。わかった。でもゼクール、そのことで私の力が必要だったらいつでも呼んで。駆けつけるから。」

「わかりました。そういう事態になりましたら、恐縮ながらお力をお借りしたいと思います。」

ゼクールはそう答えながら、別のことを考えていた。

「王女様のおっしゃる通りだ。うかつに、りと様のお力をお借りしてはいけないな。」

一方、みさのテーブルではみさが響首相に行方不明になったスクーパーズ兵について尋ねていた。

「響首相、お尋ねしたいことがあるですな。」

「何でございましょう。」

「2体の隊員が行方不明になっているですな。連隊の方では、時間までに隊に戻らず、脱走したのではないかと考えているようですな。」

「それはご心配でしょう。探すお手伝いならば、どんなことでも致します。ただ、私たちの力では、たとえ1体と言えども拘束することはできません。2体を発見した場合、お伝えすることがあれば、頂いた翻訳装置を使って呼びかけたいと思います。」

「響首相のおっしゃる通りですな。単なる行方不明ならば、スクーパーズの生体信号をスキャンすればすぐに探せるですな。でも2体は技術将校ですな。自分たちの生体信号をキャンセルさせ

て、自らの意思で隠れているようすな。」

「そうですか。」

「もし、2体を発見した場合、次のことを伝えて欲しいですな。2体の逃亡に関しては不問にすることをみさ王女が確約するですな。だから、みさのところに来て欲しいですな。そこで、今後について話すですな。」

「分かりました。2体を発見することがありましたら、その旨をお伝えするですな。」

披露宴は、二人の成長のビデオの紹介、趣味の紹介、お色直し、ガジメのスピーチ、りとが2人を描いた絵の紹介、響首相によるバイオリンの演奏などが行われ、最後にリコとジャモチャのスピーチで無事に閉会となった。その後、全員で記念写真を撮影した。真ん中にリコとジャモチャ、両側にみさ、派遣軍首脳と響首相と政府関係者、後にりとやガジメなどの友人が並んだ。りとが残念そうにまりに言う。

「本当は、前からスケッチしたいけれど。」

「今回はりとも大事な招待客だから。」

「わかっている。だから今はこの雰囲気覚えて、あとで写真を見ながら描いてみる。」

「それがいいわね。」

写真撮影のあと、響首相がりと達に話しかけた。

「みさ王女様から、皆様のお力があってスクーパーズと人間が和解できたと聞いています。詳細は軍事上の機密とのことですが、ご協力有難うございます。りとが驚きながら答える。

「あっ、はい。有難うございます。」

「皆様の安全に関しては、みさ王女様が確約しました。これからも、スクーパーズと仲良く協力関係を発展させていって下さい。」

「はい、スクーパーズも実は良い人というかスクーパーズばかりでももちろんそのつもりです。さゆみんも答える。

「心配なさらなくても、りとちゃん、まりちゃん、ことちゃんが在る限り、スクーパーズが地球に手出しすることはないと思います。」

首相が笑いながら答える。

「それはそれは。頼もしいことです。」

りとがお礼を言う。

「あの原宿をスクーパーズ特区にして頂いて有難うございます。これで、みさちゃん達と遊ぶ…、えーと、協力関係を発展させて行くことができますでございます。」

「りとちゃん、エビふりャーよりおかしくなっているわよ。」

「ごめんなさい。あの、有難うございます。」

首相が答える。

「いえ、スクーパーズとの交流は人類に大きな発展をもたらします。そのことで、もし要望などありましたら、私の秘書まで連絡してください。私が最優先で取り組みます。」

首相の秘書が4人に名刺を渡した。首相が挨拶をする。

「次の会議がありまして、みさ王女様にお別れの挨拶をしてから官邸に戻ります。」  
4人が挨拶を返した。

「お疲れ様でした。」

首相がみさの方に向かって行った。りとが名刺を見ながらつぶやく。

「首相さんの名前を聞き忘れちゃった。これは秘書さんの名刺だし。」  
それを聞いた3人が苦笑していた。

原宿でリコとジャモチャの結婚式が執り行われる少し前、アトランタの米軍墓地の中で、スクーパーズに対してB2爆撃機で出撃し戦死したデーブ・ライアン大佐の墓の前に、ダグラス・ルメイ中将、アーノルド・ヤマモト大佐が立っていた。そして、ライアン大佐に戦争が終わったことを報告していた。ルメイが墓に向かって語りかける。

「デーブ、昨日、スクーパーズとアメリカ合衆国の講和が成立した。こちらが戦争に勝ったわけではないのに、スクーパーズ側が方法が間違っていたと謝罪し、補償をまとめて講和したんだ。」  
ヤマモトが続ける。

「うやむやの解決になった。責任の追及はできなかった。2万人以上のアメリカ軍人が戦死して、1万人近い一般市民が死亡したのに、政治家の連中はアメリカの国家予算100年分の金やプラチナをもらって大喜びさ。」

「ヤマモト、それは力の差から言って仕方がないことだ。王女が謝罪と補償するだけでも、なかなかできることじゃない。それに、王女はまだ幼少だ。スクーパーズ王の命令に従ったにすぎないというのは本当だろう。」

「それはそうです。」

「そう、今回の戦闘の責任は、すべてスクーパーズ王にある。だから、私はスクーパーズ王だけは絶対に許すつもりはない。」

「しかし、中将がおっしゃった通り力の差が圧倒的です。」

「ああ、現状の戦力では全く話しにならない。それでも、我々は近々に合衆国銀河軍（United States Galaxy Force、USGS）を創設することが決まっている。」

「そうなんですか？スクーパーズは、補償の一環として医療に関する技術を供与するが、それ以外の技術は供与しないという話ですが。」

「これはまだ極秘だが、日本で投降したスクーパーズの脱走兵がいるらしい。それも技術将校という話だ。彼らから、超高速飛行や武器に関する情報を得ている。それを元に設立する予定だ。」  
「本当ですか。それは素晴らしいことです。」

「艦隊が創設されたら、お前にも、頑張ってもらわなくてはいけない。」

「もちろん、喜んでお供します。」

「今度は、世界の果てではなくて、銀河の彼方になるかもしれないぞ。」

「はい、デーブのためにも覚悟の上です。」

「しかしだ、アメリカ合衆国の実力ではどう頑張っても、2艦隊の維持が精一杯だ。スクーパーズは50を越える艦隊を持っている。アンドロメダ銀河のデストロイヤーズとの実戦経験も豊富だ。」

「本当にいるのですか、アンドロメダ銀河のデストロイヤーズ？」

「ああ、脱走兵からの話でも本当らしい。デストロイヤーズも、やはり50以上の艦隊を保有しているということだ。その他に、大マゼラン銀河、小マゼラン銀河にも勢力があつて、かなり混沌としている状況らしい。今のところ、我々の力ではそれを確かめることもできないが。」

「地球の外も大変なんですね。」

「我々が銀河間の戦闘に巻き込まれてこなかったのは、残念ながら、数億体のスクーパーズの犠牲のおかげなのかもしれない。」

「スクーパーズも楽ではないわけですね。」

「その通りだ。だから考えてる。確かにスクーパーズ王は絶対に許せない。ただ、王女はこんなことが二度と起きないように尽力すると言っている。こんな無力な我々に謝罪して言うことだ。その話も嘘ではないだろう。」

「根は悪い人というか、悪いスクーパーズではなさそうに見えます。そうすると、我々はスクーパーズに加勢して、デストロイヤーズと戦うことになるのでしょうか。」

「それも考えられる。それに、王女様はスクーパーズの民主化を考えたいということで、ワシントンやトーマスの本を読んでいるということだ。」

「それはそれは。」

「1000年近く、スクーパーズはずうっと王制だったようだ。民主制という概念すらなかった。それを地球で知って、日本の首相や天皇に進められて、地球の民主制に関して勉強することにしたそうだ。」

「圧倒的な科学技術力があるのに、発展がちぐはぐなんですね。」

「そうだろうな。科学技術は我々より遥かに進んでいるわけだから。強力な中央集権体制が続いているというのは、デストロイヤーズとの戦争で多くの犠牲を出しているということが問題なのかもしれない。」

「その争いが終われば、スクーパーズも変わるかもしれないね。」

「そう。ただ、その中で古い考えのスクーパーズと新しい考えのスクーパーズが対立することも考えられる。もし、王女と王が対立することがあれば、王女側を支援する側につくということも考えておかないと。」

「それができれば、アメリカの理想とする自由と民主主義を宇宙に広げることができます。それはアメリカ国民の責務です。」

「そうだな。ヤマモトの言う通りだ。ただ、スクーパーズ内部での闘争、デストロイヤーズとの戦争や他の銀河との軋轢、そんなに簡単にことが運ぶか分からない。」

「おっしゃる通りです。」

「だがヤマモト、戦死したデーブ達には申し訳ないが、俺は遠い宇宙に行けることへの期待を止めることができない。この一件もその足掛かりならば・・・と思ってしまう。」

「私もそうです。何万光年の彼方にいけるなんて夢にも思わなかったです。」

ルメイがデーブの墓を見ながら言う。

「デーブ、お前も宇宙に連れて行きたかった。」

「おっしゃる通りです。戦闘指揮ではデーブに敵うやつはいません。」

「ああ。」

二人がジョンの墓を見守る中、アトランタの夕日が落ちて行った。

日曜日の早朝、りと、まり、ことこ、みさ、さゆみんが河原のフットサル場で、フットサルの練習をしていた。5人でフットサルの練習をするのは、もうかれこれ4回目である。りとがゴールに向けて強烈なシュートを放つ。それをさゆみんが難なく抑える。さゆみんがりとに叫ぶ。

「ナイスシュート！」

りとも返事をする。

「ナイスキープ！さすが、彼氏さんのチームで試合に出ているだけのことはありますね。」

「ありがとう。でもりとちゃん、まだ本気じゃないでしょう。もっと強く蹴ってもいいわよ。」

「わかった。でも、万が一さゆみんに怪我させちゃうと彼氏さんに恨まれそうで。」

「カレーパーティーの時も言ったけど、彼のチームでも、まだ失点0なのよ。」

それを聞いた、まりが言う。

「さすがですよね。ゴール前の女神様って感じですね。」

「えへへ。彼に一生うちのチームのゴールを守ってくれないかって言われているの。」

「なんですかそれ。プロポーズのような全然関係ないような。」

「そうなのよ。なんなんだろうね。」

「うーん。さゆみんが分からないんですたら、私たちにも分からないですよ。」

「はー。」

「でも、そんな悩みがあるだけ私たちには羨ましいです。」

「そんな、まりちゃん。他人事だと思って。」

「いえ、なんにもない人からすれば羨ましい限りです。」

「大丈夫。まりちゃんの前には世界一素敵な人が現れるって。」

「また、他人事だと思って。」

「でも、今回のことで、りとちゃんの前には本当に宇宙一素敵な人が現れるんじゃないかと思っ  
たわ。」

「それ本当にありそうですね。もしかすると、人ではないかもしれませんがね。」  
笑っている2人にりとが言う。

「もう、二人とも他人事だと思って。」

まりとさゆみんがさらに大きな声で笑った。笑いが収まったころ、ことがまりに話しかける。

「笑いごとでなくて、りとちゃんのシュート、時速300キロは出ている。」

「人間業じゃないわね。」

「スクーパーズとの戦闘時にアマツマラの情報投射で強化された体が一部定着しているみたい。  
まりちゃんのシュートも、プロサッカー選手より速いよ。」

「私もなの。」

「うん。」

「そうか。それにしても、そのシュートを難なく抑えるさゆみんもすごい。」

「その理由がよく分からないの。原宿の囲いの中にいたので、何らかの影響を受けたのかもしれないけど、さゆみん、調べさせてくれないし。」

「それは分かる。さゆみんは、普通の女性だから調べられるのはいやだと思うよ。」

「そうなの？」

「そうよ。ことはそんなんだから、学校で友達ができなかったんでしょ。」

「えー。まりちゃんひどい。でも、そうなんだ。」

「変なことを言っ、ごめんね、ことこ。でも本当だと思う。」

「有難う。まりちゃん。本当のことを言ってくれて。みんな理由を言ってくれないから。これか  
らも何でも言っ、まりちゃん。まりちゃんのこと信じるから。」

「有難う。ことこなら、私の体は調べてもいいわよ。信用できるし、やっぱり心配もあるし。」

「私もまりちゃんのこと心配だから、これからは時々チェックするね。それで異常があったら  
すぐ言うよ。」

「有難う。」

「りとちゃんも、あまり気にしないで調べさせてくれる。」

「りとだからね。あつ、これはいい意味で言っているのよ。」

「うん、分かっている。」

隣のコートを見ていたりどが、まりに呼びかける。

「まり、こっちに来て。ワンツリーリターンの練習をしよう。」

「わかった。今行く。」

まりがことこに言う。

「りとみたいに楽しまなくちゃね。行こう。」

「そうだね、行こう。」

ことことみさが守りで、りととまりでワンツリーターンの練習を始めた。

「まり、行くよ。」

「いつでも来て。」

ボールが守りの1人と1体を縫うように通って、ワンツリーターンを決め、りとがシュートした。しかし、ゴールポスト際のシュートをさゆみんが抑えた。

「ナイスワンツー！シュートのコースもいいわ！」

「ナイスキープ！さすがさゆみん。さゆみんからゴールを奪うのは大変そう。あと、まりのパスも最高だったよ！」

まりが答える。

「ありがとう！」

みさがここに尋ねる。

「何が起きたんですな？全然分からなかったですな。」

「これがワンツリーターンって言うんだよ。」

そんな楽しそうな話し声がグラウンドに響いた。少しして休憩時間になった。りとがみんなに話しかける。

「私たちも試合をしてみたいね。」

まりが答える。

「まだ、早いんじゃない。」

「そうかな。」

また、りとが隣のコートを見た。そこでは、中学生ぐらいの男子5人と大人1人でフットサルの練習をしていた。そして、みんなに提案した。

「隣で男子中学生が練習をしているみたいだから、試合を申し込んでみようか。中学生なら、大丈夫じゃない。」

「そうじゃなくて、りとだと相手を怪我させるかもしれない。」

「大丈夫だって。力はちゃんとセーブするから。」

さゆみんも言う。

「りとちゃん、さつきからずうっとセーブしていたんでしょ。」

「そうだけど。」

ことが平然と言う。

「やっぱり、りとちゃん、半分も力を出していない感じかな。」  
りとが言う。

「わかった、もっとセーブするから。」

さゆみんが言う。

「見ている限り、向こうのシュートもかなり速いから、ちゃんとセーブするならば大丈夫だとは思うけど。」

「有難う。さゆみん！ちょっと声をかけてくるね。」

そう言ったりとは隣のコートに向かつて行った。まりが心配そうに見ていた。

となりのコートに着いた色白で金髪の少年に声をかけた。

「君たち、中学生？練習だけだと思わないでしょう。お姉さんたちと試合しない？」

少年は少し驚いたような顔をしたが、すぐに、金髪の少年が答える。

「わかりました。みんなと相談してみます。」

少年のチームが集まって相談を始めた。

「となりの女性のフットサルチームが試合を申し込んできた。」

「何を考えているんだアムロディー。話しにならない。地球人じゃ俺たちの相手になるわけじゃないか。地球人とデストロイヤーズでは基礎体力が全く違うし、俺たちはデストロイヤーズの中でも2番目に強いチームなんだよ。」

「それはそうだけど。僕は試合してもいいと思う。それは、やっぱり、地球人との親善になるから。」

「アムロディーは甘いな。少しでも相手になりそうならばいいよ。ちょっとテストしてみる。」

「わかった。みんなも、ベルシウスがテストをしてそれに受かったら試合をするということではないかい。」

全員がうなずいたのを見たベルシウスがりとに話しかけた。

「わかった。僕からボールを取れたらいいよ。」

りとが答える。

「本当に。わかった。じゃあ、スタートの号令をかけて。」

「わかった。じゃあスタート！」

ベルシウスがボールを右後ろに回そうとした瞬間にりとが動いて軽々とボールを取るのに成功した。ベルシウスが呻いた。

「えっ?!」

りとがいう。

「ボールを取ったよ。試合してくれるかな。」

「わっ、わかった。我々に二言はない。」

それをぼんやり見ていたアムロディーが思う。

「なんだ？ベルシウス、わざと取らせたのか。あんなことを言っている、地球人に興味があるのかな。それとも親善をしたいのか。まあ、どちらにしても、狭い宇宙艦の中は息が詰まるから、みんなの息抜きになるといい。」

りが残っていたメンバーを呼んだ。

「試合してくれるって。みんな、こっち来て。」

4人がやってきた。

「試合してくれるって。」

まりとさゆみんがりとに釘をさした。

「良かった。でも相手は中学生、絶対に手加減しないとだめよ。」

「まりちゃんの言っていることは本当よ。ごめんなさい。でも相手にケガさせたら大変だから。」

「二人とも、わかっているって。任せて。」

キャプテンのまりが配置を伝える。

「じゃあ、みさちゃんがビヴォ（フォワード）。」

みさが答える。

「攻撃の主力はりとちゃんですな。そのこぼれ球を狙うですな。」

「その通り。みさちゃんには、期待しているよ。ただ、相手とぶつかるようなことは避けてね。」

「心配ないですな。この姿は擬態しているだけですな。大げがをしても、スクーパーズコアさえ大丈夫なら、何度でも擬態しなおせるですな。」

「わかったわ。でも気を付けて。ここがフィクソ（リベロ）。後ろから指示をお願いね。」

「わかった。」

「で、守護神さゆみんがゴレイロ（ゴールキーパー）ね。」

「無失点記録を続けてみせるわ。」

「で、りとと私がアラ（サイドバック）」

「まり、中学生に私たちの連携技を見せてやろう。あと、キャプテンは任せた。」

「本当はりとがキャプテンがいんだけど。」

「それはないよ。みんなの状況を見るのはまりが優れている。」

「ここも言う。」

「私も、周りが見えなくなっちゃうことがあるし。」

「ありがとう。わかった頑張る。」

フィールドの反対側ではアムロデイのチームが円陣を組んでいた。

「いつもの通りいくよ。ゴレイロはテザーン、フィクソがガン、ビヴォがミヤブサ、アラがベルシウスと僕だ。相手の実力が分からないから、最初は様子を見ながら始めよう。」

4名が答える。

「はい。」

「じゃ、いくぞ。」

そう言いながら、コートの方に向かった。

りとがアムロデイに声をかけた。

「準備はいい？」

「ああ、こっちはいつでもOKだよ。」

「審判は、あの監督さん？にお願いしていいかな。」

「監督？監督ね？そう監督。」

アムロディーが監督のような人に声をかけて、審判をお願いした。

「審判をお願いできますか。」

「ああ、もちろん。でも、あの、気を付けてくれよ。」

「わかっています。」

りの方を見て言う。

「引き受けてくれるって。先攻後攻はどうする。こっちはどっちでもいい。」

「じゃあ、こちらが先攻。コートをどっちにするかは決めていいよ。」

「わかった。こちらにしようかな。」

「了解。」

りどがみんなに言う。

「こっちが先攻でサイドはこっち。全員、持ち場について。」

アムロディーも自分のメンバーに言う。

「最初が守備で、サイドはこちら側だ。全員、怪我をさせないように気を付けて。」

りどとまりがセンターサークルに入った。さゆみんがゴール前に立った。以下の説明で、左と右はさゆみんから見たものとする。さゆみんの少し前にことこ、まりがセンターでキックオフの位置、りどがまりの左側、みさが少し離れた右側に位置した。一方、アムロディーのチームは、中央前にベルシウス、その後ろ、さゆみんから見て左側にアムロディー、右側にミヤブサ、ゴール前にテザン、その少し前にガーンが位置した。審判が尋ねる。

「両チームとも準備はいいですか。」

りどがわくわくしながら答える。

「OKです。」

アムロディーも長い艦内生活から地上に降りて、少し解放的な気分になっていた。

「はい、艦長じゃなかった、監督大丈夫です。」

審判が答えた。

「それでは、チームゼウラと、えーと、何というチームでしたっけ。」

審判がまりの方を見て尋ねた。

「えーと、チームPARK！」

「ありがとう。それでは仕切り直して、チームPARKとチームゼウラとの親善試合を始めます。」

審判がホイッスルを吹いた。

「まりからりとへのパスで試合が始まった。ベルシウスが前進するりとのマークに入る。りとは、あつというまに3回フェイントをかけて、ベルシウスを右からかわす。アムロディーがりとのマークにつく。」

「フェイントが速いな。だが、僕はそんなフェイントじゃ抜けないよ。」

アムロディーの前でりとがフェイントをかける。アムロディーはそのフェイントについていくが、りとはフェイントをかけながら右にパス。フェイントで抜くと思っていたアムロディーがつぶやく。

「おっ。」

りとは左からアムロディーを抜くと、ボールがまりから戻ってきてそれを受け取る。アムロディーがつぶやいた。

「ワンツーリターン。綺麗に決めたね。そんなことを言っている場合じゃないか。あの選手を追わないと。」

アムロディーは後ろからりとを追う。ガンもりとに迫るがりとの方が早くゴールのそばまで迫っていた。りとがまりとさゆみんの言ったことを思い出した。

「近いからシュートは軽くと。」

りとは軽くシュートをゴール隅に放った。それでも時速150キロメートルは越えていた。キーパーはそれに反応して難なくキャッチした。勢いがついていたりとはキーパーのすぐ前で止まった。りとがキーパーに話しかけた。

「すごい速い反応。もしかすると、さゆみん、えーと、うちのキーパーより反応は速いかも。」

「そうか。それより、お前、手加減しなくていいぞ。」

「えっ。ごめん。その、まり、キャプテンが怪我をさせちゃうから手加減しろって。」

「そうか。体が小さいからそう見えるかもしれないが、お前たちよりずっと体は強い。手加減せずに打ってこい。」

「わかった。今度は手加減せずに打つよ。」

「ああ。」

このとき、ベルシウスがアムロディーに話しかけていた。

「あの選手の動き、我々に劣ると言うことはなかった。地球人のデータが間違っているんじゃないか。」

「我々が持っている地球人のデータは、開戦前にスクーパーズからもらったものだから。うん、あまりあてにできないのかもしれないな。」

「もしかすると、外見が似ているし、ビームを発することができない以外は、我々と同じぐらいの能力があるのかも。」

「そうだね。でも面白くなってきたじゃないか。手加減をしなくても済みそうだ。」

「よし、今度はこっちの番だ。」

「ああ、こっちもコンビブレイでお返した。」  
チームPARKが自分のサイドに戻って行った。夏の青空の下、全員、フットサルに夢中になれ  
そうな予感で意気が上がっていた。

スクーパーズ来襲編完